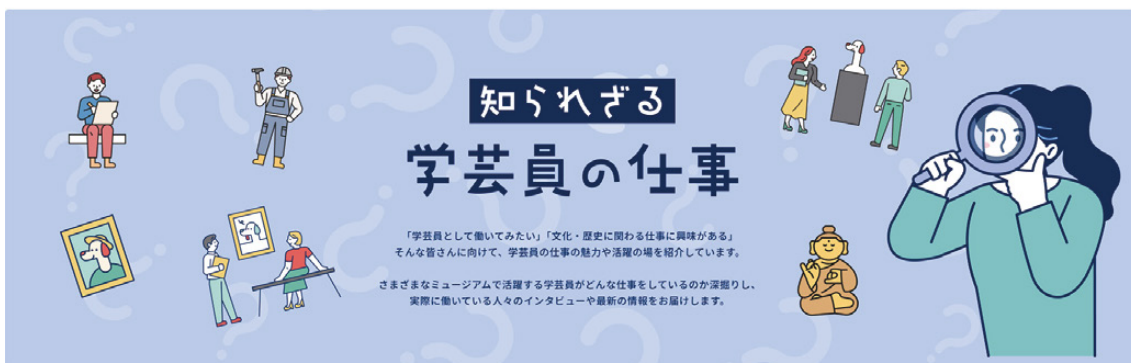


# 神奈川県博物館協会会報

## 第97号

新着情報 [ぐるりかながわミュージアムガイド](#) [学芸員の仕事](#) [神奈川県博物館協会について](#) [協会刊行物](#) 事務局 Tel. 045-201-0926 [お問い合わせ](#)



### 知れざる 学芸員の仕事

「学芸員として働いてみたい」「文化・歴史に関わる仕事に興味がある」そんな皆さんに向けて、学芸員の仕事の魅力や活躍の場を紹介しています。

さまざまなミュージアムで活躍する学芸員がどんな仕事をしているのか深掘りし、実際に働いている人々のインタビューや最新の情報をお届けします。

### ぐるり かながわ ミュージアムガイド



2026

# 神奈川県博物館協会

## 表紙解説

2025年、神奈川県博物館協会は設立70周年を迎え、周年事業としてウェブページをリニューアルしました。それに伴い、加盟館園のさまざまな分野の学芸員が実際の仕事の様子を紹介する「学芸員の仕事」というページを新設しました。また、これまでポスターやリーフレットの形で加盟館園へ配布していた「ぐるりかながわミュージアムガイド」をウェブページに組み入れることで、いつでもどこからでも、簡便に情報にアクセスできるようになりました。これまで以上に多くの方々に当協会のウェブページを活用していただけることを期待しています。

折原 貴道（神奈川県立生命の星・地球博物館）

目 次

特集 博物館と学校連携について

一般参加型シンポジウム 「博物館と学校連携について ～博物館の使い方～」の開催について	高中健一郎 …………… (1)
様々な学校連携活動 —横浜市歴史博物館を事例に—	刈田 均 …………… (3)
学校収蔵資料を用いた企画展の開催と博学連携のあり方について	土屋 健作 …………… (8)
高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう	秋山 幸也 …………… (10)
市教委等既存事業を組み入れた新しい博物館イベント 《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状	内船 俊樹 …………… (14)
これからの博学連携事業の可能性—高校歴史教員からのコメント—	風間 洋 …………… (19)
学校と博物館の連携で生まれる学び	山田 恵里 …………… (22)

寄稿

占領期新興新聞資料の価値と可能性	工藤 路江 …………… (23)
戦後 80 年 太平洋戦争関係所蔵資料データ等の公開について	島宗美知子 …………… (27)
今日における博物館紀要等刊行物の流通に対する一考察 —大磯町郷土資料館を事例として—	真保 元 …………… (33)
博物館機能をもつ町立観光施設による町外県立高校図書館展示の意義と実践 山川隆良・小笹直人・鈴木聖美 …………… (38)	

研修会

令和 6 年度 第 5 回研修会 シンポジウム 「博物館と学校連携について ～博物館の使い方～」参加記	市野 悦子 …………… (41)
令和 7 年度 第 1 回研修会 「神奈川県立生命の星・地球博物館におけるインクルーシブな企画展の取り組みと 特別展示室の照明更新について」に参加して	亀ヶ谷千尋 …………… (44)
令和 7 年度 第 2 回研修会 「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」参加記	加藤 志帆 …………… (47)
令和 7 年度 第 3 回研修会 『博物館の連携事業～巡回展、共通テーマによる展示、館外連携の事例紹介～』に参加して	町田 勇樹 …………… (51)
令和 7 年度 第 4 回研修会 相模原市立博物館のリニューアルしたプラネタリウムの見学と解説に参加して	柴野 達彦 …………… (54)

協会記事

総合防災計画活動報告	武田周一郎 …………… (56)
令和 6 年度事業報告	事務局 …………… (58)
神奈川県博物館協会役員名簿 …………… (63)	
神奈川県博物館協会部会幹事・事務局名簿 …………… (64)	
神奈川県博物館協会会則 …………… (66)	
神奈川県博物館協会総合防災計画 …………… (68)	
神奈川県博物館協会災害時相互救済活動要綱 …………… (69)	
神奈川県博物館協会総合防災計画に基づく積立金の取り扱いに関する要綱 …………… (70)	
神奈川県博物館協会加盟館園名簿 …………… (71)	

Kanagawa-ken Museum Gazette Vol.97 (2026)

Contents

Featured Articles : Collaboration between schools and museums

- Public participation symposium "Collaboration between schools and museums:  
how to use museums" Ken-ichiro Takanaka ..... (1)
- Various collaborative activities between schools and museums:  
the case of the Yokohama History Museum Hitoshi Karita ..... (3)
- Exhibition using materials stored at the schools and future prospects Kensaku Tsuchiya ..... (8)
- Collaboration between high schools and museums  
— Actively participate in school club activities Koya Akiyama ..... (10)
- The background and current status of a new event at the museum,  
"Everyone's Science Festival," which incorporates existing projects organized  
by the City Board of Education and others Toshiki Uchifune ..... (14)
- The potential of the future collaboration between schools and museums  
— from the view of a high school history teacher Hiroshi Kazama ..... (19)
- New way of learning created through the collaboration  
between schools and museums Eri Yamada ..... (22)

Notes

- The value and potential of newspaper collections launched during the occupation  
in the humanities and social sciences Michie Kudo ..... (23)
- 80 years after the war:  
Disclosure of data on materials related to the Pacific War Michiko Shimamune ..... (27)
- A study on the distribution of museum bulletins and other publications today  
— taking the Oiso Town Local History Museum as a case study Hajime Shimbo ..... (33)
- Significance and practice of exhibitions in prefectural high school libraries outside the town,  
led by a municipal tourism facility with museum functions  
Takayoshi Yamakawa *et al.* ..... (38)

Participation Notes

Annual Reports

- General disaster prevention plan of the Kanagawa Museum Association  
Shuichiro Takeda ..... (56)
- Business report of the previous fiscal year ..... (58)
- Officers of the Kanagawa Museum Association ..... (63)
- Coordinators of the Kanagawa Museum Association ..... (64)
- Regulations of the Kanagawa Museum Association ..... (66)
- Members of the Kanagawa Museum Association ..... (71)

Cover story and postscript

Takamichi Orihara

## 一般参加型シンポジウム 「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」の開催について

かわさき宙と緑の科学館 自然・科学担当学芸員 高中健一郎

### シンポジウム開催趣旨

一般の方が博物館をイメージした際、様々なものが展示されている施設という想像をされる方が多い印象がある。実際に当館のバックヤードツアー等のイベントで、参加者に対し博物館がどのようなことをやっている施設かについて質問をすると、最初に「展示」と回答されるケースが多く、次いで一般の方が参加する教室等のイベントである「教育普及」が挙がる。

博物館の役割には、資料の収集保存、展示、調査研究、教育普及などがあり、博物館法第三条において、学校と協力し、その活動を援助することと定められているように、一般向けのイベント以外にも、小学校、中学校、高等学校等の学校団体との連携事業を行っている。著者の所属館でも地層の観察、林の観察、プラネタリウム学習投影、総合的な学習の時間支援など、学校向けのコンテンツを小・中・高等学校等の依頼に基づき実施している。神奈川県博物館協会の加盟館園においても、自然科学、人文科学等の博物館が対応している分野によって、持ち合わせている学校向けのコンテンツに違いがあり、また加盟館園が位置する市区町村の規模によって、対応する学校数に差があるなど、その事業内容には様々な要素が含まれるが、状況に合わせ、児童・生徒向けの展示解説や出前教室等、それぞれの館園で学校での学びが深まる一助となるような工夫をしながら取り組んでいる。一方で、学校の先生方の中には、学習単元に割り当てる時間数や行事などの学校の状況、従来の施設見学以外に博物館を利用したことがないなどの理由から博物館との関わり方がわからず、なかなか博物館の利用に踏み切れていないこともあるかと思う。

本シンポジウムでは、神奈川県博物館協会の加盟館園向け、学校関係者向け、一般の方向けの3方向へ博学連携の実態を伝えることを開催の趣旨とした。詳細については以下に記す。まず加盟館

園には、他館がどのような学校向けコンテンツを持ち合わせ、どのように対応しているのかについて事例を紹介することで、事例を聞いた各館園の職員が所属館で実施している学校向けコンテンツとすりあわせ、実施可能なものを取り入れる、新たなコンテンツを組立てる際のアイデアの一つとするなど、学校向けのコンテンツを考えるきっかけとする。次いで、学校関係者には、博物館と学校連携の事例から博物館をどのように利用できるのかを知らせ、今後、博物館の利用を考える際に選択肢の幅を広げる一案とする。最後に、一般の方には、博物館がどのように地域の学校と関わり、児童・生徒たちにとって自身の地域を知るなどの学びの場として利用されているといった博物館が持つ役割を知らせる機会とする。

### プログラムの組立てと学校関係者への周知

シンポジウムの開催に向けて、神奈川県博物館協会合同部会の幹事で意見を出し合い、博学連携の事例紹介には自然科学、人文科学の両分野における事例を入れ込むこと、小学校、中学校、高等学校の各世代に対しての事例を入れ込むこととした。これらを念頭に、各幹事が所属する館での博学連携の取り組みや、それぞれの幹事が知り得ている加盟館園で実施されている博学連携の長年の取り組み、新たな取り組みについての情報を共有し、内容について検討を重ねた。

また、今回のシンポジウムのテーマが博学連携であることから、各館の事例紹介後のディスカッションでは、博物館側からの一方だけの議論ではなく、学校関係者側からも議論に参加していただき御意見を伺いたいと考え、現役の先生方に御登壇いただく形でプログラムを組立てた(表1)。一般参加型シンポジウムではあるが、多くの学校関係者にシンポジウムへ参加していただき、博学連携の事例を知らせる機会とするために、神奈川県博物館協会事務局から県内の学校へチラシを配

布することで、シンポジウムの開催を周知し、参加を促した。そのお陰もあり、当日は複数の学校関係者の参加がみられ、ディスカッション後の質疑応答では会場参加の学校関係者からもコメントをいただくことができ、博学連携について博物館側と学校側からの双方向から議論が生まれるシンポジウムとなった。

なお、シンポジウムで御紹介いただいた博学連携の具体的な実施内容や先生方からの所感については、本誌にて御登壇いただいた皆様から寄稿さ

れた報告やシンポジウム参加者からの参加記が別報にあるため、そちらを参照されたい。

末筆ながら本シンポジウムにて御登壇いただいた刈田均氏（横浜市歴史博物館）、土屋健作氏（小田原市郷土文化館）、秋山幸也氏（相模原市立博物館）、内船俊樹氏（横須賀市自然・人文博物館）、風間洋氏（鎌倉学園中学・高等学校）、山田恵里氏（小田原市立早川小学校）の皆様には、ここに厚く御礼申し上げます。

表1. 令和6年度第5回研修会（公開シンポジウム）の開催要項

日時	令和7（2025）年2月8日（土）13：00～16：35	
会場	横浜市歴史博物館・講堂	
趣旨	博物館では、小・中・高等学校等の学校団体との博学連携事業を行っており、自然科学、人文科学等の博物館の各分野において、学校での学びが深まる一助となるよう児童・生徒向けの展示解説や出前教室など、様々な内容を取組んでいます。一方で、先生方の中には、学習単元や行事など学校の状況によって、博物館利用に踏み切れていないこともあろうかと思えます。本シンポジウムは、一般の方や先生方に博物館と学校との関わりについて知っていただく機会とし、今後の博物館利用を考えるきっかけとなるよう、各館で実施されている長年の取組みや、新たな取組みの事例を紹介いたします。	
プログラム		
12:30～13:00	受付	
13:00～13:05	開会挨拶	刈田 均 (横浜市歴史博物館 副館長)
13:05～13:10	趣旨説明	高中健一郎 (かわさき宙と緑の科学館 学芸員)
13:10～13:40	事例紹介① 様々な学校連携活動 横浜市歴史博物館の事例から	刈田 均 (横浜市歴史博物館 副館長)
13:40～14:10	事例紹介② 学校収蔵資料を用いた企画展の開催と今後の展望	土屋健作 (小田原市郷土文化館 学芸員)
14:10～14:20	質疑応答	
14:20～14:30	休憩	
14:30～15:00	事例紹介③ 高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう！	秋山幸也 (相模原市立博物館 学芸員)
15:00～15:30	事例紹介④ 市教委等既存事業を組み入れた新しい博物館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状	内船俊樹 (横須賀市自然・人文博物館 学芸員)
15:30～15:40	質疑応答	
15:40～15:50	休憩	
15:50～16:00	コメント	風間 洋 (鎌倉学園中学・高等学校 教諭)
		山田恵里 (小田原市立早川小学校 教諭)
16:00～16:30	ディスカッション	
16:30～16:35	閉会挨拶	望月一樹 (神奈川県博物館協会 会長)
17:20～	(閉会后移動) 情報交換会	

## シンポジウム事例紹介①

### 様々な学校連携活動 —横浜市歴史博物館を事例に—

横浜市歴史博物館 刈田 均

#### はじめに

横浜市歴史博物館は「横浜に生きた人々の生活の歴史」をテーマとし、平成7年（1995）1月31日に開館した。

昭和63年（1988）に策定された『横浜歴史博物館（仮称）建設基本計画』には、「学校教育とのタイアップ活動」を重視し、「随時の見学にとどまらず、学校教育活動の一環として、繰り返し活用されるよう、学校との密接な連携による活動を展開することが望まれる」と記されている。学校連携活動は館の計画段階から求められていた。

本稿では、開館から30周年を迎えた当館が、これまで行ってきた学校連携活動を紹介したい。

#### 1 博物館内での学校連携活動

##### (1) 小学校

小学校では主として小学6年生、4年生、3年生に向けた団体見学のプログラムを提供している。

6年生は初めて通史を学ぶ学年である。当館の常設展示は、小学校6年生をターゲットに、解説の文字数を少なくし、実物・模型・複製資料とビジュアルでわかりやすいグラフィックパネルを組み合わせ構成している。また隣地には弥生時代の環濠集落とその墓地である方形周溝墓を復元した「大塚・歳勝土遺跡公園」がある。通史の最初の単位となる原始時代を常設展示室で学ぶことができ、また遺跡公園では竪穴住居に入ったり高床倉庫や墓地を見たりすることができる。遺跡公園と常設展示室の見学には2～3時間ほど要することから、遺跡公園内にある工房で昼食をとる学校も多い。市内外から多くの小学校が校外学習の一環で団体見学に訪れている（図1）。

横浜市内の小学4年生が秋季に学習する単位として、横浜市中区で江戸時代に開発された吉田新田がある。近世ブースにはこの学習単位を踏まえた吉田新田開発の展示を設けており、展示の解説とミニ授業、また希望する学校には当時の土木作業を体験する「もっこ体験」を組み合わせた見学



図1 大塚・歳勝土遺跡公園内の高床倉庫を見学する小学6年生。

プログラムとしている。主に近隣の小学校が訪れている。

3年生は「昔の暮らし」の単元を冬季に学ぶ。大塚・歳勝土遺跡公園内には、港北ニュータウンの名主の家「旧長沢家住宅」を移築復元した都筑民家園があり、茅葺き屋根の古民家で、板の間と囲炉裏、畳や障子などを見学できる。それに、工房でのミニ授業と博物館での昔の暮らしのミニ展示を組み合わせた見学プログラムを設け、主に近隣の小学校が訪れている。

##### (2) 中学校

中学校では主としてキャリア教育の職場体験を受け入れている。1校あたり生徒2～4人程度とし、博物館の受付や監視、また図書閲覧室関連の業務を中心に体験する。

また横浜市立中学校社会科研究会と連携して、当館で中学校社会科作品展を開催し、期間中には研究発表会を行っている。

##### (3) 高等学校

中学校と同様にキャリア教育に協力し、神奈川県立高校や博物館近隣の私立高校からインターシップを受け入れている。県立高校からは夏季休



図2 インターンシップで図書整理を行う高校生。

休暇中に4名程度を受け入れ、資料整理や司書の業務を中心とするプログラムを組んでいる(図2)。また神奈川県高等学校総合文化祭に協力し、社会科学研究発表大会の開催や審査員の派遣なども行っている。

#### (4) 大学

館務実習を毎年10名程度受け入れている。このほか学芸員課程や社会教育課程、教職課程、歴史・民俗・考古・美術等を専攻する課程での施設見学を受け入れている。また市内の大学と協定を結び、インターンシップを受け入れている。

#### (5) 個別事例

支援学校やインターナショナルスクールの見学では、それぞれの事情に応じて、兜の複製をかぶったり駕籠に乗ったりする体験、土器や石器などに触る体験、まが玉づくりなどのワークショップなどを提供している。

#### (6) 教員に向けて

横浜市教育委員会では、毎年夏に市立学校(小学校・中学校・高等学校)の教員を対象に、「博物館利用研修会」を実施している。当館を会場に、



図3 博物館活用研修で土器を観察する教員。

バックヤードツアーによる博物館業務の紹介、常設展示の意図や構成の解説、収蔵している博物館資料を前にした解説やワークショップを行っている。博物館業務を知り、実際に考古資料や民俗資料に触れたり、古文書や美術作品を実見したりしながら資料を見る視点を学ぶワークショップが好評で、教員対象の研修のなかでも希望者が多いという(図3)。

このほか、県立高校教員が新任から5年次に行う教員研修にも対応している。

## 2 博物館外での学校連携活動

### (1) 小学校

小学校6年生を対象に、縄文土器づくりの訪問授業を行っている。テラコッタとシャモットを混ぜて水を加えながら練る「土練り」、出来上がった粘土を輪積みという当時の方法で積み上げて土器の形を作り、その後縄文原体を使って文様を施す「成形」、成形を終えた土器を乾燥させた後、校庭で薪を使って焼成する「野焼き」という工程を、3日かけて行っている。できるかぎり当時の方法を用いる本格的なものである。学校側には野焼きの許可であったり薪の確保であったりと、事前の調整や準備等を求めている。博物館側も学校も負担は相応だが、出来上がった土器を手にした子どもたちの満足度や達成感には目を見張るものがある(図4)。

また博物館に見学に来る6年生の学習効果を高めるための事前訪問授業や、4年生の吉田新田と3年生の昔の暮らしについての訪問授業を行っている。昔の暮らしについては、小学校の学校資料室



図4 縄文土器づくり訪問授業での野焼き。

に近隣他校の3年生が見学に来た際に解説する訪問授業も行っている。

## (2) 中学校・高等学校

中学校へは、キャリア教育の職業講話で学芸員が訪問授業を行っている。

高等学校への訪問では、歴史クラブの活動で学校所蔵の考古資料整理のために学芸員が指導にあたった事例がある。

## 3 オンラインによる連携

### (1) ホームページ

ホームページのコンテンツとして、「子どもと先生のページ」を設けている。

子どものコーナーでは、横浜の歴史を調べる「歴史クイズに挑戦」と、昔探しや吉田新田の開発を調べる「昔探しクイズに挑戦」があり、前者は常設展示室の展示資料を利用した学習クイズを、後者は3・4年生の単元の内容の学習クイズを提供している。

先生のコーナーでは、学校見学での博物館の見学マナーを紹介したマナーブックのダウンロードや、博物館で制作した3年生の昔の暮らし、4年生の吉田新田の学習に有効な副読本の紹介を行っている。

このほか当館や横浜開港資料館、横浜都市発展記念館を活用した授業例として小学校の教員向けに「社会科学習指導案」事例集、中学校教員向けに「社会科学習指導案」事例集（歴史的分野）を公開している。いずれも市立学校の先生方に協力を得て小学校向けは「学校の博物館利用研究会」、中学校向けは「教材開発委員会」を組織して検討



図5 小学3年生向けに配信している動画。

を重ね、執筆いただいたもので、前者は8例、後者は17例である。

### (2) 動画配信

小学校3年生の「昔の暮らし」単元に合わせて制作した、昔の暮らしと道具の動画を35本、小学校6年生の見学に際して有効な大塚遺跡の見どころを解説した動画2本を博物館の公式youtubeチャンネルから配信している(図5)。小学校3年生向けの動画は、市立小学校に配布している学習用リーフレットと連携した特設ページからも視聴できるようにしている。

## 4 教員に向けた活動

平成18年(2006)に、小学校や中学校での授業に使える指導案を掲載した『見学と授業に役立つ博物館利用の手引き』を、博物館利用促進のために刊行した。

現在ホームページで公開している小学校の教員向けの「社会科学習指導案」事例集、中学校教員向けの「社会科学習指導案」事例集は、本書に掲載された指導案をベースとし、指導要領の改訂に対応してその後執筆された指導案を追加している。

## 5 学校連携事業の担い手

### (1) 事務職員

学校団体見学は、学校受付担当の事務職を中心に事務職全員で対応している。学校予約は、インターネットによる汎用予約システムをカスタマイズして利用し、上半期と下半期に分けて申し込みを受け付けている。6年生は遺跡公園ガイド、4年生は常設展でのミニ授業と吉田新田展示の解説、3年生は都筑民家園の解説とミニ授業並びに博物

館内のミニ展示見学、そして全学年共通で昼食場所の利用の有無、大型バス駐車場の利用の有無等の申し込みを受け付けている。申し込みはオンラインで行えるが、遺跡ガイドや利用施設等の時間の振り分け、また複数校来校時の時間枠などは学校受付担当の事務職員が手作業で調整して返信する。小学校以外の予約については、電話で受け付けている。学校団体見学数は令和6年度で年間171校あり、相応な事務量となっている。

また、学校団体見学時の子どもたちへのガイドや解説を担う展示解説ボランティアのとりまとめは専門職とともに事務職も担当している。令和7年度は82名が登録しているが、学校団体見学日時の連絡や調整、また研修やボランティア総会の実施等、さまざまな対応を行っている。

## (2) 専門職員

博物館内で行われるキャリア教育にかかわる学校連携活動は学芸員や司書がプログラムを組んでいる。中学校の職場体験では、受付業務の受託者や当館の臨時職員の協力を得て、受付や図書閲覧室の業務を体験させている。また高等学校のインターンシップでは、上記業務に加えて考古資料や民俗資料の整理なども行う。大学のインターンシップでは2週間ないし4週間という長期にわたることから、専門・事務を問わずその時期に行う催事も含めたさまざまな業務プログラムを設定している。また教員向けの研修では学芸員が講師を務めている。

このほか、個別事例となるワークショップや体験などは、学芸員と活動支援ボランティアとで行っている。なお館務実習については本稿では割愛する。

博物館外での学校連携活動では、前述した縄文土器づくりと職業講話、また吉田新田や昔のくらし等、一部の訪問授業、クラブ活動の支援を、またオンラインコンテンツのうち大塚遺跡の見どころ解説動画や博物館利用研修会での講師を専門職が担っている。

## (3) エducレーター

当館の指定管理者である(公財)横浜市ふるさと歴史財団では、総務課に元横浜市立学校の学校長で、博物館と学校とをつなぐ役割を担う3名のエドゥケーターが配置され、訪問授業やオンライン



図6 エドゥケーターによる吉田新田のミニ授業。

コンテンツの制作、教員向けの活動を行っている。博物館内では、4年生と3年生の見学時に行うミニ授業を担うほか、6年生の学校見学時には常設展示室に常駐し、児童からの質問に答えたり、解説したりしている(図6)。館外の活動として行っている小学校への訪問授業は令和6年度で延べ189校に及び、児童数は1万5000人余りである。オンラインコンテンツである小学3年生向けの昔のくらし動画制作もエドゥケーターが担当している。授業のニーズを反映した内容の動画は好評で、令和6年度の視聴回数は13万回を超えている。『見学と授業に役立つ博物館利用の手引き』に掲載し、ホームページで公開している小中学校の教員に向けたモデル指導案は、エドゥケーターならではの成果である。このほか、子どもたちに接するボランティアに向けて、現在では看過できない言葉やしぐさなどについて注意喚起することを目的とした研修も担当している。学芸員では対応できない分野であり、当館における学校連携活動においては、エドゥケーターが果たしている役割とその成果は大きい。

## (4) ボランティア

当館では、展示解説ボランティアと活動支援ボランティアという2つのボランティアを組織して活動を行っているが、学校連携活動でも欠かせない役割を担う。

展示解説ボランティアは、学校団体見学で訪れた子どもたちに最前線で接している。前述のとおり、6年生には大塚遺跡や歳勝土遺跡の遺跡ガイドを、4年生には吉田新田の常設展示解説を、3年



図7 展示解説ボランティアによる旧長沢家住宅での解説。

生には昔のくらしにかかわる都筑民家園のガイドを行っている(図7)。また常設展示室では、団体見学に来た子どもたちの質問に答えたり、個別の展示を解説したりする対応も行っている。学校見学での解説で求められる内容は一般向けとは異なることから、当館では、学年毎の研修を行うほか、子どもたちに接する際のリテラシーの研修を行っている。

また活動支援ボランティアは、さまざまな博物館活動を支援するボランティアで、主にワークショップの指導支援を行っている。前述した博物館内での学校連携活動でワークショップを行う際は、活動支援ボランティアの協力のもと行っている。

#### (5) 博物館関連団体

当館には、講座受講生OBが組織した会員相互の生涯学習を中心とした活動を行う団体がある。実験考古学講座「縄文土器づくり」の受講生OBが組織している「横浜縄文土器づくりの会」もそのひとつで、前述した縄文土器づくりの訪問授業を学芸員と一緒にしている。

土練り・成形・野焼きといった工程を子どもたちに指導するには熟練の技術が求められる。また野焼きはやけどなどの危険も伴う。メンバーは実験考古学的方法で縄文土器を製作する活動を年

間3回ほど行っており、豊富な経験からの確かな指導を行っている。縄文土器づくりの会のおかげで成立している訪問授業である。

#### (6) 地域団体

当館では、金沢区から委託を受けて区内小学校の希望校に「むかし体験授業」を実施している。この学校連携活動では金沢区の地域団体と連携して訪問授業などを行っている。

金沢区の横浜市立大道小学校にある「大道ふれあいむかし資料館」で所蔵する民具を小学校に運んで行う訪問歴史授業と、大道小と横浜市立富岡小学校にある資料館に訪れてそこで授業を行う資料館歴史授業の二つのパターンがある。訪問授業と富岡小の資料館で行う資料館歴史授業は「NPO法人横濱金沢シティガイド協会」のスタッフが、大道小の資料館歴史授業では「大道ふれあいむかし資料館」を運営している地域有志で組織された「ふるさと大道村」のスタッフが講師となり、財団から派遣されたエデュケーターとともに授業を行っている。令和6年度は訪問歴史授業を7校、資料館歴史授業を6校、計13校で実施した。

#### 終わりに

横浜市は市立小学校が本校・分校併せて336校(令和6年)あり、全国で最も小学校数が多い自治体である。これまで記してきた学校連携活動は、当館が各学校に向けて公平に対応できる活動を模索してきた結果とも言える。

当館の小学校団体見学数は、校外学習の多様化、指導要領改訂による6年生の公民単元の追加(4・5月)、またコロナ禍を経て、減少してはいるものの令和6年度で延べ141校を数える。一方、博物館外で行う訪問授業等の実施小学校数は延べ189校である。合計330校で、横浜市の市立小学校数とほぼ同数となる。

当館の学校連携活動は、職員はもちろん、博物館にかかわる市民や地域の団体など、多様な主体と連携し、協力をいただいているからこそ、行えてきたことを最後に記しておきたい。

## シンポジウム事例紹介②

### 学校収蔵資料を用いた企画展の開催と博学連携のあり方について

小田原市郷土文化館 土屋 健作

#### はじめに

小田原市郷土文化館では、2024（令和6）年8月1日～10月20日の会期で、企画展「学校に眠るお宝展」を開催した。

博学連携の強化を目的として企画した展示会の開催にあたり、様々な学校と関わり、教員と接してきた。一連のやり取りを通じて感じたこと、展望などを記しておく。

#### 企画展示の目的

学校の資料室には、児童・教員が学校周辺の遺跡で採集したとみられる土器や石器などの考古資料、住民から寄贈を受けた民具類が所狭しと収蔵されている。かつて昔の暮らしを学ぶ教材として利用されていたようではあるが、資料を知る教員の異動や、教育方法の移り変わりによって日の目を見なくなり、その存在が忘れ去られた物たちである。

そこで、これらの資料を整理して展示し、歴史的価値、教材としての有用性を教員に伝え、授業で活用してもらうことを目的としている。

近年、児童数は減少傾向にあるが、駅前集中や教育体制の多様化などの事情により教室が足りず、資料室を教室に変える事例が続いている。この様な中、置き場の無くなった資料が廃棄される事案も生じている。学校側のやむを得ない事情も分かるが、有用な教材としての認識が深まれば、資料の保管場所も配慮されるのではないかと、という思惑もある。

このような体裁の整えた「目的」は、展示に先立ち実施した資料調査の中で、学校の現状を知り、教員と話す中で定まってきたものである。

始まりは、いったいどれだけの資料が学校にあるのか、展示会として成り立つのか、学校は協力してくれるのか、先生とはどのような人なのかなどの不安を抱えながら、ぼんやりとした視界の中、学校との接触を開始した。教育委員会を通じて照会

文を送付し回答を求める方法では、多忙な学校からこちらの望む回答は得にくいと考え、前触れも無く学校の代表電話にかけることから始まった。

#### 学校との接触

小田原市には公立小学校25校、公立中学校11校がある。その全てに「何か古そうなものはありますか？」と電話をかける。ここで早速、小学校と中学校の違いが表れる。

小学校の教員は、教える科目が限定されない性質上、社会（歴史）の教鞭を多くの教員が経験している。そのためアンテナが高く、電話を取った教員から早々に「古そうなものがある、ありそうな部屋がある。」といった話ができた。教員によっては、「前に赴任していた小学校にはあった。」など他校の状況まで教えていただける方もいた。

中学校は「社会科担当の教員に伝え、心当たりがあれば折り返し連絡させる。」という対応で、折り返しの電話は2件、該当資料は無いとの返答であった。

学校側から僅かでも情報が引き出せれば、早速実見調査に向かった。

#### 学校での調査

学校によっては綺麗に整理された資料室もあったが、ほとんどが防災倉庫や運動用具置き場の一角に置かれていたり、棚の下の埃だらけの段ボールを開けたら土器や瓦が入っていた事例もあった。実際に確認したところ、土器や埴輪は本物ではなく教材用レプリカであった例もあったが、情報を教えてくれた先生に感謝しながら確認を進めた。当初は考古資料に限定した展示を企画していたが、中・近世以降に開拓された平野中央部付近の学校には農具や民具が中心に収蔵されていたことから、地域ごとの特性を叙述するためにも、民具も対象にした展示に方向修正を行った。

## 展示制作

資料は採集場所や寄贈元が不明なものが多いが、丘陵上や周辺の学校では縄文土器や弥生土器などがみられ、低地では古墳時代以降の資料、近世以降の開墾地では民具類がみられるなど、地域の歴史を叙述する材料は整った。

展示のレイアウトは、学校の団体見学を想定し、地域・学校ごとに展示ケースを配置した。展示物は破片資料が中心であるため、いかにして来館者に大昔の生活をイメージさせるかが課題となり、縄文時代のジオラマを作成するなど工夫を凝らした。(図1)



図1 展示の様子。

## 展示関連イベント

### (1) 「教員のための博物館の日」

国立科学博物館が旗振り役となり、学校の先生に「博物館に親しみを持ってもらうこと」、「博物館の学習資源を知ってもらうこと」を目的として、参加各館で催しを開くイベントである。本館も今回から参画し、土器片を観察して標本箱を作るワークショップを開催した。

児童が資料を採集してきた際に、採集場所を記録させ、大切に保管することを伝える実践的な訓練になると思っていたが、実際にこの経験が役に立ったとの声は聞こえてこない。ただ、参加教員と親しい時間を過ごし、現在も関係が続いていること、参加者の同僚からも出前講座や資料貸出し等の依頼をいただいていることから、大元の目的は達成されたと考えている。

### (2) フィールドワーク「荻窪の遺跡を歩く」

親子参加で市内の野山を歩き、土器を採集して観察するイベントを開催した。

### (3) 講演会①「学校に眠る郷土のお宝を発掘！」

学校になぜ土器片が集められたのか。子供たちを夢中にさせる土器採集の魅力について、元考古ボーイの東京大学設楽博己名誉教授と現役の考古ボーイ鈴木陽磨さん達が語り合った。

### (4) 講演会②「学校教育と博物館の連携」

現役の教員と学芸員が対談し、博物館と学校が連携してできることを話し合った。教員からは、博物館に眠る資料こそ知りたいという意見や、出前授業や資料借用の依頼手続きの簡略化について要望があり、R7年度より運用方法を改善した。

## 展示資料の返却

展示終了後は、資料と解説パネルを箱に並べ、そのまま授業等で使える状態で返却した。学校によっては、職員室前や渡り廊下に設置された。

## 展示会終了後の学校との連携

展示開催以来、例年よりも多くの学校から出前講座や見学の依頼をいただいている。特に、教員同士の横のつながりからの広がりを実感しており、地道ではあるが今後も口コミで広がることを期待したい。最近では、小学校4年生国語の授業「ごんぎつね」で、火縄銃、魚籠、お歯黒、袴、木魚を授業で借用したいとの相談をいただき、慌てて民俗資料の収蔵庫を探し回った。学校に眠るお宝展をきっかけに、今度は逆に教員側から博物館に眠らせている資料を掘り出される、恥ずかしくも嬉しい事態となっている。実物を教卓に置くことで、教科書の挿絵よりももう少しイメージを膨らませながら読むことができる「ごんぎつね」「たぬきのいとぐるま」などのパッケージを用意していきたい。

また、学校の管理者からは、資料室の扱いについての相談が続いている。博物館の収蔵スペースに限りがある中、地域の資料が守られ、活用される環境を維持するためにも、各学校と連携して、共生を図っていきたい。

# シンポジウム事例紹介③

## 高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう

相模原市立博物館 秋山 幸也

### 1 はじめに

相模原市立博物館（以下、当館）は1995年11月に開館し、2025年には開館30周年を迎えた。開館当初から現在まで「友の会」組織は設置していない。一方で、複数の市民グループが活発に活動し、博物館における専門領域のすべてにおいてこれらのグループが活動に関わっている。これは当館の特色の一つであると自負している。

比較的高齢の市民の参加が目立つ博物館の市民グループの中でも、生物分野の市民活動は若い年代の参加が多い。これは、学校への授業支援だけでなく、部活動への関わりを持ってきた成果であると考えている。本稿ではまず、その下地となっている市民グループの活動状況や成り立ちを示し、その中でも若い世代の参加者が多い「さがみホネホネ団」の活動について焦点を当てる。さらに、高校との連携について紹介し、若い世代の博物館との関わりの実践例を記録として残すこととした。

### 2 相模原市立博物館における市民グループの活動

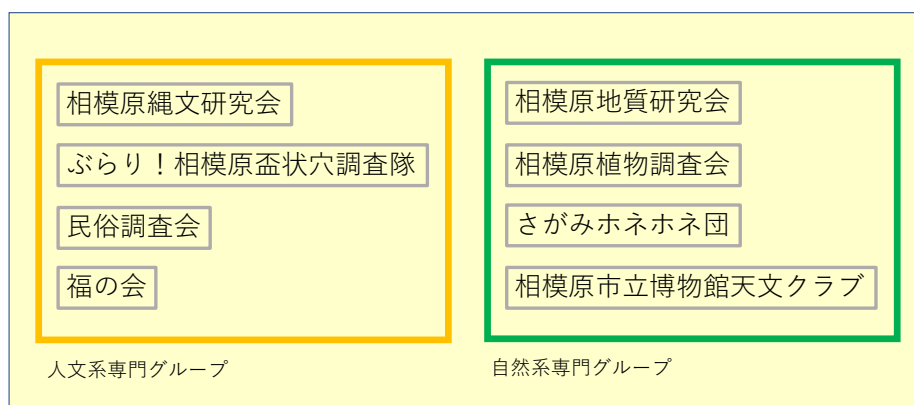
当館を拠点に活動する市民グループは、現時点で図1のとおりである。過去に存在し、現在は活動していないものが数グループあるが、現在活動中

のほとんどのグループが2000年前後に発足している。

中でも相模原植物調査会は、開館時に「神奈川県植物誌調査会相模原ブロック」として活動を開始した最古参のグループである。同グループはその名のとおり、神奈川県立生命の星・地球博物館に事務局を置く神奈川県植物誌調査会の地域ブロックであり、標本とデータの集積、活動拠点としての機能を担っている。しかし、調査活動のみでは一般の植物愛好者が参加しにくいことから、筆者が当館に着任した1999年からグループ名を変更し、現在に至っている。植物相調査の活動を軸としながら、ワークショップなど博物館の教育普及活動にも参画している。

現在活動していないグループがあると述べたが、これは、1995年の開館時に在籍していた“学芸員第一世代”がすべて退職、または異動し、そうした学芸員が作り、活動をけん引してきたグループの一部が活動を終了したものである。また、もともと大きな資料収集プロジェクトのために有期で作られたグループもあり、そのプロジェクト終了に伴って活動を終結したものもある。もちろん、後任の学芸員に引き継がれたグループもある。

そして、図1のグループの中で最も新しく発足し



**市民学芸員** 博物館のイベント全般の企画・補助を行うグループ

図1 相模原市立博物館における市民グループの一覧。

たのが「さがみホネホネ団」（略称さがホネ団）である。次節では、さがホネ団の発足の経緯と現在の活動状況について述べる。

### 3 さがみホネホネ団発足の経緯

#### (1) 名称について

さがみホネホネ団という名称について、まず説明をしておきたい。これは、大阪市立自然史博物館を拠点として活動する「なにわホネホネ団」という団体があり、それにちなんでいる。なにわホネホネ団は動物遺体を剥皮、乾燥標本（仮剥製）化、あるいは骨格標本化する活動を行っており、全国各地に派生的な団体が存在し、その多くが「〇〇ホネホネ団」のような名称を用いているため、さがホネ団もこれに倣った。

#### (2) さがホネ団の前身「相模原動物標本クラブ」

当館では最初から「なにわホネホネ団」のようなグループを作ろうと考えていたわけではない。当初、剥製化を念頭に動物遺体を冷凍庫へ蓄積してきたが、2010年代中頃には処理が追い付かず未処理試料が冷凍庫から溢れかねない状態になってしまった。そこで、仮剥製の作成技術を持つ市民をアルバイトとして雇い、処理を進めることにした。

相模原市は市内及び近隣に野生生物を扱う大学が複数あり、そうした大学の学生がこの活動を知り、作業の見学をしたり、指導を求めたりして来館するようになった。現在は、義務教育においても、高校の生物学でも、解剖実習が行われないため、生物学を専攻する学生の多くが大学入学時には動物の解剖未経験である。しかし、解剖や標本化の技術習得を望む学生は一定数いて、指導の機会や場を欲する声は多い。そのため、ややイレギュラーな経緯ではあったが、博物館に多くの大学生や高校生がやってきて、その集まりはサークル的な様相を帯びていった。

同時期に、ドイツの剥製作成の専門学校で学び、その後もドイツ国内の博物館に勤務していた相川稔氏が、帰国してフリーランスの標本土として活動していた。近隣に在住であったこともあり、標本作製を依頼し、前述の活動に合わせて来館していただいた。すると、間近でプロフェッショナルの技術を学べるとあって、多くの学生や市民が集まるようになったため、正式に博物館の市民グループとして位置付けるようになった（図2）。当初のグループ名は「相模原動物標本クラブ」であった。



図2 相模原動物標本クラブの活動の様子（2015年）。

#### (3) さがホネ団として再始動

活動が活発化した動物標本クラブであったが、相川氏が2018年に再びドイツの博物館へ就職して離日したことや、その後、コロナ禍に見舞われたことで、クラブの活動は事実上の休止状態となった。

しかし、その中でも動物標本作りへの関心を高め、独自に学んで活動を継続していたのが光明学園相模原高校の生物教諭である下口直久氏である。下口教諭は同校で理科学研究部の顧問をされており、もともと、筆者と理科学研究部は同校の近くを流れる相模川におけるカワラノギクの保全活動等により関わりがあった。そうした縁に加えて、標本クラブにも活動を広げたことで結びつきが強まっていった。

2024年に新型コロナウイルスの対応が5類へ移行したことを契機に、下口教諭と相談し、動物標本クラブから、より認知度の高い「ホネホネ団」の名称を入れた「さがみホネホネ団」として活動



図3 さがホネ団が実施した高校生向けの標本講習会（2024年）。



図4 クリハラリス (鎌倉市 2025年).

を再開することとした (秋山 2025)。そして、高校生世代を意識して、近隣の高校生向けに標本化の講習会を実施したり (図3)、他の教育普及事業などに参加した高校生へさがホネ団の活動を案内したりした。

#### 4 特定外来生物クリハラリス対策

前述のとおり、光明学園相模原高校理科研究部はさがホネ団以前から学芸員が活動に関わってきたが、さらに大きなトピックとなったのは、特定外来生物クリハラリス (図4) の対策である。

神奈川県内では、三浦半島と横浜市南部を中心に、戦前からクリハラリスの分布が知られてきた (中村 1990ほか)。近年は分布が拡大傾向にあり、相模原市の南部市境付近でも2023年に確認された。相模原市は在来種のニホンリスが生息する丹沢山地や関東山地を含むため、クリハラリスの市域への侵出は、ニホンリスとの餌資源の競合など生態系への影響が懸念される (日本哺乳類学会 2017)。

危機意識を共有する大学等研究機関や博物館を含む行政、市民団体などが手を組み、「クリハラリス情報ネット」を立ち上げた。同ネットはこれまで、相模原市立博物館において定期的なミーティングを重ね、活動方針の策定や調査速報の共有などを行っている。これに理科研究部が加わることとなり、生息状況調査や、胃内容物の分析などを担った。この活動は環境省が主催する全国野生生物保護活動発表大会において文部科学大臣賞を受賞するなど、高い評価を得た (秋山 2024)。



図5 学びの収穫祭 口頭発表会の様子 (2024年).

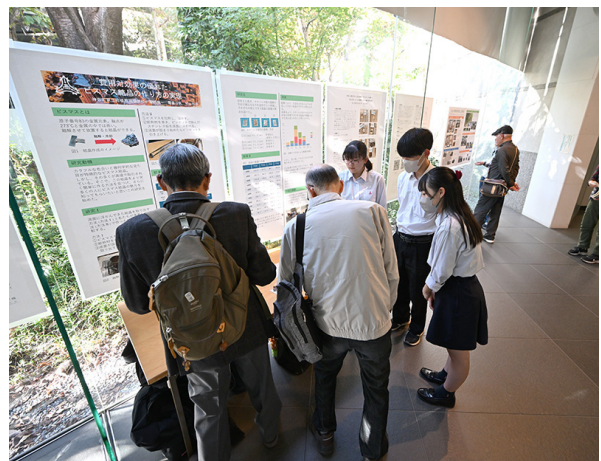


図6 学びの収穫祭 展示発表会の様子 (2024年).

#### 5 学びの収穫祭における発表

当館では毎年、当館を拠点に活動する市民グループや、学芸員が活動に関わる学校の部活動、大学の研究室等による研究活動発表会「学びの収穫祭」 (以下、収穫祭) を実施している (図5、6)。これは当初、博物館のアルバイト学生が大学や大学院を卒業・修了する際に、卒業論文や修士論文の発表会を博物館で行う、一種の“送り出しイベント”を発展させ、発表者の間口を大きく広げたものである。

現在は近隣の保育園から小学生、中学生、高校、大学まで発表者の属性が広がり、市民グループを含めて極めて多様な年代による発表会となっている。生涯学習施設である博物館として、市民グループが活動の現在地を確認し、モチベーションを高めるための重要なイベントとして位置付けており、光明学園をはじめ、近隣の高校による発表も活発となっている。

収穫祭では発表者による情報交換会も実施し



図7 学びの収穫祭 発表者情報交換会の様子 (2024年)。

(図7)、異なる年代や他校との歓談の中で、活動に関する相談や進路相談なども行われ、発表者にとって有意義な時間となっている。

## 6 部活動に関わることの意義

博物館のイベントや講座等を頻繁に利用する、いわゆるコア・ユーザーの中には、特に生物分野では小学生も少なくない。親に連れられて来るこうした年代の子どもたちも、中学校や高校へ進学すると、部活動など他の活動に時間が取られて博物館から足が遠のくのが常である。それは避けられない流れであり、生涯学習施設である博物館が、就学している世代を呼び込むことにあまり熱心になるのも本来の姿とは言えない。

しかし、博物館が扱う自然・人文系の活動に興味を持つ中高生は一定数いるはずであり、そうした生徒が博物館と関わりを持ち続けられる場を確保しておくことは、将来性を考えても重要なことである。いわゆる“文科系”の部活動(生物や地質を含む、運動系ではない部活動)は今、吹奏楽部以外は衰退傾向にあり、生物部が無い学校がむしろ多い。そうした中で、決して数は多くないものの、活動している文化部に学芸員が関わることで、学術面のサポートが得られ、さらには収穫祭のような発表の場も確保できる。

部活動の活性化の鍵は、校外での発表の場があることと、それが進路へ影響することにあると言

える。博物館の利用者の中でも「最も利用しない世代」と言われるティーンエイジャーをつなぎとめる方法の一つとして、学芸員が部活動に関わることは有効な手段であると言えるだろう。

## まとめ

さがホネ団の活動に若者が多いというのは、他の分野の学芸員が漏らした感想から気づいたことであった。筆者は経緯からそれを当然のように感じていたが、ふと他の分野の市民グループを見渡すと、確かにそこで見ることの無い年代が、さがホネ団では中心となって活動している。

定年延長等により現役年齢が広がり、市民活動全般において担い手不足の問題が深刻化している(内閣府 2024)。博物館においては、市民グループのメンバーの固定化や高齢化の進行が恒常的な問題となっているが、一方で、学校との関わりを強めることによって若い年代が固定的に確保できている活動もある。

生物系の部活動は少ないながらも一定数存在しているものの、歴史や民俗、考古といった人文系の部活動は昔も今も極めて少ない。人文系への波及は難しいと言わざるを得ないが、それでも、大学への進学状況を見ればそうした学術分野への志向を持つ高校生も少なからずいるはずである。部活動だけでなく、高校生が博物館の窓を開く場を模索し、実践例が波及すれば、若い世代の博物館利用の可能性が広がるだろう。

## 引用文献

- 秋山幸也. 2024. 第57回全国野生生物保護活動発表大会 講評. 私たちの自然. 公益財団法人日本鳥類保護連盟.
- 秋山幸也. 2025. さがみホネホネ団始動の経緯について. 相模原市立博物館研究報告, 33
- 内閣府. 2024. 令和6年版高齢社会白書(全体版). [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/06pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/06pdf_index.html)
- 中村千秋. 1990. リスのきた道——なぜ鎌倉にタイワンリスか? 大日本図書.
- 日本哺乳類学会. 2017. 神奈川県における特定外来生物クリハラリス(タイワンリス)の分布拡大を防ぐための対策推進についての要望書. <https://www.mammalogy.jp/doc/20190130.pdf>

## シンポジウム事例紹介④

### 市教委等既存事業を組み入れた 新しい博物館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状

横須賀市自然・人文博物館 内船 俊樹

#### はじめに：当博物館学校連携の近況

横須賀市自然・人文博物館（以下、当館）における近年の学校連携については、当館の6つの「使命」の一つ「学校教育に役立てる」のもとで実施する、次の3事業を挙げることができる（内船、2019a）。

一つ目は小学校社会科で、具体的には3年「昔の道具とくらし」[民俗]と6年「大昔の暮らし」[考古]である。来館する学校のニーズに合わせ、博物館の講座用の部屋に民俗資料や考古資料を並べ、常設展示見学とともに実物資料に触れ、学芸員の解説を行う。

二つ目は小学校理科の教員研修で、これは市教育研究所が主催し、市立小学校の教員研修メニュー内に位置づけられている。2000年以降、一時的に「総合的学習等の対応」としてピオトープ指導など小学校から博物館への出講依頼が相次いだものの次第に下火となり（図1）、地元出身でない若手教師の増加や中堅世代の教員の人材不足によって不足する地域の自然への理解を深める機会

として、同所の提案により2010年頃から始まったものである。

三つ目は小学生等の理系キャリア教育を展望するイベントであり、後述する本稿の主題である「みんなの理科フェスティバル（以下、理科フェス）」である。

これら3事業以外に、学芸員が学校からの様々な見学対応や出前授業の依頼に応じてはいるが、地域内の公立小学校数と対応可能な学芸員数のバランスを考えると個別対応には限界がある。博物館としては、一つ目に挙げた小学校社会科のような、単元に合わせた時期に集中して学年単位の博物館見学を受け入れる対応が、効果や効率を考えると望ましいと考える一方、こうした対応が可能な教科や単元は限定的であり、特に自然科学分野では、博物館を訪問して自然史資料を見学するよりも学芸員が出講して校内や校区の自然を解説することへのニーズが大きいため、効率化が難しい。したがって、小学校理科では教員に対する研修が現実的な選択肢であると感じられる。そのような状況

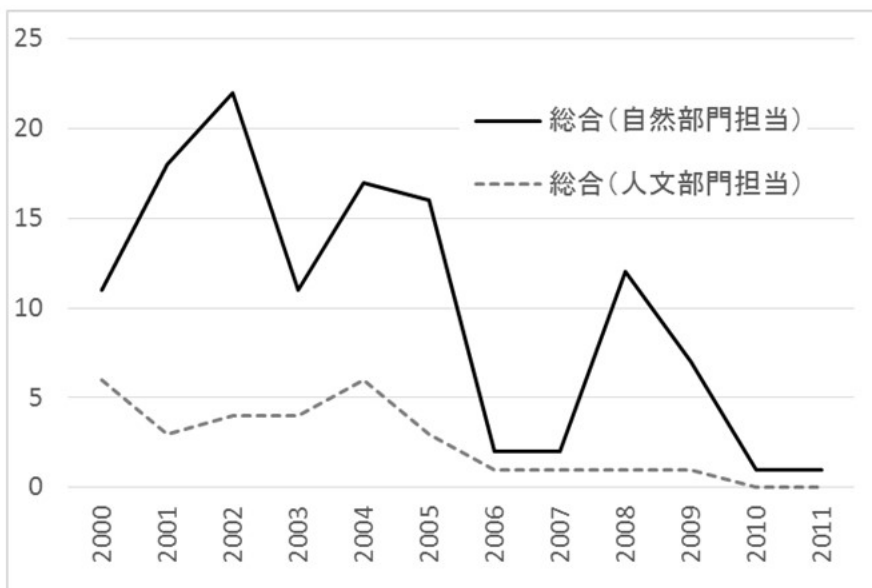


図1 総合的学習等への対応として当館学芸員による小学校への対応件数。  
内船 (2019a) より。

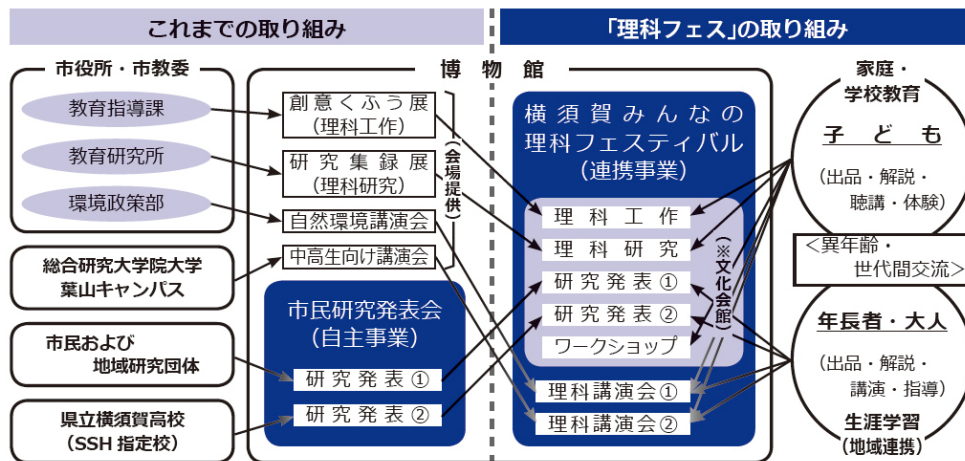


図2 理科フェス企画の際にまとめた、既存事業と外部連携先との対応、新旧事業の対応関係、新事業の対象や効果。内船（2019b）より。

で近年立ち上げた「理科フェス」は、学校との直接的なつながりこそないものの、関心の高い児童生徒へ広域的にアプローチできる手段として、かつ地域における博物館の存在感を高める手段として意義を感じており、現在もなおその可能性を追究している。

### 1. 理科フェス開催の経緯

理科フェスの開催経緯については、内船（2019b）において生涯学習への取り組みという視点からまとめている。

図2はかつて第1回の理科フェス企画時の説明および助成申請に用いた図である。見てのとおり、当事業は過去に博物館で開催されてきた外部事業や自主事業を統合するために打ち出した新規事業という側面があるものの、その当初からキャッチコピーを“子どもから大人まで、みんなが「理科」でつながる”とし、小学生をはじめとする子どもの理系キャリア教育への寄与を謳う事業とした。その背景は2つあり、一つは当館を利用した市教委主催の小学生の作品展示（自由研究および理科工作）が既にあり、その担当部署の協力のもと、各作品について《児童とその保護者》⇔《所属小学校(長)》⇔《市教委(担当部署)》の流れで調整が行われ、実現性を高められる勝算があったことと、もう一つは、地元企業による理科教育系研究助成を得るために、博物館が行う社会教育領域の事業から小学生の理科教育への貢献を展望したことである。

### 2. 理科フェスの開催概要

理科フェスとは、博物館があらゆる世代の科学的な探究活動を《理科》の名の下で受け入れ、集約的な場所と時期を調整・確保することで、出展者や来場者の学習機会の最大化を試みる事業である。そのため、従来個別に博物館で出展を受け入れてきた外部事業の主催団体や部署と調整を行いながら、集約的なメイン会場として博物館に隣接する横須賀市文化会館のギャラリー室を確保した。実施内容の基本的な構成は、① 研究および学習成果の出展（図3）、② 展示・講演会やワークショップなど《理科》の入口となる出展（図4・5）、③ 発表会や来場者を巻き込んだ交流会（図6～8）、である。この構成に沿って、2017年度に開催した第1回以降、原稿執筆時点で直近となる2024年度の第8回までの理科フェスの概要をまとめると表1のようになる。

当初（第1・2回）は平日の開催日程も含んでいたが、これは総合のような科目での来場を小中学校向けに呼び掛けることを意図したものである。しかし、学校見学での来場は実現しなかったことから、第3回から公開日を土日の2日間に縮小することにより、使用料の差額をメイン会場の拡張（文化会館ギャラリー室を1室から2室へ）に充てることとした。これにより、研究および学習成果の出展（表1の①）数を増加させることができた。一方で、来場のきっかけになるような《理科》の入口となる出展（表1の②）を促すことで、近年（第7・8回）はワークショップの件数が増加した。当初は12月の開催時期だったところを1月に変更し

表1. 理科フェスの開催概要まとめ

回	開催日	概要	来場者数
1	2017年12月14日(木)～19日(火)【6日間】	①小中学生14件, 高校生6件, 一般23件【計42件】 ②博物館3件(ワークショップ・外部巡回展・講演会各1件) ③12月17日(日)午前・午後二部制で発表・交流会	1,586人 (532+1,054) ※土日小計:1,013人
2	2018年12月14日(金)～17日(月)【4日間】	①小中学生10件, 高校生21件, 一般14件【計45件】 ②博物館4件(ワークショップ・外部巡回展・展示解説・スタンプラリー各1件), 外部6件(ワークショップ5件, 講演会1件)【計10件】 ③12月16日(日)午前・午後二部制で発表・交流会 ※12月15日(土)に県主催科学イベント誘致	2,143人 (740+1,403) ※土日小計:1,945人
3	2019年12月14日(土)・15日(日)【2日間. 以下同】	①小中学生33件, 高校生23件, 一般5件【計61件】 ②博物館5件(ワークショップ・企画展・パネル展・展示解説・スタンプラリー各1件), 外部6件(ワークショップ5件, 講演会1件)【計11件】 ③12月14日(土)午前・15日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	1,136人 (363+773)
4	2021年1月23日(土)・24日(日)	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	—
5	2022年1月22日(土)・23日(日)	①小中学生53件, 高校生17件, 一般6件【計76件】 ②博物館3件(ワークショップ・企画展・展示解説・スタンプラリー各1件 *うち1件中止), 外部6件(ワークショップ6件, 講演会2件, パネル展1件 *うち3件中止)【計9件】 ③1月22日(土)午前・23日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会 (*いずれも中止) *新型コロナウイルス感染拡大防止のため事業の一部を中止	2,185人 (781+1,404)
6	2023年1月21日(土)・22日(日)	②小中学生48件, 高校生20件, 一般10件【計78件】 ②博物館4件(ワークショップ・企画展・パネル展・スタンプラリー各1件), 外部8件(ワークショップ8件, 講演会1件 ※うち1件中止)【計11件】 ③1月21日(土)午前・午後の二部制で表彰式および発表・交流会	2,343人 (849+ <u>130</u> +1,494) ※下線については表外コメント参照(以下同)
7	2024年1月20日(土)・21日(日)	①小中学生47件, 高校生13件, 一般6件【計66件】 ②博物館3件(ワークショップ・トピックス展・スタンプラリー各1件), 外部10件(ワークショップ8件, 講演会1件・パネル展1件)【計13件】 ③1月20日(土)午前・21日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	3,239人 (1,270+ <u>211</u> +1,758)
8	2025年1月25日(土)・26日(日)	①小中学生42件, 高校生14件, 一般8件【計64件】 ②博物館4件(ワークショップ2件, 外部巡回展・スタンプラリー各1件), 外部13件(ワークショップ12件, 講演会1件)【計17件】 ③1月25日(土)午前・26日(日)午後の二部制で表彰式および発表・交流会	3,403人 (1,228+ <u>95</u> + 2,080)

上表は当館館報65～72号に基づくが、「概要」の①～③については、未公表データを含め本文で触れた理科フェスの基本的な構成①～③に沿って整理した。「一般」には大学生、大学院生、大学教員、博物館、行政、市民研究団体などを含む。「来場者数」のカッコ内は互いに隣接する2会場の内訳(メイン会場[文化会館]+サブ会場[博物館])を示し、第6回以降はメイン会場と同建物の別会場で行った表彰式や講演会等の実績(下線)を加算。



図3-8 過去の理科フェスの様子。

(上段左)図3 理科工作および研究ポスターの展示会場。(上段右)図4 高校生によるワークショップ会場。(中段左)図5 一般(市民研究団体)による展示・ワークショップ会場。(中段右)図6 展示会場の一角をステージとした発表会。(下段左)図7 発表会では全出展者が作品画像の前で2分ずつPR。(下段右)図8 市教委と理科教員らが企画・実施する小学生表彰者による発表会。

たり、表彰式会場を別途確保したりするなどの工夫は次項で述べる。

### 3. 理科フェス開催を通じた学校教育セクションとの連携深化

これまでの開催を通して、理科フェスが学校(市

教委、市内所在のSSH指定県立高校)に対して調整および提案によって連携深化を図れた点を次に3つ挙げる。

#### ①開催時期の調整(12月→1月)

小学生作品の出展スケジュール(県や全国への推薦作品の返却に合わせた開催)だけではな

く、同じ建物の別室で開催される書画作品展(国語科)と開催週末を合わせたことにより、別教科のイベントと相互に集客効果を高めた。また、SSH指定高校の校内発表会(当時、同じ会場で平日に開催していた)の撤収と理科フェスの準備を重ねることにより、会場使用料を抑えることに成功した。

### ②小学生作品の表彰式・発表会の誘致

小(中)学生作品の表彰式や発表会は、これまで市教委(正確には同委員会学校教育部内の所管課と小学校理科研究会との共催)が別日・別会場で実施していたが、前項で削減した会場使用料で同日・同建物の別室を借り表彰式を誘致し、終了後に理科フェス会場へ移動(同じ建物の1階→3階)して発表会(図8)を行ってもらった。これにより表彰式に参加する親子約100名が、理科フェスに必ず参加する流れをつくるとともに、市教委幹部や表彰式・発表会の運営教員(市立小学校の校長や理科教員など)が理科フェスを認知する機会になった。

### ③県立高校生の発表の場の拡大

市内所在のSSH指定県立高校には、当初から高校生の成果発表の場の一つとして理科フェスを利用してもらっていたが、当館貸出しの昆虫標本をもとに美術I履修生徒が制作した点描画の出展や、同高生徒による発表会の司会、同高が呼び掛けた隣の他の県立高校と合同で各校科学部がブースを連ねる実演・体験系のワークショップ出展(図4)を、回を追うごとに実現させた。

上記3つの取り組みによって、当初よりも小学生や高校生の存在感が増すイベントになった。これらの年齢層は、大学・研究所などの機関や一般の出展者にとって伝えたい相手として想定される年齢層であることから、出展を希望する団体のモチベーション向上にもつながったと考える。

## 4. 理科フェスの現状と展望

2025年1月25・26日に開催した第8回理科フェスは、過去最高の動員数(2日間2会場[文化会館・博物館]の合算)となった。「久しぶり!」と話しかけてくる出展常連の小学生や、「実は小学生の頃に理科フェスに来たんです」と出展者側へ立つ高校生、市立小学校の校長から「昨春からこちらの小学校に異動しました」とご挨拶いただくな

ど、理科フェスがもつ学校連携の効果を実感している。本稿執筆時点である2025年10月は、2026年1月末の第9回理科フェスに向けた出展予定機関・団体と調整を行っているところであるが、SSH指定県立高校からは「小学生の発表・交流会に、より多くの高校生が参画できる機会を理科フェス内に設けるよう市教委と協議したい」との提案があるなど、新規出展を増やすだけでなく出展機関・団体間の相互作用による新たな企画についても期待が寄せられる。

本稿冒頭にて、本事業を小学生等の理系キャリア教育を展望するイベントと紹介したが、本事業は科学的な探究活動全般を分かりやすく《理科》と表現している。したがって、その展望には教科としての理科に収まらない広い学術分野で適用範囲があると考えている。筆者とともに理科フェスを支えているのは当館の自然科学部門の学芸員であるが、それ以外の《理科》——工学などの応用科学だけでなく、社会科学、ひいては民俗や歴史などの人文学——に対しても、地域の博物館として今後どう市民の探究活動にアプローチするかは、今後の学校との連携深化を考える重要な課題であると考えている。

## 引用文献

- 内船俊樹 2019a. 「つながり」を生かした小学校教育支援 学校へ、地域へ「つながる博物館」の取り組みと挑戦. 小川義和(編著) 協働する博物館 博学連携の充実に向けて. pp. 186-197, ジダイ社.
- 内船俊樹 2019b. 理科でつながる子どもと大人—地域文化の核を目指す「みんなの理科フェスティバル」の取り組み—, 全国科学博物館協議会 研究発表大会要旨, (26): 139-147.

# これからの博学連携事業の可能性

## —高校歴史教員からのコメント—

鎌倉学園中学・高等学校 風間 洋

### はじめに

2025年2月8日(土)、横浜市歴史博物館において、神奈川県博物館協会主催による「博物館と学校連携について—博物館の使い方—」と題するシンポジウムが開催された。当日の次第は趣旨説明から始まる。博物館側からの博学連携事業に関する事例報告4本と質疑応答に加え、学校教員からのコメント2本、そしてディスカッションなどであり、会場には多くの県内の学芸員や博物館職員に加え、学校教員の姿も見ることができて、盛況なイベントとなった。筆者は、以前より博物館機能の活用による生徒(教員も)への学習効果には有効性を認めながらも、十分な活用が出来ないままに忸怩たる思いをしていた神奈川県内の私立中高校に勤務する歴史教員である。今回、各報告にコメントするという過大な役をいただいた。本稿では、各報告の概要と教員の立場からの所感を述べるとともに、近年高校に導入された歴史科目と博物館との連携の可能性にも触れたい。なお、筆者が中・高校の歴史教員であるため、興味・関心分野が偏っていることをあらかじめお断りしたい。

### 1. 各事例報告の概要とその所感

#### I. 刈田 均氏(横浜市歴史博物館)報告「様々な学校連携活動」について

開館して30年を迎えた横浜市歴史博物館のこれまでの学校連携の事業の取り組みが手際よくまとめられ、課題と展望にも言及されていた。具体的に紹介された学校教育プログラムとしては、館内の展示資料に関する学校用資料(ワークシート)の作成、「大塚歳勝土遺跡」や「吉田新田」など地域に根差した教育プログラムの提供、インターンシップ、出前授業、中学・高校生の研究発表大会の開催、教員対象の研修・講習の実施などである。これらは現在多くの博物館が、学校に提供するプログラムと重なる部分も多いのではないだろうか。ただし、氏が勤務される横浜市歴史博物館

は、市立の学校数・生徒数だけでも約500校、生徒数は約25万人を抱える大都市横浜における唯一の歴史博物館である。年間の学校対応の案件は膨大な数となり、その内容も多様化しているため、学芸員やボランティアに加え、2004年から配置されたエデュケーターの役割が増大しているというが、その負担も限界にあることが指摘された。本報告からは、改めて博物館における学校関連事業の多様さに驚かされると同時に、従来謳われてきた「博学連携」が、実は博物館側の一方的な教育サービスの提供に陥っているのではないかと、という学校側の反省点が浮かびあがってきた。「目的意識の欠ける生徒の自由見学」、「博物館の用意したプログラムへの丸投げ」という苦い経験が筆者自身にも蘇る。「連携」というからには、一方的な負担を強いてはならない。博学双方にメリットのある連携事業とは何か?改めて考えさせられる報告であった(後述)。

#### II. 土屋健作氏(小田原市郷土文化館)報告「学校収蔵資料を用いた企画展の開催と今後の展望」について

報告者の勤務する博物館で開催された市内小学校に遺る学校資料を用いた企画展「学校に眠るお宝展」開催に至るまでの経緯、展覧会に関連する講演会やワークショップ、フィールドワークなどの関連事業の紹介がなされた。周知のように、長い歴史を持つ学校には周辺遺跡から採取された考古資料や近代の教科書や、学籍簿、アルバムや貴重な生物標本など、その学校や地域の歴史が伺える多様な学校資料が所蔵されていることが多い。生徒が身近な歴史に触れられる資料として、積極的に活用している実践も報告されているが、大抵は長年整理されないまま放置され、教員の異動などで所在の有無すらも不明となっていることが多い。近年は少子化による学校の統廃合が進み、不慣れた教員によって学校資料が大量に廃棄される

深刻な事態も生じている。本報告では、学芸員が市内の学校にどんな考古資料が眠っているのか、その聞き取り調査から始まり、未整理な土器や石器等を学校に入って整理し、博物館での展示が終わり学校に返却した後も教材として使用できるようにケースにキャプションをつけて返却するまでの過程が丁寧に報告されていた。限られた人員や予算の中、学芸員の熱意によって教員との信頼関係が築かれ、企画展に結実していく……。普段からの学芸員と教員の間関係作りこそ、連携事業の基本であることを改めて感じさせられる報告であった。

### Ⅲ. 秋山幸也氏(相模原市立博物館)報告「高校と博物館の連携 部活に首を突っ込もう！」について

中・高校生の博物館利用の低さに問題意識を持った報告者が、地元の高校生の部活動との連携に問題解決の糸口を見つけた事例報告である。具体的には館内に冷凍保存されている鳥獣検体の剥製標本制作を地元高校の理科部や生物部の部員と一緒に実践したり、特定外来種として相模原市内でも目撃されているクリハラリスの対策を博物館が高校・大学などと連携して調査・対策を始めたネットワークの事例が紹介された。更にこれらの成果は毎年秋に博物館を会場に「学びの収穫祭」として、調査研究の成果が一般に公開されているという。筆者も現在、勤務校で歴史・社会科系クラブの顧問をしているが、全国的にも文科系クラブは、運動部に比して激減している。指導に熱心な顧問の異動や退職により、クラブそのものが消滅するケースが多いのである。また、本報告の指摘にあるように、部員の研究の成果を発表する場の欠如というの、減少の大きな要因である。自身の研究成果を広く知ってもらいたい、評価してもらいたいというのは、部活動への大きなモチベーションとなっているのは間違いない。高校生の博物館活用へ導くための突破口として、高校文化部の活性化のために博物館が活動の場、発表の場の拠点となるという提言は、筆者の指導する部活動でも同様で、地域博物館と連携を模索したいと思わせるような報告であった。

### Ⅳ. 内船俊樹氏(横須賀市自然・人文博物館)報告「市教委等既存事業を組み入れた新しい博物

### 館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状」について

2017年以来、博物館が中心となって開催しているイベント「みんなの理科フェスティバル」について、その誕生の経緯と現在までの経過が報告された。報告者の勤務する博物館では、これまでも小学校への出前授業や小・中学校の作品展示、SSH指定高校の校内発表、教員研修など、自然科学分野において地域の学校教育に貢献してきたが、報告者はこれらの主催や対象も様々である個別事業を博物館が結節点となって統合し、「理科フェスティバル」として結実させた。小・中・高の校種の枠を超える交流はもちろん、地元大学や地域の研究団体も巻き込み、さらには理科教育支援の貢献という展望を示して地元企業の助成まで獲得している。イベントは、回を重ねるごとに呼び掛けに応じた他地域の高校の参加も増え、合同の実験実演やワークショップ等、展示内容も充実しているという。また、8回目となる今年は過去最高の動員数となり、小学校の時に参加した生徒が高校生となって成果発表をする姿や、勤務校が異動しても継続参加する教員など、従来の博物館の主催事業では得られない連携効果も発揮されているという。イベント実現の裏では、報告者はじめ博物館スタッフによる各所管部署への理解や予算獲得、開催時期の調整など、並々ならぬ努力があったものと推察する。敬意を表したい。このような校種の枠組を越えた地域事業は、自然科学分野に限らず、歴史・地理・公共といった人文・社会科学系の分野でも開催できるだろう。また、普段地域社会との結びつきが希薄な首都圏の学校の生徒(教員も)を地域社会に結び付けさせる可能性を感じさせてもらえる報告であった。

### おわりに

#### これからの博学連携事業—無理のない継続へ—

以上、各報告から得た所感を簡単に述べさせていただいた。的外れな指摘もあるかと危惧するが、ご寛恕いただきたい。ただ、いずれの事例も学校教育に熱意ある博物館学芸員や職員個人が、本来の業務以上の努力と熱意によって成り立っている、という印象を受けた。Ⅰの刈田報告でも指摘したが、本来の「博学連携」とは、博物館側からの一方的なサービス提供ではないはずである。これまで、学校教育の単元に相当する博物館の展示・所

蔵資料を活用する学習効果については、学校(教員)側は総論として賛成していても、そのアプローチは低調であった。これでは一過性の博学連携イベントは開催できても、継続しないだろう。博物館学芸員(地域資料の専門・最新の研究成果)と学校教員(生徒指導・教科指導の専門)の相互の専門性が共有され、「協働」して教育プログラムが編まれることが肝要と考える。

2022年度より高校の歴史教育の現場では、「歴史総合」「日本史(世界史)探究」という新科目が導入され、教員からの一方的な知識注入型の授業形態を脱し、「生徒自ら問いを立てて歴史資料を読み取り、表現する授業を目指すこと」が目標に掲げられた。「どんな歴史資料が単元目標に適切なのか?」「生徒の興味を喚起する資料とは?」「学校周辺地域の歴史資料を使用したい」等、筆者を含め現場の歴史教員は、教材に適切な資料の搜索や精選に試行錯誤の日々が続いている。すべての単元で適切な資料を精選し、資料の扱いに通じた教員など皆無である。同時に各生徒から出される多種多様な問いに対し、一教員が専門的なレファレンスを適切に行うことにも限界がある。新歴史科目が導入された今こそ、地域資料の宝庫であり、最新研究に通ずる学芸員の所属する博物館の支援の必要性を感じている。前述したように博学双方の専門性を活かし、「協働」したプログラム開発が求められているのである。一例として、神奈川県内の高校日本史教員の教科研究会である日本史推進委員会が歴史新科目の特質と博物館機能の親和性の高さに注目し、2020年度から神奈川県立歴史博物館の学芸員諸氏の支援を受けながら、館所蔵や県内の歴史資料の教材化を進めているささやかな試みを紹介したい。授業単元に適切な地域資料の提示を専門分野の学芸員から受け、それを教員が教材にして授業モデル案を報告する。学芸員は最新の研究成果などを含めてモデル案を講評し、再

び教員は教材をブラッシュアップして授業実践につなげるという過程を継続し、事例の集積・共有をはかっている。当然、この成果は研究会だけの共有財産ではなく、教材化した資料や授業モデル案は、誰でも利用できるような公開の方法を模索中である。「無理のない継続」が合言葉で、双方が本来の公(校)務に「過大な負担をかけない」、一過性のイベントではなく「継続した連携」を続ける、個人のつながり以上に博学双方が「組織として運営」していく点などに留意している。この会の懇談の中から博学双方の思惑が一致し、中・高校生対象の博物館催事(浮世絵講座・古文書講座)が県立歴史博物館の主催で開催されるなど、協働の波及効果と思われる事例もみえ始めている……。

豊富な資料と最新研究の成果が学べる地域博物館が、遠足等の学校行事といった一過性の利用にとどまらず、教材開発・探究学習の場として、教員や生徒が「普段使い」できるような連携が実現できるように、今後も関わっていきたい。

改めて今回のシンポジウムに参加・コメントする機会をいただき、主催者の神奈川県博物館協会に感謝いたします。同時に本協会主催の「博学連携のシンポジウム」開催も一過性で終わることなく、「無理のない継続」を祈念して攔筆したいと思えます。

#### 〈主な参考文献〉

- 會田康範他「高校「総合」における博学連携の試み」『歴史地理教育』695・705, 2006年)
- 小貫 充「学校教育と歴史系博物館をめぐる」(『ヒストリア』167, 1999年)
- 風間 洋「『日本史探究』とこれからの博学連携」『博物館研究』(57巻8号, 2022年)
- 百濟正人「地域連携と課題研究の取り組みについて」『史料ネット News Letter』94, 2020年)
- 吉村 健「日本史学習における博物館の活用」『考古学研究』183, 1999年)

## 学校と博物館の連携で生まれる学び

小田原市立早川小学校 山田 恵里

地域には、まだ私たちが気づいていない“学びの宝物”がたくさん眠っています。それを見つけ出し、子どもたちの学びにつなげられることが、学校と博物館の連携だと今回の経験を通して感じました。

このたび、地元の郷土資料館が企画した「学校に眠るお宝展」に、早川小学校の窓口として関わらせていただきました。郷土資料館では、市内の小学校に残っている縄文・弥生時代の遺物を調査し、それらを集めて一つの企画展として展示するという取り組みを行いました。学校と博物館が協働して地域の文化を掘り起こす、意欲的な試みでした。

最初に「学校に古いものがありますか」と問い合わせを受けたとき、正直なところ、なぜ急にそんなことを聞かれるのか分かりませんでした。まず、「ガラスケースの中にあるのが確か縄文土器だったような…」と、この程度の認識です。資料室でほこりをかぶった破片たちが土器であることなど、考えたこともありませんでした。

ある日、学芸員の方が学校を訪れ、ガラスケース内の土器を見て「すごいですね」と褒めてくださいました。資料室の破片を一つ一つ確認しながら「かわいい」と言われました。そのときは「何を言っているのだ!？」と、とても驚きましたが、後日、私自身が企画展の関連イベント「縄文土器を拾って歩く」というイベントに参加して、その言葉の意味が分かりました。畑の土の中から、自分の手でかけらを見つけた瞬間、「あっ、これが土器の破片なんだ」と胸がキュンとしました。たった一片でも、そこに人の手のぬくもりや時の流れを感じるのです。あの「かわいい」という言葉には、土器への愛着と敬意が込められていたのだと、今は分かります。

学校に残っていた破片たちは、その後、郷土資料館に集められ、企画展「学校に眠るお宝展」で美しく展示されました。会場を訪れてみると、濃い藍色の絨毯の上に土器のかけらが整然と並べられ、まさに“お宝”に変身していました。展示が

終わると、それらはその展示された様子そのまま丁寧な学校へ返却され、もとの場所に戻ってきました。その心づかいにとっても感謝しています。展示されたものは同じでも、その見え方や感じ方は、博物館の手にかかるとこんなにも変わるのかと感動しました。

今回の取り組みを通して、学校と博物館が互いに補い合う関係の大切さを実感しました。学校では子どもたちに地域の歴史を実感させたいと思い、博物館では地域の文化を次の世代へ伝えたいと考えています。方向は同じなのに、日常の忙しさや仕組みの違いから、なかなか思いが通じにくいのが現実です。でも、一度でも連携の実例ができると、それが翌年度にも自然に引き継がれていくことが多いと感じます。つまり、大切なのは「最初の一回目をどう実現するか」なのです。

今回、学芸員の方々と関わる中で、「学芸員さん」ではなく名前で「〇〇さん」と呼び合える関係ができました。「ねえ、こんなことしてみたいんだけど」「他の学校では今こんなことしていませんか?」と、気軽に声をかけ合えるようになったのです。こうした関係ができたことで、連携がぐっと身近なものになりました。

博物館の方から、「同じ授業を同じ時期にいくつかの学校でできると、準備が楽になる」と聞きました。もし、ある学校で授業が実施されたときに「あなたの学校もどうですか?」と知らせてくれるようなシステムがあれば、多くの学校がきっと喜んで参加するだろうと思います。

今回の経験を通して、学校と博物館の連携は、特別な行事ではなく、日常の学びの一部として続けていけるものだと感じました。地域の歴史や文化に触れながら、子どもたちが「自分たちのまち」を誇りに思うようになること。それこそが、博物館と学校がともにめざす姿なのだと思います。今後も、今回生まれたつながりを大切にしながら、学校と博物館が互いに学び合い、支え合う関係を広げていきたいです。

# 占領期新興新聞資料の価値と可能性

ニュースパーク（日本新聞博物館） 工藤 路江

## はじめに

ニュースパーク（日本新聞博物館）は、運営母体である一般社団法人日本新聞協会が1948年から収集・整理してきた協会加盟紙・非加盟紙の製本資料（以下、合本）を、収蔵庫で保管している（図1）。これまで企画展や出版物などで利用する機会はあったものの、学術的な調査研究での活用は進んでいなかった。しかしここ数年、大学の研究者などから閲覧・調査の要望が相次ぎ、研究成果の報告が増えてきた。また、外部からの問い合わせ対応を行うなかで、他の機関では所蔵されていない銘柄の新聞が多く含まれていることや、連続する期間の紙面が製本化されていることによる閲覧の利便性の高さなど、合本資料群の価値を再認識するに至った。さらに、2000年に開館した日本新聞博物館の資料収集作業に伴い、新聞コレクターからの購入や一般からの寄贈などで収集した占領期の新興新聞もあり、合本と組み合わせることで、より充実した資料構成となった。

そこで本稿において、所蔵する占領期新興新聞資料について、企画展示や出版物での活用、研究者の調査への協力など過去の事例を基に、その価値を見出し、今後のさまざまな研究利用の可能性を考えてみたい。



図1 鴨居収蔵庫の合本。

## 1. 日本新聞協会による新興紙収集と製本作業 戦後新興紙とは

太平洋戦争が終わり、日本が連合国の統治下に置かれた「占領期」に入ると、全国各地でさまざまな新聞が誕生した。戦中から戦後、新聞用紙は政府の監督下で割当統制されていた。1945年10月、GHQは割当を民主化するため、新たな用紙割当機関の創設を日本政府に要請<sup>1</sup>、同年11月に新聞及出版用紙割当委員会が設置された。以後、翌年10月までに新たに用紙割当を認められた新聞社は180に上っている。GHQは戦時中に世論の指導的役割を果たした既存紙を警戒しており、割当委員会はGHQの意向を受けていたため、新興紙を優遇する用紙割当が実施された。新興紙を育成し、地方自治や民主化を推進しようというねらいがあったとする見方もある<sup>2</sup>。メディア史を専門とする立教大教授の井川充雄氏は新興紙について、①戦時下の新聞統合で廃刊もしくは吸収された新聞の題号を継承した「復刊」という形のもの、②既存紙が人員の派遣や資金援助をした「協力紙」や、別の題号で発行した「夕刊代替紙」、③既存紙とは関係がないもの、の3つに類型化している<sup>3</sup>。敗戦後、ニュースと活字に飢えた人々からの需要もあり、新聞は「出せば売れる」という状況であった。しかし、新興紙は設備や人材が乏しく、他社に印刷を依存しているケースも多かったため、最新ニュースの掲載が遅れるなど、さまざまな問題を抱えていた。そうした中、1949年11月から全国紙や地方紙の一部が統制外のセンカ紙を使い夕刊発行を開始するなど、既存紙の攻勢も本格化する<sup>4</sup>。やがて戦後復興が進み、用紙事情が改善されると、1951年5月には用紙割当制度が廃止され、新聞販売の自由競争が始まる。戦前から続く既存紙が多く読者を獲得し、旋風を巻き起こした新興紙は一部を除き姿を消した。

## 合本収集の経緯と期間

1946年7月に設立された日本新聞協会は、1948年1月から協会加盟社、非加盟社の新聞の収集・保存を開始、製本済みの新聞原紙を保存するため、1972年に横浜市内に資料分室を建設した<sup>5</sup>。スペースに限りがあることから、1996年に分室を博物館の収蔵庫として建て直す際に、マイクロフィルム化されていない協会加盟紙のみ原紙の保存作業を継続することになった<sup>6</sup>。これまで保存してきた原紙は、マイクロフィルム化されているものは処分し、されていないものは保存を継続した（現在、原紙の包括的な収集は中止）。さらに、2007年度に合本製作を中止し、一部の合本については新聞社や公共図書館への寄贈または処分を行った。2008年4月時点での合本の所蔵は約680タイトル、約4000点となっている。現在は日本新聞協会の機関紙「新聞協会報」の合本が毎年1冊収納されている。この結果、日本新聞協会非加盟で、マイクロフィルム化されなかった戦後新興紙は合本の形で保存が続けられてきた。

## 資料の価値（他館での所蔵状況など）

先述の通り、占領期新興紙はその多くが数年で消滅し「幻の新聞」となった。所蔵機関が少ないうえに一般公開している機関は限られるため、当館においては貴重資料として扱う。

当館が所蔵する新興紙では類型②に該当する「夕刊とうほく」（河北新報）、「夕刊信州」（信濃毎日新聞）、「夕刊ニヒガタ」（新潟日報）、「夕刊ひろしま」（中国新聞）など、地方紙が発行した夕刊紙が多い。また、北海道新聞が発行した週刊紙「北海道ウイークリー」（1946年12月創刊）や、全国紙が用紙統制外のセンカ紙で発行した夕刊紙もある。用紙事情の改善により、各社が朝夕刊セット制を復活すると、こうした別建て夕刊紙の多くはそちらに統合された。既存紙との関係がない独立系の新聞（類型③）としては同盟通信出身の松本重治が創刊した「民報」や、同じく同盟出身の岡村二一らが創刊した「東京タイムズ」などが所蔵されている。戦前の通信社に勤務した人物が、相次いで新聞を創刊したことは興味深い。また、後述する「新夕刊」の所蔵も多いが、戦前に発行されていた「やまと新聞」を復刊・改題する形で創刊されたため、類型①として分類する。

こうした新興紙について、原紙での保存は国立

国会図書館、東京大学、同志社大学などで確認できる。また、一部がマイクロフィルム化され国立国会図書館などにも所蔵されている。他館では欠号が多い新聞でも、当館においてある程度まとまった形で保存されているのは、先述の通り、新聞協会加盟社、非加盟社の新聞を継続的に収集・保存してきたからである。外部の研究者から問い合わせがある際には「他機関になかったため問い合わせた」というケースが多い。例えば先述の「北海道ウイークリー」は、国立国会図書館、北海道立文学館などに所蔵があるものの、148～170号の間でいくつかの欠号があり、当館の合本（136～170号収録）で欠号を補うことができる。

## 2. これまでの保存と活用

### 日本新聞博物館での保存

日本新聞協会は1998年、新聞博物館の運営を担う財団法人日本新聞教育文化財団（2011年に新聞協会が吸収合併）を設立し、2000年10月に日本新聞博物館が開館した。新聞・ジャーナリズムの歴史を継承すべく、会員新聞社や個人から新聞編集・製作などに関わる資料を収集してきた。新聞協会が戦後から収集・製本・保存してきた合本は、博物館に併設された図書室・新聞ライブラリーの資料となった。同施設は2016年の博物館リニューアルに伴い、2015年に閉鎖となり、新興紙はそのまま博物館の資料として所蔵されることになった。紆余曲折を経ているが、その間に保存場所についての変更はなく、先述の分室（収蔵庫）において保管を継続している。

### ゆまに書房『占領期新興新聞集成』への協力（2006～07年）

当館の新興紙に、早くに光を当てたのはゆまに書房の『占領期新興新聞集成』の刊行である。メディア史研究者・有山輝雄氏（当時・東京経済大学教授）と、井川充雄氏の監修により、ゆまに書房から2006年に『日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 九州・沖縄編』、07年に『日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 近畿編』が出版された。前者は「九州タイムズ」「長崎民友」「新島原」など、後者は「大阪時事新報」「京都日日新聞」「熊野新聞」などを各12枚のDVDに収録した復刻集成である。同社ウェブサイトの商品紹介のページには、有山氏が「戦後新興紙は、ほとん

どの図書館等で体系的に保存されておらず、利用しにくかった。今回の復刻によって格段に利用しやすくなり、研究に寄与するところは非常に大きい<sup>7</sup>というコメントを寄せている。

### 日本新聞博物館企画展での活用

当館の企画展において、占領期新興紙を活用している一例を紹介する。

#### ① 「幻の新聞展—戦後生まれて、やがて消えていった新興紙—」2001年度

日本新聞協会が合本で保存していた約40紙の新興紙とそれらの創刊号・休刊号の一部を公開した。創刊号・休刊号については、当博物館が収集家・羽島知之氏から購入したものが中心となっており、写真新聞の先駆けとなった「サン写真新聞」や編集綱領に「平易に明るく家庭中心に」を掲げた「第一新聞」の創刊号、「新夕刊」の創刊予告号などを展示した。「新夕刊」は1946年1月に東京で創刊。編集を担当した林房雄が連載小説を掲載、横山隆一、田河水泡、清水崑らが漫画を担当し、充実した文芸欄を誇っていた。

#### ② 「新聞漫画の眼—人 政治 社会—」2003年度

新聞に風刺画「ポンチ」が登場した江戸時代末から130年にわたる新聞漫画の歴史をたどった展示。新聞漫画が、どのように人や政治・社会を捉え表現してきたのか、時代背景や世相との関係性にも触れた。この企画展では「夕刊フクニチ」「新夕刊」「夕刊朝日新聞」などの占領期の各新聞に連載された長谷川町子の「サザエさん」や、「新夕刊」「夕刊とうほく」に掲載された横山隆一の漫画を紹介した。

上記のように、出版や展示での活用事例はあるものの、合本収録期間に限れば欠号が少ないという特徴を生かす調査や研究が進んでいないのが現状である。

### 3. 本資料群のもつ可能性

#### 外部研究者による「新夕刊」を活用した調査・研究の事例

当館の新興紙資料に別の角度から光を当てたのが、文学の研究者である。大阪大学大学院人文科学研究科教授・斎藤理生氏からの要望を受け、「新夕刊」の調査に対応した。斎藤氏は当館が所蔵する1946年5月以降の紙面を閲覧し、その中から坂口安吾と三島由紀夫の随筆を発見。いずれも『坂

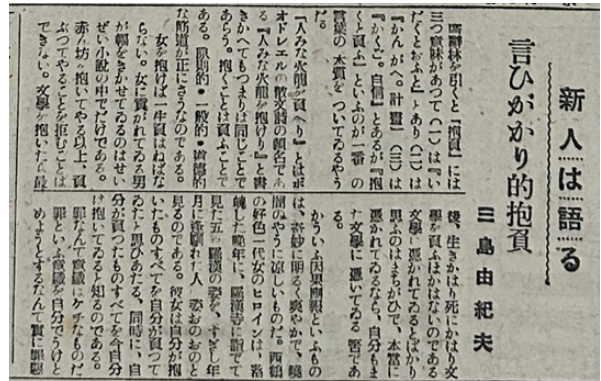


図2 三島由紀夫「言ひがかり的抱負」。

口安吾全集』『決定版三島由紀夫全集』に未収録の資料であることを発表した<sup>8</sup>。中でも「新夕刊」の1947年6月29日付に掲載された三島由紀夫の随筆「言ひがかり的抱負」（図2）は、新発見資料として全国紙や文芸誌などで取り上げられた<sup>9</sup>。

斎藤氏が当館を訪れるきっかけとなったのが、小津安二郎研究者の平山周吉氏の著作『小津安二郎』（新潮社、2023年）に記述があった、「新夕刊」の小津の寄稿の引用文である。これにより同紙が当館に所蔵されていることを知ったという。平山氏も当館の所蔵資料を調査した研究者である。斎藤氏が同紙の所蔵機関を調査したところ、国会国会図書館では創刊直後や1948年以降の紙面は所蔵されているが、46年6月から47年末までの紙面は断片的な所蔵になっているという<sup>10</sup>。「新夕刊」については、ほかの研究者からも「国会図書館になかったため」という理由で所蔵問い合わせや閲覧の依頼を受けた。

#### 今後の調査・活用の展望

斎藤氏をはじめとする文学の研究者から「新夕刊」の問い合わせが相次いだ理由として、小林秀雄、亀井勝一郎、林芙美子、菊池寛、石川達三など、著名な作家や文化人たちの寄稿が多く掲載されていることが挙げられる<sup>11</sup>。「新夕刊」は編集綱領に「正確なるニュース」「公正なる解説」を掲げているが、「穏健にして明朗なる娯楽」の提供も明示し、文芸記事に力を入れていた。

1945年12月に「民報」を創刊した松本重治はインタビューにおいて「一般的にほんとうに民主主義、日本の民主主義化という問題に役立つような新聞をひとつやろうじゃないか」<sup>12</sup>という考えが発刊の意図にあったことを語っているが、「ほん

うに」という言葉から、民主主義を発展させる担い手は自分たちであるという、既存紙への対抗意識が窺える。「民報」は社説で、東京裁判の意義は「日本の過去の生き方」が徹底的に裁かれることにあり、そのことが民主化に繋がると説く<sup>13</sup>。同紙は戦前からの日本の政治の問題点と責任の所在を明確化し、今後の政治改革について紙上で提起していた<sup>14</sup>。また、占領期という特異な時期は、戦時体制・軍国主義の崩壊を受け、日本の新聞が新たなジャーナリズムの形を模索する時期でもあった。個人的には「再生」と「民主化」におけるメディアの歴史をたどる資料になるのではないかと感じている。

占領期の新聞は記事や広告、小説、漫画に至るまで、当時の社会・世相が垣間見える資料であり、今後も文学、歴史学、社会学など、さまざまな分野の研究者による「新発見」が期待される。1948年の「大阪タイムズ」（1946年創刊、のちに「スポーツニッポン」に合併）には化粧品、マニキュア、香水といった美容品や、宝石店、呉服店、温泉旅館、高峰三枝子主演の映画などの広告が掲載されている。終戦から3年経ち、人々の日常・娯楽が戻りつつあることを感じさせる。広告を眺めるだけでも当時の空気感が伝わるのが興味深い。現在、研究機関に所属する研究者や学芸員については閲覧・調査を受け付けているため、お気軽にご相談いただきたいと思います。

## 註

- 1 井川充雄著『戦後新興紙とGHQ—新聞用紙をめぐる攻防』世界思想社、2008年、P28
- 2 同書、P61
- 3 同書、P61
- 4 春原昭彦著『四訂版 日本新聞通史』新泉社、2007年、P247
- 5 日本新聞協会編『日本新聞協会四十年史』社団法人日本新聞協会、1986年、P469
- 6 日本新聞協会編『日本新聞協会五十年史』社団法人日本新聞協会、1996年、P611
- 7 ゆまに書房公式HP「日本新聞博物館所蔵 占領期新興新聞集成 九州・沖縄編」  
<https://www.yumani.co.jp/np/isbn/9784843319376>
- 8 「新潮」第121巻第7号、2024年7月、P200
- 9 以下、掲載例  
「三島由紀夫 全集未収録の随筆を確認 1947年の新聞に掲載」朝日新聞、2024年6月6日朝刊  
「活字の海で 三島由紀夫 22歳の随筆を発掘」日本経済新聞、2024年6月29日朝刊  
「新発掘 三島由紀夫・坂口安吾 全集未収録随筆」新潮、第121巻第7号、2024年7月
- 10 「新潮」第121巻第7号、2024年7月、P202
- 11 斎藤理生著「《資料紹介》『新夕刊』文藝記事目録（一九四七）」阪大近代文学研究、23号、2025年
- 12 日本新聞協会編『別冊新聞研究 聴きとりでつづる新聞史』第12号、1981年5月
- 13 「社説 裁かれる『日本の生き方』」民報、1946年7月21日
- 14 吉田健二著『戦後改革期の政論新聞 —「民報」に集ったジャーナリストたち—』文化書房博文社、2002年、P62

# 戦後80年 太平洋戦争関係所蔵資料データ等の公開について

横浜みなと博物館 島宗美知子

## はじめに

2025（令和7）年は戦後80年の節目の年であった。公益財団法人 帆船日本丸記念財団が管理運営する横浜みなと博物館では、太平洋戦争にかかわる2種類の資料データ等の公開を開始した（図1）。「SCAJAP（スカジャップ）番号標示船写真」と

「重要文化財帆船日本丸附資料 日本語記載の航海日誌」である。本稿では、それぞれの資料の内容と、公開方法等について紹介する。

## 1. SCAJAP番号標示船写真

1945（昭和20）年の敗戦により、連合国総司令部に日本商船管理局（SCAJAP = Shipping Control Authority for JAPANESE Merchant Marine）が設置され、その管理下において、鋼船で100総トン以上の日本船舶は登録番号であるSCAJAP番号を舷側に標示し、運航許可を得て航行することになった。これはサンフランシスコ講和条約が発効された、1952（昭和27）年まで行われた。

2002（平成14）年、1,900枚あまりのSCAJAP番号が標示された船舶のプリント写真が日本郵船歴史資料館（現 日本郵船歴史博物館）から横浜みなと博物館へ寄贈された。

写真の大きさは六つ切り（203×254 mm）程度の横型で、まれに小型や、六つ切りよりも若干大きめ、また縦型のものもある。すべてモノクロ写真で、写真の左上に紙テープ状のものが貼られ、SCAJAP番号と英語で表記された船名がタイピングされている（図2）。

プリント写真の裏面には、船名やSCAJAP番号が手書

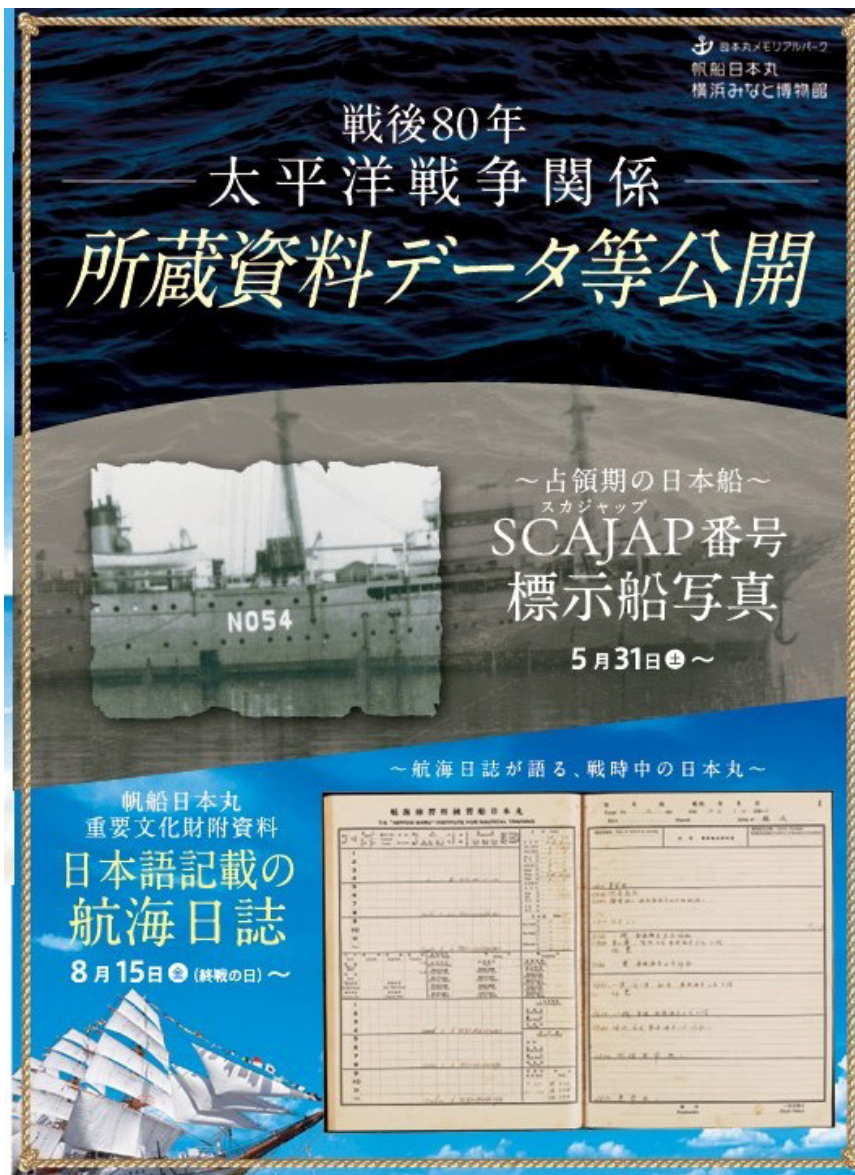


図1 戦後80年 太平洋戦争関係 所蔵資料データ等公開 チラシ（A3判 ニつ折り）。

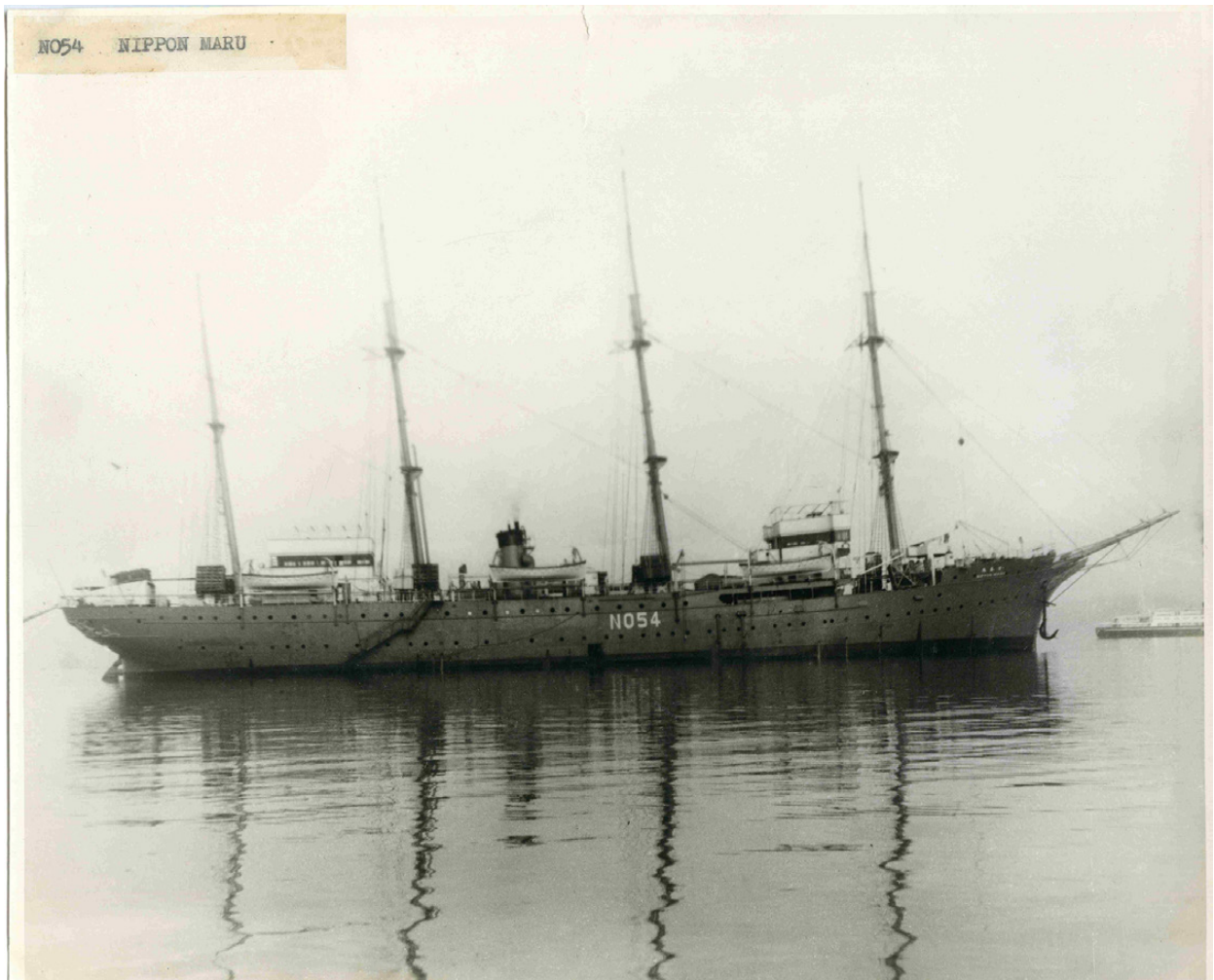


図2 SCAJAP番号 N054 練習船 日本丸.

きで記されていたり、海運会社や造船所のスタンプが押されていたり、写真館のスタンプが押されているものもある。

専門家によれば、これらの写真はSCAJAP番号標示船のうちの約8割を網羅している、という。

2002（平成14）年に寄贈を受けた際、SCAJAP番号標示船写真について船舶史の専門家の協力を得て、写真をSCAJAP番号のアルファベット順に並べ、船名、船種、そして船主についてリストを作成した。それから20年ほどが経過し、あらためて写真を眺めてみると、戦後の日本を支えた数多くの船の姿がそこにあった。戦後80年の節目の年にこれらの写真を公開し、SCAJAP番号標示船とはいかなるものなのかを広く知っていただくこと、占領期の联合国総司令部の日本船管理について関心を持っていただくこと、そして戦後に活動した日本船の写真を公開して、日本船研究がより深化していくことなどを願って公開することとした。

写真の公開は、横浜みなと博物館ライブラリー

で、パソコンでのデジタルデータと、冊子（紙ベース）での閲覧とした。来館者には冊子でSCAJAP番号標示船の写真の概略を見ていただき、デジタルデータで拡大して船の細部までご覧いただきたい、という趣旨である。横浜みなと博物館ライブラリーを閲覧場所としたのは、ライブラリーの利用促進を考慮したものである。

実際の作業は、2024（令和6）年の6月からスタートした。長年、横浜みなと博物館の事業にご協力をいただき、船の調査を続けてきた船舶部会「横浜」の協力を得て船ごとのデータの整理・修正を進めた。

11月上旬から本格的にデジタル化の作業を始めた。寄贈された時よりも技術が進歩してデジタル化作業が容易になったことから、デジタル化の作業（スキャン、写真データ1点ごとにSCAJAP番号、船種、船名、横浜みなと博物館の資料管理番号を入力）は博物館内で行った。解像度は600 dpi。寄贈をされた写真は1,900枚余りだ

が、裏面に記載がある場合には裏面もデジタル化したため、データ総数は3,000点を超えた。デジタル化作業は翌2025（令和7）年3月上旬まで5か月あまりを費やした。

全ての写真のデジタル化の目途がついたところから、冊子（紙ベース）の準備を始めた。船名のアルファベット順にA4判1ページに3隻の船の写真を掲載し、プリント写真裏面にデータがあるものについては、裏面画像を船体写真の横に添える、というレイアウトとした（図3）。

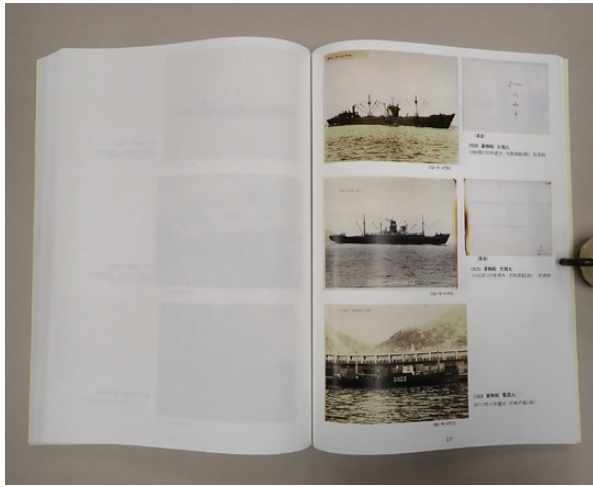


図3 SCAJAP番号標示船冊子のイメージ。船の写真が鮮明に見えるよう、片面印刷とした。

冊子（資料集）は8冊1セット（1. 解説・総目次、2. SCAJAP番号標示船写真のアルファベット順に A～E、同3. F～J、同4. K、同5. L～N、同6. P～S（O、Qなし）、同7. T～U、同8.W～Z（Vなし））を印刷製本し、ライブラリーに配架した（図4）。

パソコン1台を設置し、SCAJAP番号標示船写真のデータと冊子（資料集）は2025（令和7）年5月31日（土）より横浜みなと博物館ライブラリーで公開を開始した（図5）。WEBサイトには、船名のアルファベット順の目次を掲載した。ライブラリーでのデータ閲覧は、占有を防ぐために1回30分程度とした（他の利用者がいなければ、継続可）。

あわせて、SCAJAP番号標示船や今回公開した写真の一部を紹介するパネル展を博物館ロビーで8月11日（月・祝）まで実施した。

公開後、船に関心のある方や調べ物をしておられる方がライブラリーにお出でになり、熱心にデジタルデータや冊子をご覧になっていた。何人か



図4 ライブラリーに配架したSCAJAP番号標示船の冊子（資料集）。右側の2冊の黒い冊子は参考文献。



図5 SCAJAP番号標示船のデジタルデータが閲覧できるパソコン。

にお話を伺ったところ、「見たことのない船がたくさんある」「〇〇という船の写真を探していた。



図6 帆船日本丸.

WEBの目次に船名があったので見に来た」「絵本に描く船の写真を確認にきた」などとお話されていた。また、冊子の複写や画像データの貸し出し申請もあった。

## 2. 帆船日本丸 重要文化財附（つけどり）資料 日本語記載の航海日誌

公益財団法人 帆船日本丸記念財団が管理運営する帆船日本丸は、2017（平成29）年に国の重要文化財に指定された（図6）。このとき、船体1艘とともに附（つけどり）として、日誌類をはじめとする文書記録類181点及び図面類351点（計532点）が指定された。これら附資料は、横浜みなと博物館で保管し、整理を進めている。

帆船日本丸では、法令に従い、航海上の基本情報、例えば船の行動や気象、燃料や清水（せいすい）の残存量、船内の出来事等を当直航海士が英文筆記体で航海日誌に記載していた。日誌類の整理を行うなかで、太平洋戦争中の1942（昭和17）年8月から終戦後の1945（昭和20）年9月までは日本語で記載されていたことがわかった（図7）。

太平洋戦争中の帆船日本丸の行動については、帆や帆桁（ヤード）を取り外して汽船となって瀬

戸内海に移動し、戦時緊急物資輸送（石炭輸送）を実施、終戦間際には神戸港に長く停泊していたとされ、詳細な行動はあまり知られていない。

しかし、太平洋戦争中の航海日誌を読むと日々の行動がよくわかる。実習生を乗船させて航海訓練を継続し、北九州・若松港と兵庫県尼崎の日本発送電を往復して石炭輸送を行い、潜水艦の攻撃を避けるための之字運動（のじうんどう）の訓練や広島県の大竹にある海軍潜水学校で対潜訓練を行っていたこと、空襲が激化すると空襲警報や警戒警報に備えて疎開錨地へ移動、近くで被災した船があれば救助に向かった、などの日々の記録が日本語で記載されていた。

戦後80年の節目に、帆船日本丸の戦時中の活動について広く伝え、帆船日本丸への理解を深めるとともに戦争と船について考えるきっかけにしたいと考え、日本語で記載された航海日誌のデジタルデータとデータから1日分をA3判1枚に出力した冊子の公開を行うこととした。公開場所はSCAJAP番号標示船写真と同様に、横浜みなと博物館ライブラリーである。

2023（令和5）年末ころから、公開に向けての準備を始めた。日本語で記載された航海日誌のペー

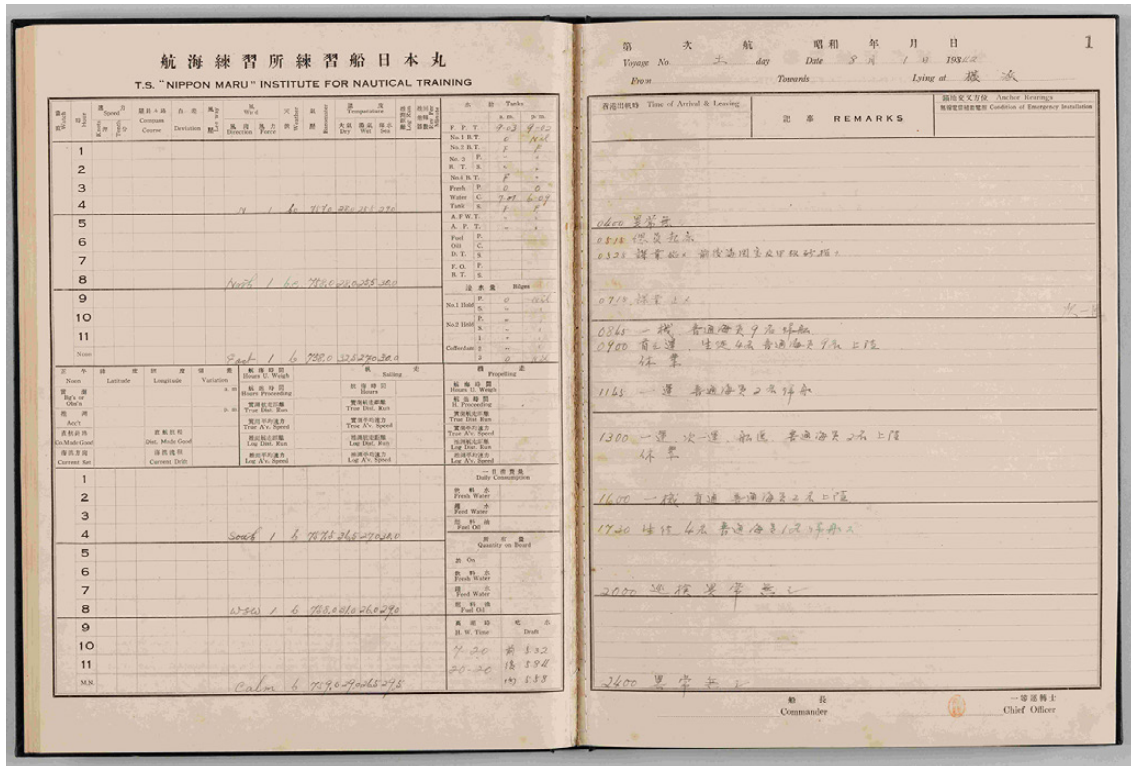


図7 日本語で記載された帆船日本丸の航海日誌 [1942年8月1日]. 右側のページにその日の出来事が記載されている。

ジすべてを簡易的に撮影し、出来事が記載されている部分を中心にデータ入力を行っていった。当初は、日々の出来事をすべて入力していこうと考えたが、文章量が多く公開予定の2025（令和7）年夏までの入力が難しいことがわかった。そこで、まずは毎日の日本丸の位置情報（発着港名、錨泊地）をエクセルデータに入力することから始めた。一通り入力したのち、航海日誌の出来事ページの記載内容のなかで『練習帆船 日本丸・海王丸』（千葉宗雄著、1973年 丸の内出版発行）を参考に戦争にかかわる内容を中心に入力を進めた。

2024（令和6）年末より、戦後80年となる2025（令和7）年夏の航海日誌デジタルデータ等公開作業が本格化する。公開にあたって関係各所との調整、リーガルチェック、今後の帆船日本丸資料の整理保管・公開に活用するための閲覧料金設定についての検討などを始めることとなった。また博物館内で戦時中の帆船日本丸の行動について紹介するパネル展を計画していたが、あわせて、多くの人が行きかう横浜市役所での展示の提案もあり、これらを並行して調整を進めた。

2025（令和7）年2月から3月にかけて附資料として指定されている帆船日本丸の航海日誌（全70

冊）のデジタル化を実施（委託）。データ納品後に横浜みなと博物館で1日ごとのデータにタイトル（主に日付）の入力を行った。

閲覧料金は、日本丸の所有者である横浜市と協議をすすめた。デジタルデータ、冊子（紙ベース）ともに半日1,000円、冊子からのコピーは1枚100円（カラー）とした。時間制限があり有料閲覧となるため、事前の予約を呼びかけることとした。

2025（令和7）年8月15日（金・終戦の日）から、帆船日本丸の日本語記載の航海日誌のデータ等の公開を横浜みなと博物館ライブラリーで開始した（図8）。あわせて、博物館ロビーでは航海日誌と太平洋戦争中の帆船日本丸の活動について紹介するパネル展を実施した（図9）。

WEBでは、日誌データ等の公開のお知らせと、閲覧の参考にしていただくため、位置情報と戦争に関わる記事を入力した抜粋版を公開した。

また、9月中旬には、横浜市役所内2か所で帆船日本丸 について紹介する展示を行い、より多くの方々に太平洋戦争中の帆船日本丸の航海日誌と、帆船日本丸の歩みについて紹介をすることができた（図10）。

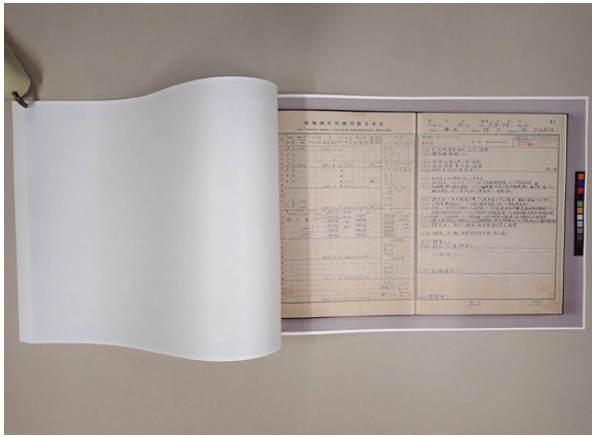


図8 航海日誌データを出力した冊子。A3判1枚で1日分の日誌が見られる。



図10 横浜市役所2階での展示の様子。



図9 帆船日本丸 日本語記載航海日誌パネル展。

### 3. 終わりに

2020（令和2）年の戦後75年の年は、コロナ禍で活動が制限されていた。そんな中で、太平洋戦争を体験された方が高齢になってきていて、戦争について伝えることが難しくなっていることが新聞等で報道されていた。各地にある太平洋戦争関係の資料を展示していた資料館等も資金や運営を担

う人材が不足して閉鎖になっているとも聞いた。一方で10代の若者が、戦争体験者から話を聞いてそれを次の世代に伝えることが私たちの役割である、との決意を新聞の投書欄で見て心強い気持ちにもなった。博物館に務めるものとして、所蔵する資料で何かできることはないか、と考えはじめていた。

2022（令和4）年にはウクライナ侵攻が始まり、戦争への不安がこれまで以上に強く感じられるようになった。そして、2025（令和7）年の戦後80年の節目の年に、横浜みなと博物館が管理する資料を活用して、太平洋戦争と船について考えるきっかけにしてもらえるような事業を行うことを目指した。

公開したSCAJAP標示船の写真と、日本語記載の航海日誌のデジタルデータ等の公開は、横浜みなと博物館ライブラリーで今後も継続していく予定である。いつでも、ここに来れば見られる。博物館の資料を大いに活用して、戦争や船を始めとする様々な研究に役立てていただければと願う。

# 今日における博物館紀要等刊行物の流通に対する一考察

## —大磯町郷土資料館を事例として—

大磯町郷土資料館 真保 元

### はじめに

博物館では紀要などの研究報告が多数掲載された刊行物が発行されている館もあり、当館も例に漏れない。それでは、これらの刊行物がどれだけ公開されているだろうか。客観的に明らかにすることは困難だが、例えばインターネット上で検索でき、閲覧することができるかといった指標を設けることはできよう。今日、国立情報学研究所が運営するCinii Research（以下Cinii）をはじめ、ジャーナル類を検索する手段は多岐にわたる。

筆者の勤務する大磯町郷土資料館（以下当館）も1988年開館以来、歴代学芸員などによって数多くの研究報告類が蓄積されてきた。しかし、これらの刊行物類は多くがCiniiなどに表示されないまま、現在に至っていることが課題であった。そこで、本稿はこの課題を解決すべく取り組んだ当館の刊行物類の公開に向けた取り組みを事例として、今日における紀要類等刊行物の流通のあり様を考察する。

### 1. 問題の所在—今日の博物館刊行物をめぐって—

当館の取り組みをめぐる前に、卑近だが筆者周辺の研究環境について簡単に触れたい。筆者は本稿執筆現在の2025年時点で成城大学大学院にも民俗学の大学院生として在籍している。いわば文系アカデミアの現状を垣間見ているが、大学院生・学部生のゼミ指導等の場に立ち会うことがあり、研究論文の探し方の一つとして教員から最初に案内があるのがCiniiなどのインターネット検索による論文検索である<sup>1</sup>。キーワードを入力すれば論文がヒットし、インターネット上で公開されている論文ならばその場で読むことができる。先行研究を調査するにあたり、最初の手順となる。その後、それらの論文の参考文献類から連鎖的に関連研究が浮かび上がり、研究を深めることができる。

もちろん、上記で示した事例は一例であり、分野あるいは教員によって指導方針が異なることは考えられようが、Ciniiが今日の研究活動において

一助となっていることは否めない。Ciniiのような情報ツールは研究に不可分な存在となっている。

多数の郷土資料が集まり、調査が行われる場である博物館が刊行する紀要類は、地域の情報の宝庫である。例えば神奈川県博物館協会が刊行した『学芸員の仕事』でもテーマの一つとしてとりあげられており、当館元学芸員の佐川和裕によれば、紀要や年報といった刊行物は、資料や情報を視覚的に共有することを可能にするため、地域の人々や利用者への還元手段として大変有効だという（佐川, 2005: p.16）。

さて、Cinii等インターネットジャーナル検索が発達した現在、博物館の紀要類が抱えている課題の一つに、前述のCiniiに目次情報が掲載されないといった埋没性があると持田誠は指摘している（持田, 2016）。「今日ではインターネットで検出されない文献は、世の中に存在しないものと同然となりつつある」（持田, 2016: p.266）との指摘は正鵠を射るものであろう。持田と高田祐一はこの課題を克服すべく、奈良文化財研究所（以下奈文研）の「全国遺跡報告総覧」を活用したアクセス性と検索性の向上を提示した（持田・高田, 2021）。現在でこそCiniiに紀要類の目次が掲載されている博物館が増えてきたものの、掲載されていない館も多々あり、途上の段階にあるといえよう。

当館もまた、これまでCiniiへの登載が無く、後述するがホームページ上で公開はしていたもののアクセス性がやや乏しかった<sup>2</sup>。この問題を解決すべく、当館では奈文研の全国文化財総覧を活用し、デジタル公開の促進を図った。本稿ではその作業の一端を報告する。当館の刊行物の変遷をたどり（2章）、実際の作業内容の報告およびフィードバックを見ていく（3章）。

### 2. 大磯町郷土資料館での刊行物の変遷

当館の開館は1988年であるが、開館以前にも当館刊行の刊行物の系譜に位置づけることができるものがあつた。國見徹による整理を参考にすれば

(國見, 2024: p.33)、大磯町立図書館内に当館の前身にあたる郷土資料研究室(1983年開設)があり、刊行していた『資料室だより』がそれに該当する。『資料室だより』は1985年に1巻1号が刊行され、1988年刊行の3巻16号で幕を閉じた。調査概報のほか、資料収集の思い出も回顧されており、博物館学的に見た際に当館の歴史を振り返る資料となる。

開館後は毎年の事業報告を『年報』として年1回刊行している。『年報』に研究報告が載るようになるのは1997年からであり、それまでは『Report—大磯町郷土資料館だより—』(以下資料館だより)が小論文や調査概報を掲載する役割を担っていた。『資料館だより』は他館という博物館だよりに該当する刊行物で、1991年の刊行当初は年3回発行だったが、現在は年1回発行で、2025年現在は45号まで刊行されている。なお、『年報』は従来『年報—令和5年度—』と、『年報』に年月次が付されていたが、2024年刊行分より『大磯町郷土資料館年報』36号と巻次へ変更し、あわせて同じタイミングで書誌名に館名を入れることとした。

さて、1997年からは『年報』の末尾に研究報告が掲載され現在に至るが、なぜ当館では紀要が単体では存在しないのか。佐川によれば当初は紀要単体で刊行する予定があったが、財政的都合でできなかったとある(佐川, 2005: p.17)<sup>3</sup>。そのため、本稿執筆時の2025年現在まで、年報の末尾に研究報告を付す形となっている。年報には、大磯

町をはじめとした研究報告や当館の取り組みが数多く掲載されている。

以上、ここまで当館の刊行物の変遷を簡単にではあるが整理した。地域をまなぐす数多くの研究が積み重ねられてきたが、これらがCiniiなどに掲載されないまま、いわば灰色文献として現在に至っていた<sup>4</sup>。

### 3. 公開に向けた取り組み

#### —全国文化財総覧の活用—

##### (1) 公開までの流れ

今回の作業では、Ciniiに論文類目次が掲載されることを最終目標とした。表示するための手段にはいくつかの方法があり、博物館自らができる取り組みとして、例えば電子ジャーナルプラットフォームであるJ-Stageへの登録がある。

しかし、筆者自身が所属している研究団体でも、J-Stageへの登録はハードルが高いものとして位置づけられており、筆者自身業務の傍らで行うことが厳しく感じたため断念した。そこで、他の方法を模索したところ、奈文研を代表として推進している全国文化財総覧があった(2024年登録作業当時は全国遺跡報告総覧)。県内でも他館を見れば、神奈川県立歴史博物館の紀要は書誌情報および考古系論文の本文用PDFデータが掲載されている。相模原市博物館や平塚市博物館などの紀要も書誌情報のみだが掲載されており、Ciniiで表示されている。筆者も2024年10月ごろに登録手続き

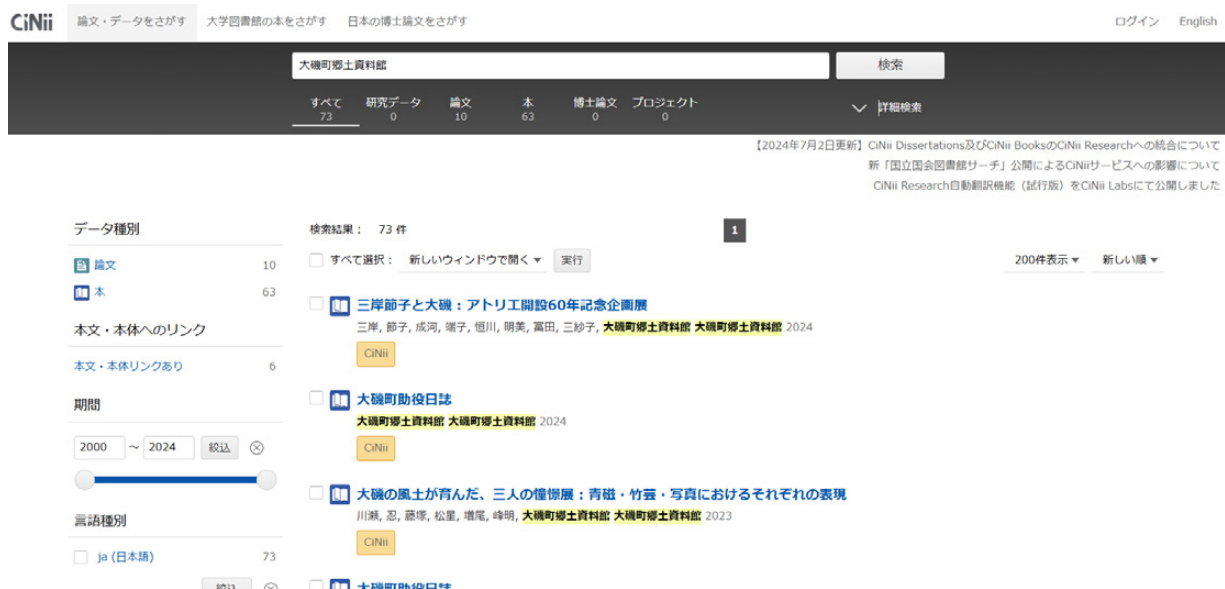


図1 登録作業前のCiniiでの検索結果 (2024年10月25日撮影)。

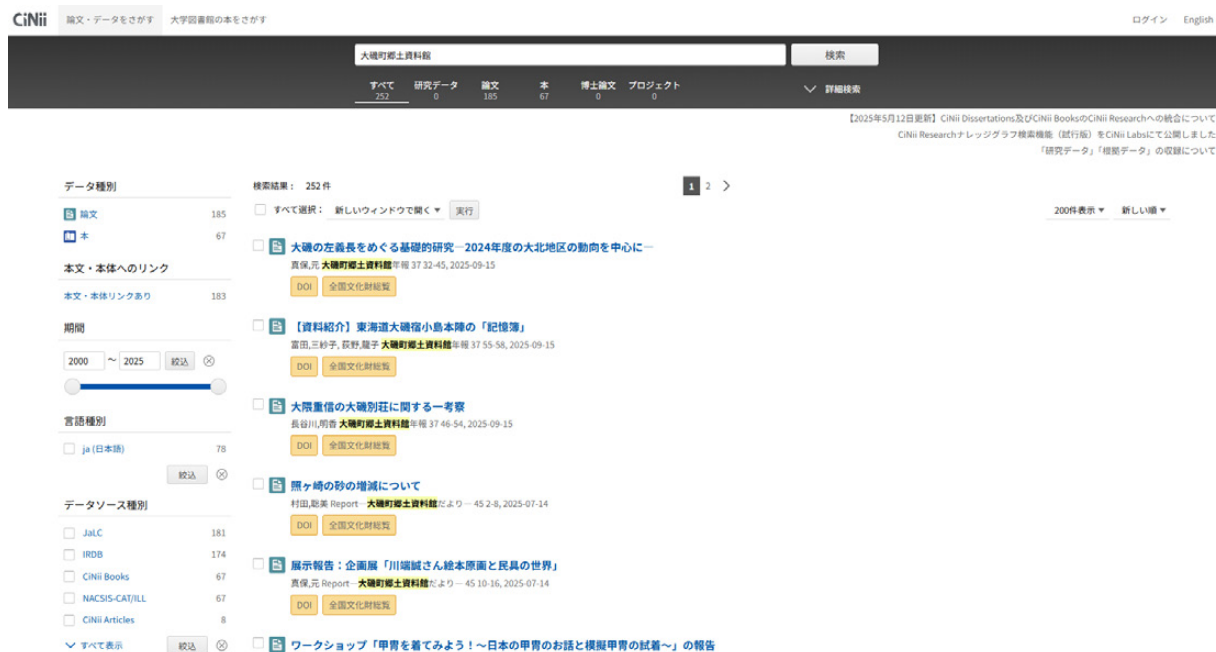


図2 登録作業後のCiniiでの検索結果（2025年10月23日撮影）。

を行った。事務局に迅速にご対応いただいたこともあり、手続きはすぐさま完了し、登録が可能になった。

登録作業自体は2024年10月18日から行った。2024年10月時点で当館での刊行物は年報36本、だより44本、資料室だより16本の合計96本があり、そのすべてを一度に登録することは不可能である。作業自体も筆者が一人で行っていることから、業務の合間を縫って入力していくこととなった。

実際の作業としては、ログインをしたうえで年報等刊行物のPDFデータを登録し、書誌情報を入力フォームに打ち込む。所要時間は、例えば37号（掲載論文数3本）の一連の登録作業を終えるのには約7分の時間を要した。隙間時間での作業となったため、最終的に2024年当時刊行されていた研究報告類をすべて登録したのは10か月後の2025年7月16日であった。なお、登録時に本文用PDFを登録するが、PDFはテキスト化されていることが望ましいとされていたため、テキスト化されていないPDFはAdobe Acrobatを使用してOCR化を行ったうえで登録作業を進めた。

## (2) 所感

それでは、登録作業を進めた結果はいかほどか。図1は登録作業以前のCiniiでの大磯町郷土資料館の検索結果である。73件とあり、研究報告が表

示されず、当館の図録や当館を事例とした他の学会誌等に掲載された報告類がヒットするのみであり、当館のこれまでの研究活動はCinii上では可視化されてこなかったといってもよい。

一方で、2025年10月現在の検索結果である図2を参照されたい。登録作業が終わり、252件もの報告がヒットすることとなった。つまり、当館の約180件の論文類がこれまで灰色文献として不可視であったことがわかる。

全国文化財総覧では記事登録時に論文ごとに任意のキーワードを設定することができ、キーワードでCiniiの検索に表示することができる。そのため、『資料室だより』などの名前に大磯町郷土資料館を含まない刊行物も当館関連の刊行物として捉え、キーワードとして入力した。このほか、民俗学や自然、文献史学など学問分野の設定もできるため、設定することにより、「大磯町郷土資料館民俗学」などと検索することで、当館での各分野での研究の蓄積が件数とともに可視化できるようになった。

今回登録作業を進めた結果、いくつかの副産物を得ることができた。例えば、手元ですぐさま刊行年を確認したい時、スマートフォンやPCなどのデバイスを用いてCiniiで調べれば、どの刊行物に収録されているかを横断的に検索できるようになった。また、当館のホームページがアクセス障

表1 全国文化財総覧登録手続き後のアクセス等統計

年月	ページ表示回数 (1日)	ダウンロード数 (1日)	新規登録件数
2024/10	593(19.1)	0 ※PDF登載は12月から	30
2024/11	952(31.7)	0 ※PDF登載は12月から	1
2024/12	759(24.5)	578(18.6)	11
2025/1	1540(49.7)	944(30.5)	15
2025/2	2021(72.2)	1410(50.4)	12
2025/3	3897(125.7)	541(17.5)	2
2025/4	811(27.0)	899(30.0)	5
2025/5	2332(75.2)	565(18.2)	0
2025/6	2696(89.9)	520(17.3)	1
2025/7	1868(60.3)	1230(39.7)	9
2025/8	3157(101.8)	1301(42.0)	0
2025/9	6907(230.2)	1212(40.4)	1
2025/10	3410(110.0)	1551(50.0)	0
合計件数	30943	10751	87

害などで表示されにくいとしても、全国文化財総覧にアクセスすれば閲覧できるのも、リスク分散として有効である。

### (3) アクセス解析

それでは、どれほどのアクセス数があるか、月ごとのアクセス数等を簡単にみていく。

当館年報にも2024年度分を記載しているが(大磯町郷土資料館編, 2025)、登録を始めた2024年10月以降(文化財総覧登載後)の各月のアクセス数およびダウンロード数は次の表の通りである。

総じて、2025年10月時点で実に30,943件のアクセス、10,751件のダウンロードがあった。アクセス数等と月ごとの新規登録件数は比例しないこともあり、アクセス数等増大の由来がはっきりとしない部分もある。いずれにせよコンスタントに毎月数千件のアクセスがあり、直近数か月では1日あたり40件前後のダウンロード数があることがわかる。

Ciniiなどに表示されることにより、当館の存在を知り、そこからホームページなどを実際に見て、活動を知ってもらうということにつながっているケースも想定できる。紀要等刊行物のオンライン公開は、方法によってはさらなる活用が見込まれるといえよう。

### むすびに

本稿では博物館における紀要等刊行物の流通を照射すべく、インターネットが発達した現在の時流に合わせて当館としての実践例をもとに考察した。

オンラインでの公開は幅広い流通が見込める。そのうえで、Ciniiなどのジャーナル検索エンジンに表示させることは、その流通を加速させることが想定でき、今日の博物館刊行物の還元手段の一つとして有効であろう。しかし、Ciniiは研究者の利用がボリューム層として想定され、一般利用者へのより広い認知についてはさらなる検討が必要である。畢竟、収蔵資料だけではなく、紀要をふくむ刊行物類も博物館の大切な財産である。これら刊行物がより広く普及していくことも、今日における課題の一つではないだろうか。

### 註

- 論文を検索する際、筆者の専攻とする民俗学ではCinii や国立国会図書館サーチ、Google Scholarなど、いくつかの情報ツールを用いている。本稿では卑近な例だが筆者が最も利用するCinii を中心的に取り扱いたい。
- 近隣館でいえば、2025年10月時点で平塚市博物館や小田原市郷土文化館の紀要は雑誌記事索引に採録されており、検索に表示される。
- もっとも、2025年現在こそ学芸員は正規職員で5名、非常勤で1名いるものの、従来は3名前後で推移していた。そのため、まとまった数の研究報告をコンスタントに執筆していくことが困難であったことも一因であるという(2025年11月

に國見徹氏よりご教示）。

4 刊行物として、リーフレットや図録も想定できようが、あくまでも本稿では論文類を整理の対象とした。なお、他館の紀要等刊行物を見る限り、国会図書館の雑誌記事索引に採録されるケースが多いが、当館刊行物は現状雑誌記事索引の採録誌となっていない。採録しない雑誌の基準として、「記事による検索よりも雑誌名による検索が有効である雑誌（毎号ほぼ同じタイトルで記事が掲載される要覧、事業報告、白書、年鑑等）」とある（国立国会図書館HP「雑誌記事索引について」<https://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/index.html>より、2025年11月3日閲覧）。当館の年報も事業報告がメインであったことから、採録されていなかったと考えられる。民俗学が専門の筆者にとって図書館情報学などは専門外であり、あくまでも門外漢の推察になる。この点について、詳しい方にご教示いただければ幸いである。

## 引用文献

- 國見徹2024「博物館の醸成一神奈川県大磯町の事例―」『駒澤大学博物館学講座年報』2023年度：pp.33-36.
- 持田誠2016「博物館と生態学（25）いま市町村の博物館紀要が直面している課題」『日本生態学会誌』66：pp.265-270.
- 持田誠・高田祐一2021「紀要論文等の書誌情報流通における課題と「文化財論文ナビ」の取組」『カレントアウェアネス』350：pp.2-5.
- 大磯町郷土資料館編2025『大磯町郷土資料館年報』37.
- 佐川和裕2005「紀要・目録の刊行」神奈川県博物館協会編『学芸員の仕事』岩田書院：pp.16-19.

# 博物館機能をもつ町立観光施設による 町外県立高校図書館展示の意義と実践

箱根ジオミュージアム 山川 隆良・小笹 直人  
神奈川県立寒川高等学校図書館 鈴木 聖美

## 1. はじめに

箱根町立箱根ジオミュージアムは、箱根火山の噴気地帯である大涌谷に位置する、博物館機能を備えた町立の観光施設である。法令上は博物館法に基づく博物館ではないものの、資料の収集・保管、展示、調査研究、教育普及といった博物館の基本的機能（博物館法第2条）を担っている。また、所管は観光課であり、大涌谷という国際観光地において、観光の満足度向上にも資することを目的としている。

近年、観光立国化と文化政策の中で、博物館は地域に根ざした観光と文化を結び付ける場となることを求められ、展示・教育・研究を観光の来訪体験や地域振興にどう結び付けるかが課題として整理されてきた（佐藤 2020）。さらに、2022年の博物館法改正（2023年施行）では第3条に文化観光が明記され、館の基幹機能を維持しつつ地域活力の向上に資する役割が制度的に求められるようになった（菅根 2023）。本稿は、博物館が観光的役割を強めるだけでなく、観光施設が博物館機能を計画的に充実させる方向から、今後の博物館・観光連携の在り方を考察する。

とりわけ、本稿では町立観光施設が町外の学校と連携する意義に焦点を当て、神奈川県立高校図書館との連携展示の事例を素材として、その意義と実践を検討する。

## 2. 事例紹介

### 2-1. 高校図書館連携展示の経緯と概要

2020年に発生・拡大した新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下「感染症」）により、多くの施設で入館者数と活動機会が減少した。箱根ジオミュージアムにおいても、緊急事態宣言の期間中は社会情勢を踏まえた閉館措置等を講じた。

こうした状況下でも実施可能な教育普及事業として、箱根ジオミュージアムが標本・パネル等を提供し、学校側（学校司書・教員・生徒）と協働

表1 2021年から現在に至るまでの学校図書館展示  
開催校一覧

展示開始年	学校名
2021年	県立湘南高校、県立鎌倉高校、県立厚木清南高校
2022年	県立大磯高校、県立厚木東高校、県立湘南高校、県立鎌倉高校、都立三鷹中等教育学校
2023年	県立厚木商業高校、県立平塚盲学校、県立三浦初声高校、都立三鷹中等教育学校、小田原市立城北中学校
2024年	県立平塚盲学校
2025年	県立寒川高校、県立磯子工業高校

して、県立高校図書館内で関連図書の紹介と合わせて展示する取組みを行った。

展示は箱根火山に関する内容を基本としつつ、各校の地質・地形の紹介と、当該地域と箱根火山の関係性を示す構成とした。内容は各校の教員と協議のうえ、学校ごとに調整し、実施を重ねるなかで教員間のネットワークを通じて広がり、神奈川県内各地の県立高校図書館へ展開した（表1）。

### 2-2. 2025年度の高校図書館連携展示の実施内容

2025年度は、県立高校図書館連携展示を「学科・地域理解を踏まえたテーマ設計」と「生徒参画による制作体制」の二点で強化し、磯子工業高等学校と寒川高等学校で実施した。

磯子工業高等学校では、箱根火山を軸に自然環境がもたらす資源（鉱物・エネルギー）に焦点を当て、同校の4学科（機械・電気・化学・建設）と関連づけた展示を構成した（図1）。寒川高等学校では、寒川町から望む西方の山々および寒川町の地形・地質を解説するパネル展示を実施し、関連する標本・図書も併せて配置した（図2）。とくに箱根火山と寒川町の地形・地質の関連性を強調した。

両校で来場者へアンケートを実施したところ、



図1 高校図書館での展示の様子（磯子工業高校）.

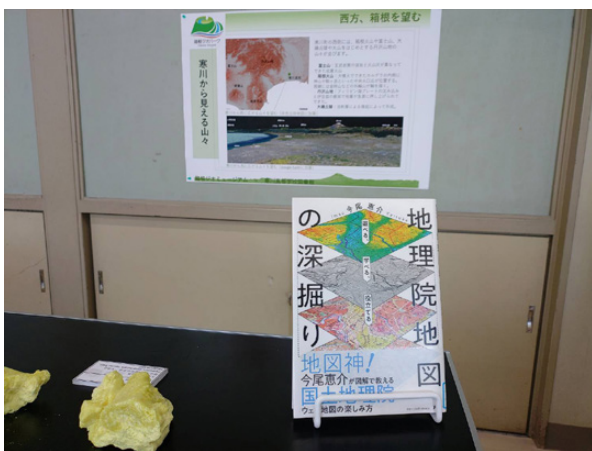


図2 標本、図書、解説パネルを合わせた展示(寒川高校).

箱根の来訪歴については磯子工業高校で8割超、寒川高校で過半数が来訪経験ありとの回答であった。また箱根ジオミュージアムへの来館意向について、展示を通じて高まったと回答した割合は、磯子工業高校で8割超、寒川高校で6割超であった(図3)。さらに展示関連図書への関心については、磯子工業高校で9割超、寒川高校で8割超が「関心がある」旨の回答であった(図4)。観光誘客・教育普及・学校図書館の利活用促進の各面で効果が見込まれる結果となった。

### 2-3. 実施校図書館司書の所見

本節では、連携先校の学校司書から得た所見をもとに、箱根ジオミュージアムの立場から企画意図・実施状況・反応を整理する。

2020年の感染症拡大下、箱根ジオミュージアムから神奈川県立湘南高等学校へ、校内図書館でのジオパーク展示の実施について打診した。登校制限や長時間滞在の自粛が続く状況を踏まえ、図書

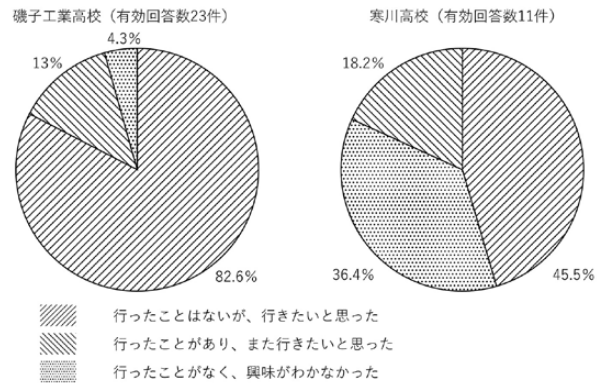


図3 箱根ジオミュージアムへの来館意向のアンケート結果.

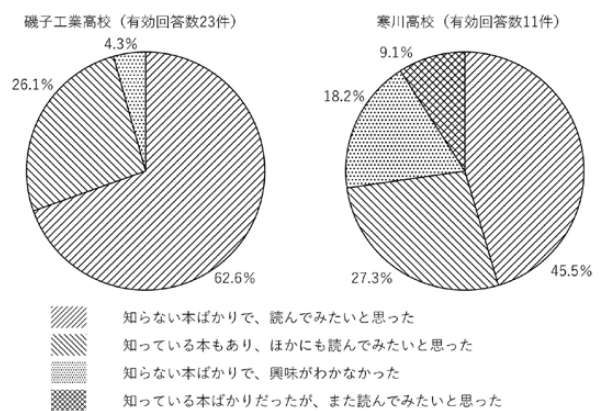


図4 展示図書への関心のアンケート結果.

館で博物館様式の展示を行うことが、校内の閉塞感緩和と学習環境の活性化に資するとの見立てを共有した。

湘南高等学校図書館の吹抜けを備える二層構成の空間に、箱根ジオミュージアムが提供した触察可能な標本および写真パネルを「山」を主題として配置した。結果として、「学校図書館でこの規模の展示が可能とは思わなかった」「面白い」「触ってよいのか」といった肯定的反応が多く得られた。他方で「なぜ図書館で展示を行うのか」という問いも寄せられた。これに対し、図書館における実物資料の提示が知的好奇心を喚起し、併設する関連図書を通じて探究学習へ誘導する教育的意義を、学校司書から説明した。

また、読書習慣の乏しい生徒の来館誘発、いつでも誰でも利用が可能という学校図書館の特性の発揮といった効果も見られたと報告された。さらに、将来の現地見学時の体験が充実するという効果も期待されたとの所見を得た。翌年度には主題

を「海」へ更新し、地域性を反映した構成を試みた。

この実践を端緒として、学校間ネットワークを通じた情報共有を行い、他校への展開を進めた。

波及先の一つである寒川高等学校では、2025年の文化祭に合わせて図書委員会・科学部と協働し、「地形・地質から探るわたしたちのまち」を実施した。大判の地形図・断面図に対応づけて岩石標本を配置し、関連図書、生徒作成のPOP、科学部の実験ポスターを併設した。期間中は学芸員が常駐して解説を行い、硫黄標本の嗅覚体験、軽石の触感への驚き、火打石への興味など、実物資料の提示が理解と関心の深化に寄与することを確認した。展示後は規模を縮小して図書館内で継続掲示し、未観覧者への機会提供と学校ネットワークを通じたさらなる情報共有につなげている。

### 3. 町立観光施設による町外での普及活動の意義の考察

#### 3-1. ML連携を核とした博物館的機能の拡充

ML (Museum-Library) 連携の潮流の中で、博物館と図書館はデジタルアーカイブのみならず、展示・教育普及を通じた横断的な学習支援とアウトリーチにおいて連携がなされてきた(金 2009)。学校教育領域では、学校図書館における博物館との協働が学習指導要領および学校図書館ガイドラインで求められており、地域の博物館等との密接な連携が推奨されている(文部科学省 2017)。研究・実践報告では、学校司書・学芸員・教員の三者協働による学習モデルが蓄積されつつあり、例えば学校司書と学芸員が協働して博物館見学の事前授業を設計した実践報告では、来館時の学習目標の明確化と事後の探究深化に有効であったとされている(井上ほか 2025)。

箱根ジオミュージアムと県立学校図書館の連携展示では、学校図書館において学芸員・学校司書・学生が協働して「実物標本×解説パネル×関連図書」の展示制作を行った。これは、学生に横断的な学習を支援する場を提供したML連携の事例として位置づけることができる。とくに、図書委員会や部活動が制作・解説の一部を担う体制は、こう

した連携が単発のイベントで終わることを避け、学習プログラムとして定着させる効果を持つことが期待される。

このように、本事例は自治体設置の観光施設がML連携の枠組みに参画することで、町外での普及活動を通じて博物館機能を拡充させた取り組みと評価できる。

#### 3-2. 町外展開による観光・教育普及の相乗効果

来場者アンケートでは、図書館展示を契機としてジオミュージアムへの来館意向が高まったことが示され、町外で展開する展示が観光誘客へ波及し得ることを示唆した。同時に、自治体境界に依存しない学習圏の形成が進み、箱根火山への理解や災害に対する防災リテラシーの向上といった教育効果も見込めた。

観光施設としての第一義は観光戦略にあり、本事例もその方針に沿って進められている。他方で、教育普及を成果指標に含めた運用を重ねる中で、前項に述べた博物館機能の強化が進んだ。観光戦略に資する事業を展開する過程で博物館機能を拡充させる本件のような事例の蓄積は、博物館の観光的利活用を具体化する施策を検討する際の手がかりになるといえる。

今後の課題として、学校側の学習評価(事前・事後課題)、図書貸出の変化、来館割合の経年変化等を継続的に収集・分析し、観光・教育普及の両面から効果検証を行うことが挙げられる。

#### 〈参考文献〉

- 井上 由佳・清田 かえで・野崎 彩乃・山崎 陽斗 (2025) 学校図書館と連携した博物館見学の事前授業(湘南学園小学校3年生に向けた実践). Museum study: 明治大学学芸員養成課程紀要, 36, 7-21.
- 金 容愛 (2009) 図書館・文書館・博物館における連携の動向. 文化情報学, 16 (1), 33-43.
- 佐藤 友美 (2020) 「博物館と観光」をめぐる議論と課題—文化芸術立国, 観光立国が目指される中で. 社会教育研究年報, 34, 107-117.
- 菅根 幸裕 (2023) 博物館法改正を考える—「文化観光」を中心に. 全博協研究紀要, 25, 1-13.

令和6年度 第5回研修会

## シンポジウム

### 「博物館と学校連携について ～博物館の使い方～」参加記

神奈川県立歴史博物館 市野 悦子

#### はじめに

2025（令和7）年2月8日（土）、横浜市歴史博物館講堂にて神奈川県博物館協会 シンポジウム「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」が開催された。本シンポジウムは神奈川県博物館協会の研修会として開催されたが、一般の方・学校関係者にも博物館の取り組みや学校との関わりについて知っていただく機会とし、事前申込不要のフリープログラムとして実施された。参加者80名強の内、加盟館園関係者の他、学校関係者などの一般参加者が4割弱参加した。博物館法の改正や学習指導要領の改訂により一層の博学連携が求められる昨今、参加者の興味を引いた内容だったと思われる。

はじめに会場となった横浜市歴史博物館副館長の刈田均氏からの開会挨拶、今回のシンポジウムの司会進行を務めたかわさき宙と緑の科学館の高中健一郎氏からの趣旨説明があった後、刈田均氏、土屋健作氏（小田原市郷土文化館）、秋山幸也氏（相模原市立博物館）、内船俊樹氏（横須賀市自然・人文博物館）より、4例の博学連携の事例紹介を行った。その後、風間洋氏（鎌倉学園中学・高等学校）、山田恵里氏（小田原市立早川小学校）による学校側からのコメントを挟み、上記6名によるディスカッションが行われた。以下に概要を記す。

#### 事例紹介①

##### 様々な学校連携活動 横浜市歴史博物館の事例から（横浜市歴史博物館 副館長 刈田 均）

横浜市歴史博物館は平成7（1995）年に開館した。その設立の構想段階から「教育現場によるくり返しの見学」を趣旨に盛り込んでおり、特に小学生の見学が非常に多いことが特徴である。その事情として、横浜市の市立学校数が小学校334校・中学校143校と膨大であることが一因としてあげられると説明された。この学校数に対し、いかに均

一に対応していくかということが懸念となっているものの、現在まで様々な連携を行っている。連携の事例としては、子どもが博物館に来館するパターンの具体例、館外での活動、オンライン、教員向けがそれぞれ紹介された。特に小学校6・4・3年生は、それぞれ通史を学ぶ学年・地元の歴史（吉田新田）を学ぶ学年・昔の暮らしを学ぶ学年（近隣の都筑民家園と併せた見学）であり、学習指導要領と合致した展示内容であることから団体見学受け入れが多い。そういった対応の担い手は学芸員だけでなく、エデュケーター（再任用校長）、展示解説・活動支援ボランティア、地域団体など多岐にわたっている。特に学芸員以外の担い手が今後の対応に必要な不可欠な存在になるであろうこと、その可能性への指摘があった。職位による学校対応の住み分けの必要性を感じる内容であった。

#### 事例紹介②

##### 学校収蔵資料を用いた企画展の開催と今後の展望（小田原市郷土文化館 学芸員 土屋 健作）

小田原市郷土文化館で令和6年度中に行った学校関連事業は、企画展「学校に眠るお宝展」を中心に、関連講演会、ワークショップ、フィールドワークなどで構成された。企画展「学校に眠るお宝展」は、①学校に保管されている資料に博物館レベルのものがあること、②先生たちに学校に資料があるということを認識してもらうこと、を目的に企画された展覧会である。小田原市内の小中学校全25校へ架電することからスタートし、内11校から資料を発見。借用から展示、返却までを学校で行った珍しい展覧会であったことが紹介された。学校から発見された資料は主に石器や土器で、小さい資料が多く、文化館の所蔵資料による追加展示を行うことで、その価値を補足した。高校生による展示ブース作成など、より小中学生に親しみやすい展示になるよう考えられた内容だった。

講演会やフィールドワークは展覧会を補完するものを実施した。この展覧会を通じ、学校の先生と担当学芸員の個人的なつながりや、何かあった際に博物館へ相談するという流れが構築できたことを一番の成果としつつ、対応人員の問題や学校資料の破棄に関する相談など、今後の課題にも言及された。奈良県立民俗博物館の資料廃棄に関するニュースも記憶に新しい中、博物館の役割と地域での活動について、改めて考える機会となった。

### 事例紹介③

#### 高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう！ (相模原市立博物館 学芸員 秋山 幸也)

国内のみならず世界各地の博物館共通の悩みとして、中高生が博物館へ来ないというものがある。その中で相模原市立博物館では、高校生を博物館へと呼び込む取り組みとして、部活動との連携事例を発表した。相模原市立博物館は自然・歴史・天文分野の総合博物館である。今回の事例は中でも自然系分野と2つの高校の理科・生物系部活との連携、特に「さがみホネホネ団」による剥製標本作成を軸とした内容が紹介された。10年程前から博物館のボランティアグループが標本作成を行っていたところ、口コミにより高校生が参加することが増えていき、以前から連携を行っていた光明学園相模原高校の協力により、昨年より「さがみホネホネ団」の活動がスタート。標本作成の他、特定外来生物クリハラリスの調査にもつながる活動となった。標本や調査結果は展示などの発表の場も設けられた。文科系部活動は発表の場が少ないことから、博物館がその場を提供することや、他校との交流の場として活用されるこういった活動の意義を指摘された。自然系関連の事例紹介であったが、文科系部活動という点においては人文系博物館にも好例と言えるのではないだろうか。

### 事例紹介④

#### 市教委等既存事業を組み入れた新しい博物館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状 (横須賀市自然・人文博物館 学芸員 内船 俊樹)

横須賀市自然・人文博物館からは、既存の自主事業・外部事業を統合・再編成した「みんなの理科フェスティバル」について紹介があった。今年1月に第8回「理科フェス」が開催されるまで、より連携を深化するために学校側と調整を重ねたこ

ととして、①開催時期の調整（学校側の都合の他、他事業と開催時期を合わせる事で双方の集客効果を高める）、②小学生作品の表彰式・発表会の誘致（①で会場使用料を削減し、その分を別会場で行っていた表彰式を実施）、③県立高校生の発表の場の拡大（回を追うごとにブース出展や司会、ワークショップの担当等をプラスで実施）が挙げられた。過去回の参加者が回数を重ねることで出展者側になるなどの影響も見られ、授業の協力とはまた別の学校連携効果があることが述べられた。今後の展望として、自然科学以外の理科分野へのアプローチについて触れ、その後の質疑応答中では、歴史系等分野の異なる博物館同士の連携の可能性も示された。開催回数を重ねることで連携の方法の裾野が広がることも考えられ、より学校連携の形が多様化している現状を伺い知る内容であった。

### 教員からのコメント・ディスカッション

4つの事例紹介の後、教員2名からのコメントが述べられた。風間氏からは現状の団体見学（イベント的な博物館への学校来訪）をいかに継続的で意義あるものにしていくか、新しい教育指導要領の内容を地域博物館と連携し実施できるか、という部分に着目したコメントの他、鎌倉学園での学校連携事例の説明があった。山田氏は事例紹介②に参加したことで、博物館が見に行く場所ではなく相談できる場、という認識に変化したことに触れた。また、教員側は1度きっかけがあると継続して博物館を利用する可能性があるとし、教員による口コミの重要性を強調した。

ディスカッションでは博物館がもっと当たり前を訪れてよい場所だと学校側に知られていくことの重要性、子どもによる遠足型・放課後型の来訪のどちらの役目も果たせること、子どもが大学生くらいになって戻ってくる環境を作る中長期的視野の必要性など、博物館と子どもの関係性についての意見が多く見られた。学校側の事情として語られた、指導要領の改訂は博物館の役割に変化の起きるチャンスであるということも見逃せない内容である。司会からは、運営上の事情としてある程度決まったパッケージで学校に対応すること、個別アレンジをどの程度実施しているかとの問いかけがあり、各館・学校共に個別のすり合わせが大事ということと、気軽に問い合わせできる

環境があることの大切さについて意見が述べられた。ディスカッションの最後に、神奈川県博物館協会会長の望月一樹氏から、学校連携は地域との連携の重要項目と成り得ること、こういった博学連携関連報告事業の継続開催していくことの重要性について挨拶がありシンポジウムの閉会となった。本シンポジウムを通し、様々な事例を知ることができたことが、学校・博物館共に一番の収穫

となったのではないだろうか。また、学校という組織への対応という事例ではあったものの、キーマンとなる先生個人の力によるものも大きいことを改めて認識することとなった。博学共に相互の情報発信・受信を今後も続けていく必要性を感じる研修会だった。



図1 シンポジウムの様子。

## 「神奈川県立生命の星・地球博物館における インクルーシブな企画展の取り組みと特別展示室の照明更新に ついて」に参加して

相模川ふれあい科学館 亀ヶ谷 千尋

### はじめに

令和7年5月21日に神奈川県立生命の星・地球博物館講義室において、令和7年度第1回研修会「神奈川県立生命の星・地球博物館におけるインクルーシブな企画展の取り組みと特別展示室の照明更新について」が開催された。現在、多くの博物館が施設・設備の老朽化や収蔵庫の狭隘化などの課題を抱えており、さらには教育、福祉、まちづくりなど地域に貢献する新たな価値創造が求められている。本研修会では、神奈川県立生命の星・地球博物館で実施されたインクルーシブな来館者を意識した実験展示と特別展示室の照明のLED化について、その概要をご紹介いただいた。講演者として神奈川県立生命の星・地球博物館の石浜佐栄子主任学芸員と田口公則主任学芸員が登壇された。以下、研修会の参加記として感じたことを交えながら報告する。

### 講演「企画展『すな』におけるインクルーシブな視点を取り入れた展示」

最初の講演では、令和7年5月11日まで神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、県博）で開催されていた企画展「すな 一ふしぎをみつけよう」におけるインクルーシブな来館者を意識した実験展示について、担当学芸員である石浜氏よりレクチャーがあった。本企画展は、砂の多様性、砂がもつ様々な化学的な性質、砂からわかる周辺の大地的特徴、博物館で砂を集める意味などについて紹介した展示である。

近年、日本の博物館においても「インクルーシブ（社会的包摂）」の概念が広く認識されるようになってきている。また、様々な特性や背景をもった多様な方々が博物館にも来館されるようになってきており、県博においても未就学児連れの家族の来館が増えているようだ。本企画展では、手で感じる展示や足裏で感じる展示、音や振動で感じ



図1 砂のさわりの展示。

る展示など、ハンズオン展示を取り入れることで、誰もが楽しみながら科学的な気付きを得られる展示を目指したとのことであった（図1）。

講演では、企画展の準備段階で実際に支援学校（肢体不自由）、盲学校（視覚障がい）、放課後等デイサービス（知的障がい）、保育園（幼児）などを訪れ、砂を使って遊んでもらったり、ハンズオン展示の原型を試してもらったりした過程を解説いただいた。私が所属する水族館においても、ハンズオン展示は未就学児を中心とする低年齢層に人気で、企画展示においてなるべく取り入れるようにしているが、展示を作成する過程で実際に幼児に操作してもらってその反応を見ることはしなかった。事前に様々な人に試してもらうことで、展示の意図が正しく伝わっているかを確認することができ、さらに私たちとは違った視点からの意見を聞くこともできるため、とても有意義なもので、ハンズオン展示を行う場合はこういった検証を実施していくべきだと感じた。

レクチャーに続いて、展示室の見学が行われた。まず、目についたのが各エリアのタイトルで、平仮名と英語で大きく表示され、見やすさと分かりやすさを意識しているように感じられた。各エリ



図2 砂の音あての展示。

アにハンズオン展示が散りばめられ、中央には来館者自身がコマとなって遊ぶ「砂すごろく」と、「すなバー」と題した実験展示が設置されていた。ハンズオン展示には、砂の表面を直接手で触るものや、お手玉やゴム手袋を介して塊としての砂を触るもの、動かして音を聞くものなど単純に五感に訴えるものから、液状化現象やブラジルナッツ効果、安息角の再現実験など少し複雑なものまで多岐にわたり、その種類の多さに驚かされた（図2, 3）。

単純なものから複雑なものまで様々な種類の展示があることで、幼児から大人、さらには様々な特性や背景をもった方々まで幅広く楽しむことができ、確かに「インクルーシブ」を感じられる展示であった。一方で、触ったり操作したりするハンズオン展示につきものなのが、維持管理の苦勞である。実際に本企画展のハンズオン展示でも、破損や砂が床などにこぼれることは多々あったそうなので、維持管理の苦勞がうかがえた。

砂の特性をよくわかっているからこそその多種多様なハンズオン展示は、県博ならではの展示で、違うテーマでのインクルーシブな視点を取り入れた展示も是非見てみたいと期待させる展示であった。

### 講演「特別展示室のスポットライトおよび展示ケース内照明のLED化について」

次の講演では、県博の特別展示室のスポットライトと展示ケース内照明のLED化について、担当学芸員である田口氏よりレクチャーがあった。現在、照明としてまだまだ広く使用されている蛍光灯は、2027年末までに製造と輸出入が終了する。



図3 色々な種類の砂をさわる展示。

そこで、県博では照明の使用数が多数であることから、展示コーナー単位で少しずつLED照明への切り替えを実施してきた。講演では、特別展示室では天井の照明ダクトに設置してあるスポットライト（ハロゲン球）と展示ハイケース・ローケース内の蛍光灯をLED照明へと切り替えを行い、その過程での調整や工夫について解説いただいた。

特別展示室天井のスポットライトは無線駆動のスポットライトを導入しており、実際に現場でiPadを使って照度や向きを変える様子を見学した。ハロゲン球を使用していたときは手動であったため、高所作業によって向きを変えていたため、初期費用はかかるがこれらの作業を軽減することができることは大きなメリットであると感じた。展示ケースの照明のLED化においては、LEDの特徴として蛍光灯ほど光が広範囲に拡散しないため局所的になりやすく、単純に交換するだけでは終わらず、細かい調整が必要で、設置する位置や向きを変えるなどの工夫を行っていた。

照明は、展示しているものをどう見せるかに大きくかかわってくるため、博物館においてとても重要な役割を担っている。LEDは初期費用が高く資金面での困難も多々あると思うが、2027年までもう間がなく、LED化は避けては通れない課題である。

### おわりに

設備の老朽化や新しい価値の創造は、多くの博物館・動物園・水族館においても課題となっている。資金面や人員など課題はどこの館にもあると思うが、今回の研修の内容は参考になることも多

く、他施設との交流や意見交換の大切さを改めて感じた。

最後に本研修会でお話をいただいた石浜佐栄子氏と田口公則氏をはじめ、ご対応いただいた神奈

川県立生命の星・地球博物館の皆さま、また、本研修を企画・運営して下さった協会幹事および事務局の皆さまに感謝申し上げます。

令和7年度 第2回研修会

## 「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」 参加記

川崎市岡本太郎美術館 加藤 志帆

### ◆はじめに

令和7（2025）年8月1日（金）、令和7年度東海地区博物館連絡協議会研修会兼神奈川県博物館協会第2回研修会（3部会合同）「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」が横浜美術館にて開催された。

研修会は、第1部にて横浜美術館蔵屋美香館長から大規模改修に至る経緯と内容、リニューアルオープンに向けた取り組みに関する講話があり、第2部では、展覧会「横浜美術館リニューアルオープン記念展 佐藤雅彦展 新しい×（作り方+分かり方）」（会期：2025年6月28日（土）～11月3日（月・祝））の鑑賞とともに各展示室及びグランドギャラリーを含めた無料スペース等、館内を見学する時間が設けられた（図1）。

本稿では、研修会を通じて得られた知見を整理し、報告する。

### ◆横浜美術館 大規模改修の概要

横浜美術館は、1989年、横浜港に面した造船所跡に再開発された「みなとみらい21地区」に開館した。美術館前には車が立ち入らない大きな広場（公園）が設けられ周辺には多くの商業施設も併設されていることから、連日多くの人々で賑わうエリアである。館内には展覧会を実施する展示室、子どもも大人も気軽に創作活動ができるアトリエ、さらに美術図書室の機能を備え、「みる」「つくる」「まなぶ」の基本理念を柱に、開館以来、地域に開かれた美術館として多くの市民に親しまれてきた。

竣工から30年以上が経過した同館では施設や設備の老朽化が進んだことから、施設の長寿命化を図るとともに利用者ニーズの多様化、とくに横浜市が掲げる子どもや子育て世代に喜ばれる街づくりに対応するためリニューアル（改修）事業が計画された。



図1 大規模改修に至る経緯と内容、リニューアルオープンに向けた取り組みについて話す  
横浜美術館 蔵屋館長。

美術館は大規模改修工事のため、2021年10月から2023年11月まで施設を休館、その後、施設機能や事業を部分的に再開させ、2025年2月より全館通常営業再開に至った。

#### ◆改修工事の具体的内容

横浜美術館の改修工事の具体的な内容は次のとおりである。

##### 1 長寿命化対策工事

施設の長寿命化を目的とした工事では、電気・衛生・空調機器の刷新、外壁等の経年劣化改修、エレベーター、エスカレーターの更新が行われた。空調機器をはじめとした館内のインフラ環境の整備は、適切な収蔵品保護及び展示環境の観点から、開館から年数を経た博物館、美術館の多くが抱える課題である。新たな設備の導入により、エネルギー効率の上昇や維持管理の合理化が図られ、美術館運営の持続可能性が高まったと言える。

##### 2 バリアフリー工事

多目的トイレ(誰でもトイレ)の増設及びエレベーターの増設が実施され、ユニバーサルデザインの理念に基づく施設整備が進められた。高齢者や障がい者、乳幼児連れの来館者など、多様な背景をもつ利用者が安心して訪れることができる環境の整備は、美術館の公共性を高める重要な要素であると考えられる。

##### 3 機能向上工事

収蔵庫の増設により収蔵品の保管能力が強化された。収蔵庫の増設にあたり、これまで3階にあった美術図書室が地上階(2階)に再配置されることになったが、スペースの有効活用が図られたことにより、既存の施設内での収蔵庫増設が可能となった。美術図書室について特筆すべきは、公園側から直接入室可能な設計へ変更がなされた点である。来館者が気軽に立ち寄ることのできる導線の確保は、開かれた美術館の姿勢を象徴するものだと感じた。今回の研修では収蔵庫の見学は出来なかったが、後学のためにいつか拝見する機会があればと思う。

#### ◆館全体のデザインプロジェクトについて

蔵屋館長の講話で特に印象的であったのが館内のデザインプロジェクトに関する内容である。

先述の改修工事計画が進む一方で、再開後に来館者に対して必要な設備や機能の整備計画が進ん

でいなかったという。そこで、改修工事と並行し、サインボード、家具、什器等の設置計画や、再開後、利用者に館内でどのように過ごしてもらうかを検討する、館を挙げてのデザインプロジェクトを立ち上げたという。

プロジェクトには、空間建築設計に乾久美子氏、サインおよびグラフィックに菊地敦己氏、ミュージアムメッセージの考案にコピーライターの国井美果氏が招へいされ、市民や職員向けのワークショップが開催されるなど、有機的な事業が展開された。

プロジェクトで大きく刷新されたのが広大なエントランスホール「グランドギャラリー」や美術館前広場をはじめとしたフリーゾーンの活用である。

横浜美術館は日本のモダニズム建築の巨匠と称される建築家・丹下健三(1913-2005)が設計した。左右対称に長く伸びるファサードや丸や四角などのモチーフを配したデザインが特徴的な建物で、なかでも広々としたグランドギャラリーは、ガラス張りの天井から自然光が採り込まれた開放的な雰囲気が漂う、同館を象徴する空間である。設計当初、丹下は、市民の交流や文化活動の拠点となる美術館を目指しており、展示室間に設けられたスペースやグランドギャラリーは人々が自由に過ごすための空間を想定していたという。

この度のデザインプロジェクトでは、丹下の理念を尊重しながら、既存施設での多目的な利用が可能となるよう空間設計の見直しが図られた。元々、グランドギャラリーや美術館前の広場は無料で利用できることから、展覧会鑑賞者のみならず、誰もが思い思いに過ごせる、「じゆうエリア」として整備することを目指したという。

改修前、これらのフリーゾーンには椅子やテーブルを設置することは想定されていなかったが、デザインプロジェクトを経て、フリーゾーンに自由に利用できる椅子やテーブルが設置された。

また、大階段の脇には、靴を脱いで本を読みながらのびのびと過ごすことのできる、子ども向けの図書コーナーが設けられた。

館内に配置されたサインボードや家具、什器は、子どもや子育て世代に親しみやすいよう、ピンク色を基調とし、丸みのある形状のものが選定されたという。リニューアル後は、フリーゾーンで飲み物を持ち込んで勉強や仕事をする人、休憩場所として使う人も増え、有効的な活用に繋がってい



図2 施設見学：グランドギャラリーの様子。



図3 施設見学：グランドギャラリーには誰もが気軽に過ごすことのできる空間が設けられている。

るようだ。

以上のように、横浜美術館では改修と並行し館内のサインボードや家具等も刷新し、空間デザイナーと協働による統一感あるデザインが実現された。単なる設備更新ではなく、空間そのものの質を高める取り組みは、美術館の体験価値を向上させるものであり、来館者の滞在時間の増加や満足度にも寄与すると考えられる。また、建築家の想いを継承しつつ、現代的な課題に応える姿勢は、美術館のアイデンティティを守りながら変化を遂げる好例であると感じた。

#### ◆リニューアルオープン事業について

横浜美術館では、2023年11月に新しい公式サイトをオープンさせ、2024年1月には、リニューアル記念特別ロゴとともに「みなとが、ひらく」という新しいミュージアムメッセージやステイトメントを発表した。その後、2024年3月から施設の機能を段階的に再開させ、2025年1月に館内のすべてのサインボードや家具等の設置が完了、2025年2月の横浜美術館リニューアルオープン記念展「おかえり、ヨコハマ」（会期：2025年2月8日（土）～6月2日（月））をもって全館始動に至った。

ホームページの刷新や新しいロゴ、メッセージは、美術館の新たなスタートを象徴する重要な表現手段であると感じる。また、来館者に対して美術館が生まれ変わることを視覚的に届けることができ、期待感や共感を高める効果があるといえる。

蔵屋館長自ら企画された「おかえり、ヨコハマ」展は、横浜美術館の所蔵品へのアプローチはもち

ろんのこと、市内の博物館・美術館、関連施設との連携により地域の歴史や文化資源の活用を試みたという。土地の記憶を掘り起こす展示構成はまさに「みなとが、ひらく」というメッセージを掲げた新しい横浜美術館の幕開けにふさわしい内容だと感じた。

展示では、幅広い鑑賞者に対応するため、難しい語句をやさしい表現にするなどの見直しを図ったという。また、作品を通常より15cmほど低くして展示し、子ども向けの解説、掲示物を充実させた「子どもの目でみるコーナー」が設けられた。筆者も同展覧会を鑑賞したが、子どもの目線に合わせて展示されたルネ・マグリットの《王様の美術館》（1966年、油彩・カンヴァス、横浜美術館蔵）が、より身近に感じられ、親しみをもって鑑賞できたことを覚えている。

グランドギャラリーの大階段では、車椅子ユーザーや足の不自由な方が利用しやすいように、車椅子ユーザーの作家と協働で特別なスロープを設置し作品を鑑賞する試みが展開された。大階段などへの車椅子やベビーカーのアクセスについては、様々な課題が残されていると蔵屋館長は述べており、利用者やアーティストと協働でワークショップを実施しながら、さらに効果的な活用を検討しているという。

#### ◆施設見学

「横浜美術館リニューアルオープン記念展 佐藤雅彦展 新しい×（作り方+分かり方）」を鑑賞しながら、グランドギャラリーや、更新されたエ

レベーターやエスカレーターなどの館内設備を見学した（図2, 3）。展覧会は体験型の展示が多く、また、夏休みの時期とあってか、子ども連れの来場者で大変な盛況ぶりであった。

展覧会鑑賞に加え、蔵屋館長の講話で紹介された無料スペースの活用状況を見学することができた。椅子やテーブルが設置された「じゆうエリア」では、来館者が思い思いの時間を過ごしており、美術館が「居場所」として機能している様子が印象的であった。また、展覧会を目的としない来館者の利用も確認できた。様々な目的で利用するすべての人に配慮した、やさしい空間設計が推進されている点は、今後の企画運営の参考となった。

◆おわりに

本研修会への参加を通じて、横浜美術館のリニューアル事業が単なる施設整備にとどまらず、

美術館の理念や地域との関係性を再構築する包括的な取り組みであることを実感した。

筆者が所属する川崎市岡本太郎美術館においても2026年3月末より大規模改修事業を控えており、今後の施設整備の参考となる点が多かった。施設の性質や予算規模に応じて、改修やリニューアルの内容は異なると思うが、横浜美術館の事例を参考にしながら来館者にとってより開かれた、居心地の良い空間づくりを目指していきたい。

最後に、貴重な学びの機会を提供してくださった横浜美術館の蔵屋館長はじめ、同館の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。大規模改修事業を控え、本研修には岡本太郎美術館の学芸員の他、施設管理担当職員等も参加させていただいた。研修会を企画、運営された神奈川県博物館協会の事務局、幹事の皆様にも謝意を表したい。

## 『博物館の連携事業～巡回展、共通テーマによる展示、館外連携の事例紹介～』に参加して

小田原城天守閣 町田 勇樹

### はじめに

令和7年10月30日、平塚市博物館において神奈川県博物館協会第3回研修会が開催された。本研修会は、巡回展をはじめとする、館外の様々な主体との連携事業が博物館にもたらすメリットや意義について、直近の事例を検討することによって、今後の連携事業実施への糧とすることを趣旨としたものである。今回のテーマの背景には、令和4年の博物館法改正によって、博物館が他の博物館や地方公共団体・学校といった地域の多様な主体と連携・協力することが努力義務として追加されたことがある。博物館には今後より一層の館外連携の有効活用が求められるなか、連携事業実施のためのより効果的な方法・手順などを探るべく、参加させていただいた（図1）。



図1 研修会の様子。

### 事例紹介1

**巡回展が始まるまで 特別展『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから」の計画から実施**

はじめに神奈川県立生命の星・地球博物館の大西 亘氏によって、巡回展「神奈川県植物誌2018」が開催されるに至った経緯やその意義についての報告がなされた。

この展示は、県下複数の博物館が協力して実施した「神奈川県植物誌2018」調査とその成果を

テーマとして、調査に関係する博物館、関連施設において2018～2020年度に開催されたものである。「神奈川県植物誌」調査とは1979年に始まった市民参加型の調査活動で、県内の複数の博物館が協力・連携し、調査で得られた植物標本を分担収蔵するものである。

全国的にみても県域規模の植物調査において、全県的な調査を三回完遂し、その都度植物誌として刊行した例は他にないとのことであり、大西氏は県下の博物館群の存在と、世代を超えた連携の継続が実現の背景にあると指摘する。大西氏は、この植物誌調査における三代目世代の学芸員であるとのことだが、連綿と受け継がれてきた研究成果を引き継いで、展覧会というかたちに昇華させることができたのは、学芸員個々の努力だけでなく、長年本事業を継続することによって紡いできたそれぞれの関係性があったこそだと感じた。

また大西氏は、長期にわたってプロジェクトが続いたのは、植物誌をめぐる活動が、資料に基づく博物館の基本的活動と整合的であるからだとも指摘する。植物誌調査における諸活動を博物館の役割に落とし込むことは、連携事業の意義を考える上で非常に重要なポイントだと感じた。

この巡回展は、展示の中心となるストーリーは共通であるものの、そこにその地域独自の展示を加えることによってオリジナリティを出しているとのことである。特に、相模原市立博物館において、当時熊本で発生していた水害による植物標本のレスキュー作業の展示をおこなったという事例には興味があった。

### 事例紹介2

**巡回展 企画展『神奈川県植物誌2018』と三浦半島の植物たち」の開催**

次に、横須賀市自然・人文博物館の山本 薫氏によって、『神奈川県植物誌2018』巡回展における

具体的事例として、同館における展示が紹介された。

はじめに巡回展開催までの流れを追いつつ、巡回展開催によるメリットのまとめがなされた。すなわち、展示の基礎となる調査研究から連携をおこなうことによって、展示内容の十分な理解につながるという点。完成されたパネルを借用したり、事前に適切な情報共有をおこなったりすることで、展示準備期間・労力・コストの削減につながるという点。スケジュールが短縮されることによって、展示の独自性付加・関連企画の充実などが図れる点。巡回展の一部を深掘して新たな展示を着想できる点が挙げられた。

特に展覧会の独自性については力を入れられていたようで、植物誌巡回展における横須賀市自然・人文博物館の取り組みが紹介された。総じて横須賀という地域に即した展示の工夫がなされており、単なる巡回展にとどまらない、横須賀という地域で展覧会を実施することの意味をよく表現できていると感じた。特に神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵の「杉田のスギ」は印象的で、杉田という地名になじみの深い横須賀地域の人々にインパクトを与え、展示を鑑賞しやすくするという工夫は非常に面白いアイデアだと感じた。山本氏が指摘するように、コスト・労力が削減できるというのは大きなポイントで、日々様々な作業に追われるなかで、展示そのものや関連企画の充実を図る時間が生まれるのは、巡回展を実施することの大きなメリットであると感じた。

### 事例紹介3

#### 「神奈川震災100年プロジェクト」の計画から実施まで —横浜開港資料館における連携事業を踏まえながら—

休憩をはさんで、横浜都市発展記念館の吉田律人氏によって、「神奈川震災100年プロジェクト」実施に至るまでの経緯と背景について報告がなされた。

阪神淡路大震災と東日本大震災によって社会の災害に対する関心が高まる中、博物館においても、「災害」という人文科学・自然科学の分野を超えたテーマに連携して取り組む試みがなされてきた。吉田氏は、「神奈川震災100年プロジェクト」の実施には、こうした社会背景と時間をかけて多分野の研究者や学芸員が連携してきた蓄積があるからこそできるものだと指摘する。連携事業は、運用

面・学術面で大きな成果をあげることができるというメリットが注目されがちだが、運営組織の性格や文化の違いに起因する調整の難しさが課題としてあり、90年代から長期的に「関東大震災」という共通のテーマに対して連携方法を模索し続けていたからこそ、震災100年という節目に成果を上げることができたのだろう。

また本プロジェクトのように、連携事業の度に新たな課題をみつけ、改善してよりよい展示を作り上げていくことができるのは、長期間にわたって同テーマに対する連携事業を継続していくことの大きなメリットであると感じた。

### 事例紹介4

#### 関東大震災に関わる展示 「神奈川震災100年プロジェクトにかかる連携展示企画と今後の展望」について

続いて平塚市博物館の野崎 篤氏によって、「神奈川震災100年プロジェクト」を踏まえた今後の連携事業実施のための展望について報告がなされた。

はじめに、連携展示をおこなうことのメリットがまとめられ、対象が同じでも分野ごとに異なった切り口で展示ができること、他館の資料状況を把握することによって新たな調査研究ができることなどが挙げられた。連携事業は、それまでの継続した取り組みや関係性によって成り立つものであるが、連携事業をおこなうこと自体が新たな知見・関係性を生み出し、次の研究・連携事業につなげることができるというのは、連携事業実施の大きな意義だといえる。また、野崎氏は、連携事業において県博協が予算等の取りまとめをすることによって、より効率的な事業運営が可能になると指摘する。県博協が博物館同士をつなぐ媒介としての役割を果たすことは、今後の連携事業促進の大きなメリットとなるだろう。

### 事例紹介5

#### 地域の主体との連携 「時を超えた多様な主体との連携—春期特別展『近代ひらつかの女性たち』から」

最後に平塚市博物館の早田旅人氏によって、同館で開催された市民団体との連携展示についての報告がなされた。

本展覧会は、早田氏が近代史・女性史を専門としていないことから、地域の女性史を専門とする

市民団体に協力を仰ぎ、共同で開催したものとのことである。博物館にとっては、学芸員がカバーしきれない専門分野の展示を実現でき、資料の寄贈を受けることもできる利点がある。また市民団体にとっては研究成果発表の場を得られるとともに、博物館を媒介としてさらなる研究活動ができるといったように、双方にとって大きなメリットのある連携事業であったことが報告された。私自身学芸員となって日が浅い中で、自身の専門分野以外の資料を扱わなければならない難しさを肌身に感じていたところであり、本報告は、学芸員が特定の分野に捉われない多様な展示企画を実現するうえで大いに参考になると感じた。

#### おわりに

本研修会における報告者は、いずれも長期にわたる研究成果の蓄積、および団体・個人同士のつながりが連携事業の実現にあたって重要なポイントであると指摘しており、博物館における連携事業とは、時間をかけた普段からの積み重ねと、それを上手に活用する学芸員の能力があって初めて実現することができるものだと感じた。研究活動も同じであるが、内に籠って資料に向き合うばかりでなく、様々な分野の人・物に触れあって多角的な視点を持つことの重要性に改めて気づかされた研修会であった。

## 相模原市立博物館のリニューアルしたプラネタリウムの見学と解説に参加して

観音崎自然博物館 柴野 達彦

### はじめに

2025年12月5日に相模原市立博物館において、令和7年度第4回研修会が開催された。相模原市立博物館は今年で30周年を迎えた総合博物館であり、7月にプラネタリウムがリニューアルオープンしている(図1)。研修会の内容は、プラネタリウムの大規模更新を担当された学芸員の田子智大氏による概要および経緯についての事例紹介と、実際のプラネタリウム投影「星空テラス」の見学であった。また、館内の自由見学時に、開催中の特別企画展であるポケモン天文台についても見学できるように配慮していただいた。

施設や展示の更新は、規模の大小あれども日々直面する課題の一つであり、大規模更新も運営が長期化すれば必要となることである。プラネタリウムについてのみならず、事業にあたっての調整や段取り、考え方、工夫について、説明していただき興味深い内容であった。見学の感想も交えながら参加記として当日の内容を報告させていただく。



図1 リニューアルしたプラネタリウム。

### プラネタリウム更新の概要について

今回のプラネタリウム更新では運営・投影に関するほぼ全ての部分を更新されたということであり、ドームの改修から最新の投影機をはじめとする各設備について、それぞれご紹介いただいた。

プラネタリウムの投影に関係する設備の更新はもちろんのこと、イベントや講演会といった利用も想定された設備が整備されており、開会挨拶ではステージで話す姿が背後のスクリーンに大きく投影されていた(図2)。スクリーンの映像やドーム内の様子は館内やオンライン上にも映すことができるという。プラネタリウムの上映という専門的な役割に加えて、多様な目的に活用可能な利用価値の高いものとなっていた。

さらに、広くゆったりとした座席や、手元の資料を見やすくするための照明が設置されたことで、利用者の快適性も向上されている。その中でも、ドーム後方の部分を、多目的ルームとして別室の観覧スペースに改修したことは、ユニバーサルな取り組みとして期待を感じた。現在は、上映中に子供が泣いてしまったなど、何か事情があってドーム内の見学が続けられない場合のみ利用を提案しているものの、泣いた乳幼児を抱えて見学を続けるということは難しく、多くの場合には退出を希望されるそうだ。しかし、退出するしか選択肢がないことと、見学を続ける選択肢がある上で退出を選択することはまったく意味が異なるだろう。少数でも使用されたということは、これまで見学を途中で諦めなければいけなかった利用者が見学可能になったということである。社会的に多様性への配慮が求められるようになっていることもあり、公共の場でもある博物館では、このような取り組みが必要となってくるのではないだろうか。

また、今回の更新では操作卓を以前より広く快適にし、床を交換しやすいタイルカーペットにしている。更新は目標ではなく、はじまりであるという言葉がまとめの中にあっただように、また次の更新までの期間を維持管理していかなければならないことを考えると、使いやすく余計なストレスが無いこと、保守しやすいことも更新時に検討すべき大切な要素であると感じた。



図2 開会挨拶の様子。

### プラネタリウム投影「星空テラス」の見学

当日の星空や注目の天文現象などを中心に紹介する番組「星空テラス」の上映を見学させていただいた。開場するとどンドン席が埋まっていき、ほぼ満席に近い盛況ぶりであった。来館者のプラネタリウムへの需要と関心の高さが伺える。今回の更新では、星空や映像が鮮明に美しくなったことに加えて、番組内でJAXA相模原キャンパスについての紹介をしている。月ごとに内容が変わることになっており、今月は無電波響室というアンテナ開発に関わる設備の紹介であった。このような地域の特性を活かした内容は独自性があり、魅力的である。

### プラネタリウム更新の経緯について

プラネタリウムの更新は、令和4年度の実現に向けた調整から令和7年度のリニューアルオープンまで4年かけて行われたが、発端は平成25年度まで遡るということである。当時は実現に至らなかったものの、市の施策として宇宙教育普及事業が実施され、その後も予算請求の機会などを通じてプラネタリウム更新の必要性を継続的に訴えてかけてきた。また、JAXA相模原キャンパスがあることから、博物館以外でも宇宙や天文に直接または間接的に関係する施策が継続されているという地域の特色がある。このような背景もあり、他施策との連携によってプラネタリウムの更新が少子化対策事業の施策に位置づけられたことで更新の決定へと至っていた。最終的な合意を得る過程では、プラネタリウムの更新についての必要性だけでなく、更新をしなければいけない必然性が重要視されたということであった。

プラネタリウムの更新が決定した次年度には事業者の選定と事業費の確保に動いており、3年目に

は着工に向けた準備と実施、4年目には更新後の運営や関連事業の準備を経てリニューアルオープンおよび関連事業の実施と、更新の実現に至るまでの過程は多岐にわたっている。様々な業務への対応が求められる中で円滑に進行していくには、できることを柔軟に考えていくことが大切ということであった。

### ポケモン天文台

自由見学の際に、ポケモン天文台も見学させていただいた（図3）。閉館時刻の迫る平日16時過ぎでも待機列があり、人気の高さが伺えた。会期の始まった11月の来館者が例年に比べて5倍近くなったというその集客力は凄まじいものである。

ポケモンの大型模型や限定のデザインというキャッチーな部分もあるが、総合監修が国立天文台ということもあり、天文の内容について説明しながら関連するポケモンが登場するという展示内容であった。ポケモンについてもその背景を知ること面白さを感じるとともに、ポケモンをきっかけに天文についても知るきっかけとなる展示だと感じた。



図3 ポケモン天文台の様子。

### おわりに

研修会には初めて参加させていただいたが、他館の事例について実際の過程と共に知ることができ、今後の参考となる有意義な時間であった。特に、必要性よりも必然性が求められたということは印象的であり、日々の業務においても意識していくべき大切な視点である考えさせられた。

最後にこのような研修会を実施いただいた相模原市立博物館の皆様、県博協の事務局および幹事の皆様に感謝を申し上げます。

## 協会記事

### 神奈川県博物館協会総合防災計画活動報告

総合防災計画推進委員会 委員長 武田 周一郎

2025（令和7）年度は、総合防災計画の関係者へのヒアリングを行い、計画の運用面での工夫に向けた検討に着手した。また、川崎市市民ミュージアムのご協力を得て、川崎市麻生区に移転した同館で実習を伴う講習会を実施した。本年度の活動の概要は、本稿執筆時点で実施予定のものも含めて次のとおりである。

#### 総合防災計画関係者へのヒアリング

神奈川県博物館協会の総合防災計画は、2016（平成28）年に策定された。それから現在に至るまで、川崎市市民ミュージアムの被災をはじめとする様々な動向があり、総合防災計画を巡る状況は大きく変化している。そこで、10年にわたる取組を振り返るとともに運用面での工夫につなげるため、計画策定時や川崎市市民ミュージアム被災時の当協会関係者と、総合防災計画推進委員とで意見交換する機会を設けた。

川崎市市民ミュージアムの被災資料救援活動（以下、レスキュー）については、研修会や会報等を通じてその取組が共有されてきた。これらを通覧すると、発災からレスキュー着手に至る当協会事務局の動向に関する記録は、レスキュー参加者によるものと比べて少ない。この点に着目した西澤文勝副委員長（神奈川県立生命の星・地球博物館）が課題や質問事項等を整理したうえで、ヒアリングを実施した。ヒアリング参加者は望月一樹氏（会長）、丹治雄一氏（事務局次長）、竹内廣一氏（事務局員）、杉山誠氏（事務局員）、角田拓朗氏（神奈川県立歴史博物館）である。各氏ともに現在に至るレスキューに参加者や協会事務局として関与している。また、竹内氏と角田氏は2016年の計画策定に携わった。ヒアリングの概略は、次のとおりである。

まず、発災から総合対策本部の立ち上げ、レスキュー着手といった流れが、時系列に沿って詳細に把握できた。既に会報等を通じて周知の動向も

多いが、それ以外にも関係者が情報収集や関係機関との調整等に奔走していた様子が分かった。手探りのなかでレスキューを軌道に乗せた経緯を参照すれば、次なる災害に直面しても速やかに初動対応が取れるであろう。ただし、当時と現在とでは状況が異なる点もある。その点を踏まえ、総合防災計画に基づく災害発生時における相互救済の仕組みについて、現状に即してフローチャートのようなかたちでまとめておきたいと考えている。

次に初動対応にあたっては、被災館に関する情報を把握している個人の力が起点になっていた状況が分かった。つまり、平時から加盟館園同士がつながっている関係性が、有事における相互救済の仕組みに有益であったといえる。その経験を今後活かすためには、例えば、研修会で各館園のバックヤードを見学しあうといった工夫が有益かもしれない。もちろん、日常業務が山積するなか、職員個人が日頃から他館との関係を維持するのは容易ではない。そのような観点では、個人の力に頼らず組織として対処していくための制度設計が肝要である。実際、委員長と副委員長は、活動が属人的にならないように単年度での交代を基本として運用されてきた。このほかにも、ヒアリングで知り得た先人の経験や意図は多岐にわたり、参加者に感謝申し上げる。

大きな収穫があったと同時に取り組むべき課題も見えてきたが、現時点では総合防災計画や関連する要綱自体の見直しは必要ないと考えている。今年度は課題解決の具体的な試みには至らなかったが、平時の積み重ねの一つとして来年度につなげたい。

#### 川崎市市民ミュージアムでの講習会

川崎市市民ミュージアムは、2023（令和5）年に川崎市麻生区の新事務所へ移転した。近年における当協会からのレスキュー参加実績は、同年度には活動日数18日、のべ参加者数28人（9館園）、

2024（令和6）年度は活動日数22日、のべ参加者数24人（4館園）であった。加盟館園の皆様には継続的にご協力いただいている一方、参加者が固定化される傾向にある。かくいう筆者もレスキューには赴いておらず、参加を広く呼びかけるための工夫は喫緊の課題であった。

このような状況のもと、川崎市市民ミュージアムから水損紙資料の応急処置をテーマとした講習会についてご提案いただいた。そこで、講習会を2025年12月18日と2026（令和8）年1月30日に同じ内容で開催する運びとなった。第1回の参加者は10名、第2回は12名（いずれも（事務局含む）で、概要は次のとおりである。

まず、午前中は谷拓馬氏（川崎市市民ミュージアム学芸員）から講義1「川崎市市民ミュージアムにおける水損紙資料のレスキュー」として、被災からレスキュー開始までの経過やレスキューの流れをご紹介いただいた。次に、谷氏から講義2「水損紙資料におけるクリーニングの種類と方法」として、ドライクリーニング、浸漬洗浄、スプレー洗浄の概要と、このうち本講習会で実習する浸漬洗浄の流れをご説明いただいた。

続いて、午後は水損紙資料を用いた洗浄と乾燥の実践に取り組んだ。事前に洗浄の手順を紹介する動画が共有されていたこと、またスタッフがマンツーマンで手厚く対応してくださったことから、作業は安心して進められた。最後に質疑応答があり、作業の手順はスタッフの意見を取り入れながら創意工夫が図られている状況等が紹介された。講義と実習を通じて具体的な手順を体験できる講習会は、継続的な参加促進のために資するところが大きいと実感した。

折しも本年、川崎市市民ミュージアムでは「新たなミュージアムに関する基本計画」の策定、旧施設お別れイベントの開催、レスキューに関する書籍『水害と博物館』の刊行といった様々な動向があった。そのようななかで日々のレスキューに取り組みながら、講習会を準備してくださったス

タッフの皆様に敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

## 防災訓練

本年度の防災訓練は、2026年2月4日に実施予定である。台風を想定した遠隔の被害状況伝達訓練とし、主に次の2点を工夫した。

まず、被害状況の伝達手段として、従来の電子メールとファクシミリとともに、ウェブフォーム（Googleフォーム）を加えた。ウェブフォームは情報セキュリティの制約上、利用できない館園があり、かつ情報集約の具体的な手順についても検討を要する。しかし、伝達手段の工夫は従来も提起されてきた課題であり、今回の試行結果が今後の判断材料になればと考えている。

次に、今回の想定災害である平成26年台風18号の概要と特徴について西澤副委員長が詳しく整理したうえで、洪水浸水想定区域図等とあわせて事前に周知することとした。これらの情報を踏まえて、各館園の状況に応じて被害を想定してもらうとともに、事務局とブロック幹事館園で被害想定と被害連絡票の内容を検証するなどして、訓練の実効性を高めたい。

なお、本年7月30日にはカムチャツカ半島付近でマグニチュード8.8の地震が発生し、相模湾・三浦半島に津波警報が、東京湾内湾に津波注意報が発表された。これを受けて、推進委員間で連絡をとりながら、会長や事務局とともに事態の推移を注視した。ちょうど先述したヒアリング後にあたり、委員の関心が高い状況もあってこのような行動に結びついたところであったが、平時の準備がいかに必要であるかを痛感した。

翻って、平時の取組の重要性については、各年度の活動報告を通じて強調されてきた。その行き着くところは、収蔵庫の安全を担保することにほかならない。その大きな目標を意識しながら、有事に備える必要があると考えている。

## 令和6年度事業報告

### 1 会議

#### (1) 総会

日時 令和6年5月10日(金)13:30~14:40  
 場所 神奈川県立歴史博物館 講堂 (地階)  
 議題 ア 令和6年度役員の交替について  
 イ 令和5年度事業報告及び決算・監査報告について  
 ウ 令和6年度事業計画及び予算案について  
 エ その他  
 報告事項 ア 新規入会の館園について  
 イ 令和6年度川崎市市民ミュージアム被災資料救援活動について  
 ウ その他  
 その他  
 令和6年度神奈川県博物館協会表彰について

#### (2) 役員会

##### 第1回

日時 令和6年5月10日(金)10:00~12:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 講堂 (地階)  
 協議事項 ア 令和6年度役員の交替について  
 イ 令和5年度事業報告及び決算・監査報告について  
 ウ 令和6年度事業計画及び予算案について  
 報告事項 ア 新規入会の館園について  
 イ 令和6年度川崎市市民ミュージアム被災資料救援活動について  
 ウ その他

##### 第2回

日時 令和6年11月1日(金)14:00~16:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 講堂 (地階) 及び ZOOMミーティング  
 報告事項 ア 令和6年度事業実施状況について  
 イ 東海地区博物館連絡協議会事務局 令和7年度担当県にあたり  
 ウ その他  
 その他

##### 第3回

日時 令和7年2月28日(金)14:00~17:00  
 場所 横浜美術館 円形フォーラム  
 協議事項 ア 令和6年度決算見込みについて  
 イ 令和7年度事業計画及び予算(案)について  
 ウ 令和7年度神奈川県博物館協会表彰について  
 エ 令和7年度川崎市市民ミュージアム被災資料救援活動について  
 報告事項 ア 令和6年度事業実施状況について  
 イ その他  
 その他 横浜美術館リニューアルオープン記念展 「おかえり、ヨコハマ」 見学

#### (3) 合同部会

##### 第1回

日時 令和6年5月17日(金)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館応接室 (2階) 及び ZOOMミーティング  
 議題 ア 令和6年度部会幹事の交替について  
 イ 令和6年度事業の実施状況(計画)について  
 (ア) 普及事業について  
 ・「協会報第96号」について  
 ・協会WEBリニューアルについて  
 ・WEB学芸員の仕事

・WEBミュージアムマップ  
 ・「加盟館園職員名簿-2024年版」について  
 (イ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について  
 (ウ) 広報事業について  
 (エ) 研修事業について  
 ・令和6年度研修計画について

##### 第2回

日時 令和6年7月19日(金)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 応接室 (2階) 及び ZOOMミーティング  
 議題 ア 令和6年度事業の実施状況 (計画) について  
 (ア) 普及事業について  
 ・「協会報第96号」について  
 ・協会WEBリニューアルについて  
 ・WEB学芸員の仕事  
 ・WEBミュージアムマップ  
 ・「加盟館園職員名簿-2024年版」について  
 (イ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について  
 (ウ) 広報事業について  
 (エ) 研修事業について  
 ・令和6年度研修計画について  
 イ その他

##### 第3回

日時 令和6年9月20日(金)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 応接室 (2階) 及び ZOOMミーティング  
 議題 ア 令和6年度事業の実施状況 (計画) について  
 (ア) 普及事業について  
 ・「協会報第96号」について  
 ・協会WEBリニューアルについて  
 ・WEB学芸員の仕事  
 ・WEBミュージアムマップ  
 (イ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について  
 (ウ) 広報事業について  
 (エ) 研修事業について  
 ・令和6年度研修計画について  
 イ その他

##### 第4回

日時 令和6年11月15日(金)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 応接室 (2階) 及び ZOOMミーティング  
 議題 ア 令和6年度事業の実施状況 (計画) について  
 (ア) 普及事業について  
 ・「協会報第96号」について  
 ・協会WEBリニューアルについて  
 ・WEB学芸員の仕事  
 ・WEBミュージアムマップ  
 (イ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について  
 (ウ) 研修事業について  
 ・令和6年度研修計画について  
 イ その他

##### 第5回

日時 令和7年1月23日(木)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 応接室 (2階) 及び ZOOMミーティング  
 議題 ア 令和6年度事業の実施状況 (計画) について  
 (ア) 普及事業について  
 ・「協会報第96号」について  
 ・協会WEBリニューアルについて

- ・WEB学芸員の仕事
- ・WEBミュージアムマップ
- (イ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について
- (ウ) 研修事業について
  - ・令和6年度研修計画について
  - ・令和7年度研修計画 企画案について
- イ その他

第6回

- 日時 令和7年3月7日(金)15:00~17:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館 応接室(2階)及び  
 ZOOMミーティング
- 議題  
 ア 令和6年度事業の実施状況について  
 イ 令和7年度事業実施計画について  
 (ア) 普及事業について
  - ・「協会報第97号」について
  - ・「加盟館園職員名簿-2025年版」について
  - ・協会WEBリニューアルについて
    - ・WEBサイトリニューアル
    - ・WEB学芸員の仕事
    - ・WEBミュージアムマップ- (イ) 広報事業について
- (ウ) 神奈川県博物館協会総合防災計画について
- (エ) 研修事業について
  - ・令和7年度研修計画について
- ウ その他

2 研修

(1) 部会主催研修会

第1回

- 日時 令和6年5月10日(金)15:00~17:30  
 場所 神奈川県立歴史博物館  
 内容 特別展「近代輸出漆器のダイナミズム  
 —金子船彦コレクションの世界—」解説と見学  
 神奈川県立歴史博物館学芸員 鈴木愛乃氏
- 講師 文化庁博物館支援調査官 中尾智行氏
- 担当部会 3部会合同  
 参加者 73名

第2回

- 日時 令和6年7月12日(金)13:00~16:20  
 場所 横浜開港資料館  
 内容 「デジタルアーカイブズの運用と課題」  
 講演と事例発表
- 講師 日本大学生物資源科学部教授 野村正弘氏  
 横浜開港資料館調査研究員 神谷大介氏  
 茅ヶ崎市博物館館長 須藤 格氏  
 小田原市立郷土文化館主事 吉野文彬氏
- 担当部会 人文科学部会  
 参加者 62名

第3回

- 日時 令和6年10月1日(火)13:00~17:00  
 場所 横浜みなと博物館  
 内容 「展示リニューアルを経て、より魅力ある展示の  
 実現に向けた「横浜みなと博物館」の試み」  
 講演と展示見学・解説
- 講師 横浜市港湾局みなと賑わい振興部 小國恒之氏  
 解説 横浜みなと博物館学芸員 三木 綾氏  
 ” 奥津憲聖氏
- 担当部会 機能研究部会  
 参加者 43名

第4回

- 日時 令和6年12月13日(金)13:00~17:00  
 場所 よこはま動物園 ブーラシア

- 内容 「周年事業のあれこれ〜動物園・水族館・  
 博物館の事例紹介〜」事例報告と見学
- 講師 よこはま動物園ブーラシア飼育展示係  
 有馬 一氏  
 新江ノ島水族館企画担当 北田 貢氏  
 神奈川県立生命の星・地球博物館学芸部長  
 佐藤武宏氏

担当部会 自然科学部会

参加者 45名

第5回

- 日時 令和7年2月8日(土)13:00~17:00  
 場所 横浜市歴史博物館 講堂  
 内容 「博物館と学校連携について〜博物館の  
 使い方〜」講演とシンポジウム(一般参加)
- 講師 横浜市歴史博物館副館長 刈田 均氏  
 小田原市郷土文化館学芸員 土屋健作氏  
 相模原市立博物館学芸員 秋山幸也氏  
 横須賀市自然・人文博物館学芸員 内船俊樹氏
- コメント 鎌倉学園中学・高等学校教諭 風間 洋氏  
 小田原市立早川小学校教諭 山田恵里氏
- 担当部会 3部会合同  
 参加者 85名(加盟館園51名 一般(学校関係中心)34名)
- (2) 文部科学省等主催会議・研修会の紹介  
 文部科学省、文化庁等が主催する会議・研修会要項  
 を各館園に案内

3 普及事業

- (1) 神奈川県博物館協会会報96号  
 令和7年3月発行(700部)
- (2) 加盟館・園職員名簿  
 令和6年8月発行  
 (PDFデータにて加盟館園へ配信済)
- (3) リーフレット「ぐるりかながわミュージアムマップ」の  
 合同部会WEBミュージアムマップ委員会にて  
 リニューアル協会ウェブサイト(スマホ版対応)  
 公開に向けサイトデザイン開発中。

4 広報事業

現行の県博物館協会ウェブサイトでは、加盟館園の個別情  
 報の更新(新規入会館園情報等)、協会報96号のPDF掲  
 載、協会活動報告更新、X(旧Twitter)活用による情報発  
 信等を実施。

5 神奈川県博物館協会総合防災計画事業

- (1) 令和6年度防災訓練の実施(遠隔情報伝達訓練)
- 日時 令和6年11月12日(火) 10:00~13:00  
 場所 神奈川県立歴史博物館  
 内容 ①南海トラフ地震を想定した被害情報伝達訓練  
 (遠隔伝達訓練)  
 ②100館園中61館園参加。訓練後、ブロック幹事  
 館園担当者間にて意見交換実施。
- (2) 関連機関等との連携、情報交換等  
 ・令和6年度県・市町村文化財大規模災害対策検討分科会  
 に総合防災計画推進委員長が出席  
 第1回(令和6年10月11日(金))  
 第2回(令和7年2月6日(木))
- (3) 川崎市市民ミュージアム被災資料救援活動  
 令和6年度救援活動参加状況  
 活動日数22日、のべ参加者数24名(4館園)

- 6 70周年記念事業への取り組み状況について  
 ・協会WEBのリニューアルサイトのデザイン開発

- ・WEB「学芸員の仕事」のコンテンツ検討と公開準備
- ・WEBミュージアムマップのコンテンツと公開準備

7 表彰事業

(1) 神奈川県博物館協会表彰

功労者1名永年勤続者12名の被表彰者を令和6年5月10日の総会にて表彰。

功労者

・相模原市立博物館 佐々木春美 様

永年勤続者

・神奈川県立公文書館 上田良知 様

・新江ノ島水族館 志村真由子 様

” 保崎好美 様

” 水村由美 様

・横須賀市自然・人文博物館 内船俊樹 様

” 菊地勝広 様

” 萩原清司 様

・横浜市立野毛山動物園 五十嵐真由美様

・横浜美術館 大沢知二 様

” 木下貴博 様

” 中村尚明 様

” 八柳サエ 様

(2) 日本博物館協会顕彰

令和6年11月27日(水)第72回全国博物館大会にて下記のとおり表彰

(会場：まつもと市民芸術館 (長野県松本市))

・永年勤続者 4 名

・新江ノ島水族館 井上麻子 様

” 岩崎猛朗 様

・神奈川県立金沢文庫 瀬谷貴之 様

・神奈川県立近代美術館 三本松倫代 様

(3) 東海地区博物館連絡協議会表彰

該当者なし

8 東海地区博物館連絡協議会への参加

(1) 令和6年度東海地区博物館連絡協議会・(公財)日本博物館協会東海支部 理事会・総会・講演会・施設見学会 (山梨県開催)

日 時 令和6年8月2日(金) 【会 場】

12:30~13:20 理事会 山梨県立博物館生涯学習室

13:00~14:20 総 会 ”

14:30~16:00 講演会 ”

「貨幣の変遷と新紙幣に描かれた人物」

講師：亀井大輔氏((株)山梨中央銀行学芸員)

16:05~17:00 施設見学会 山梨県立博物館企画展示室

夏期企画展

『どうぶつ百景 江戸東京博物館コレクションより』

出席者

・神奈川県立歴史博物館長 望月一樹 (理事)

・新江ノ島水族館長 崎山直夫 (理事)

・相模原市立博物館主任 山本菜摘 (部会長)

・神奈川県立歴史博物館学芸部長 丹治雄一 (事務局)

(2) 東海地区博物館連絡協議会60周年記念事業の実施運用

・「東海5県ミュージアムおでかけガイド」の加盟館園

展示・イベント情報公開によるサイト運用

※「東海5県ミュージアムおでかけガイド」URL

: <https://toukai5kenpakukyo.com/news/>

または、東海5県ミュージアム で検索

9 日本博物館協会事業への協力

・第72回全国博物館大会への参加

ア 日 時 令和6年11月27日(水)~29日(金)

イ 開催場所 まつもと市民芸術館主ホール  
(長野県松本市)

ウ テ ー マ 「文化観光と博物館~文化の魅力を伝えるために博物館ができること~」

エ 出席者 神奈川県立歴史博物館 望月一樹  
(日本博物館協会参与)

## 令和6年度 収入支出決算書

総収入額 2,916,172円  
 総支出額 2,205,705円  
 差引残額 710,467円(翌年度繰越金)

## 収入の部

(単位：円)

科目	予算額 (A)	収入済額 (B)	増減額 (B-A)	摘要
1 会費	2,229,000	2,229,000	0	会費収入
2 雑収入	15	1,010	995	預金利息
3 繰越金	686,162	686,162	0	5年度からの繰越
合計	2,915,177	2,916,172	0	

## 支出の部

(単位：円)

科目	予算額 (A)	支出済額 (B)	残額 (A-B)	摘要
1 事務局	496,000	347,640	148,360	
(1) 旅費	134,000	75,714	58,286	東海地区博物館連絡協議会理事会・総会、全国博物館大会 事務局旅費
(2) 通信費	257,000	194,813	62,187	刊行物送付 事務連絡ほか
(3) 印刷 消耗品費	105,000	77,113	27,887	封筒印刷代、事務用消耗
2 会議費	77,000	55,767	21,233	役員会、部会等、全国博物館大会
3 事業費	2,016,000	1,649,188	366,812	
(1) 研修費	211,000	58,872	152,128	講師謝礼 会場使用料ほか
(2) 普及費	1,710,000	1,495,440	214,560	神奈川県博物館協会会報第96号 加盟館園職員名簿(内製) かながわミュージアムマップ2024-2025(休刊) ホームページ維持・更新経費
(3) 表彰費	95,000	94,876	124	表彰状筆耕料・記念品代ほか
4 負担金	54,000	53,110	890	東海地区博物館連絡協議会 神奈川県自然保護協会 神奈川県観光協会
5 積立金	100,000	100,000	0	総合防災計画事業積立金
6 予備費	172,177	0	172,177	
合計	2,915,177	2,205,705	709,472	

令和6年度 神奈川県博物館協会総合防災計画積立金 収入支出決算書

総収入額 2,444,065円  
 総支出額 400,000円  
 差引残額 2,044,065円(翌年度繰越金)

収入の部

(単位：円)

科 目	予算額 (A)	収入済額 (B)	増減額 (B-A)	摘 要
1 過年度繰入収入	1,943,018	1,943,018	0	「60周年」記念事業を原資とする
2 負担金収入	400,000	400,000	0	川崎市からのレスキュー支援者交通費等(概算払)
3 積立金繰入収入	100,000	100,000	0	令和6年度積立金 100,000
4 雑収入	20	1,047	1,027	預金利息 1,047
合 計	2,443,038	2,444,065	1,027	

支出の部

(単位：円)

科 目	予算額 (A)	支出済額 (B)	増減額 (B-A)	摘 要
1 旅 費	360,000	49,094	310,906	レスキュー交通費等
2 通 信 費	40,000	4,565	35,435	レスキュー交通費等振込手数料
3 印刷消耗品	0	0	0	
4 負担金	0	346,341	△ 346,341	川崎市交通費等負担金の精算
5 予 備 費	2,043,038	0	2,043,038	6年度末積立予定額
合 計	2,443,038	400,000	2,043,038	

## 令和6年度神奈川県博物館協会役員名簿

会 長	神奈川県立歴史博物館長 望 月 一 樹	理 事	鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム館長 吉 田 茂 穂
副会長	横浜開港資料館長 西 川 武 臣	"	神奈川県立生命の星・地球博物館長 田 中 徳 久
"	新江ノ島水族館長 崎 山 直 夫	"	箱根町立郷土資料館長 鈴 木 康 弘
"	平塚市博物館長 浜 野 達 也	"	相模原市立博物館長 並 木 さとみ
理 事	神奈川県立金沢文庫長 向 坂 卓 也	"	大磯町郷土資料館長 北 水 慶 一
"	(公財)三溪園保勝会三溪園長 海 野 晋 哉	"	横浜市立野毛山動物園長 田 村 理 恵
"	シルク博物館長 高 橋 典 子	"	鎌倉国宝館長 山 本 勉
"	横浜美術館経営管理グループ長 山 本 ゆう子	監 事	厚木市産業文化スポーツ部次長 能 條 隆 広
"	川崎市市民ミュージアム館長 蛭 川 泰 行	"	かわさき宙と緑の科学館長 久 保 愼太郎
"	神奈川県立大船フラワーセンター園長 榎 本 浩	"	横須賀市自然・人文博物館 博物館・運営課長 北 山 剛

## 令和7年度神奈川県博物館協会役員名簿

会 長	神奈川県立歴史博物館長 望 月 一 樹	理 事	神奈川県立生命の星・地球博物館長 田 中 徳 久
副会長	横浜開港資料館長 西 川 武 臣	"	箱根町立郷土資料館長 落 合 雅 人
"	新江ノ島水族館長 崎 山 直 夫	"	相模原市立博物館長 並 木 さとみ
"	平塚市博物館長 浜 野 達 也	"	大磯町郷土資料館長 北 水 慶 一
理 事	神奈川県立金沢文庫長 向 坂 卓 也	"	横浜市立野毛山動物園長 田 村 理 恵
"	(公財)三溪園保勝会三溪園長 海 野 晋 哉	"	鎌倉国宝館長 山 本 勉
"	シルク博物館長 高 橋 典 子	監 事	厚木市産業文化スポーツ部文化魅力創造課長 井 出 愼
"	横浜美術館経営管理グループ長 田 村 賢 太	"	かわさき宙と緑の科学館長 久 保 愼太郎
"	川崎市市民ミュージアム館長 井 上 強	"	横須賀市自然・人文博物館 博物館・運営課長 北 山 剛
"	神奈川県立大船フラワーセンター園長 榎 本 浩		



## 令和7年度神奈川県博物館協会部会幹事・事務局名簿

人文科学部会長	横浜市歴史博物館 吉井大門	「神奈川県博物館協会総合防災計画推進委員会」 委員長(専任) 神奈川県立歴史博物館
人文科学部会幹事	小田原市郷土文化館 土屋健作	委員 武田周一郎
”	日本新聞博物館 阿部圭介	委員 神奈川県立生命の星・地球博物館 西澤文勝
”	横浜ユーラシア文化館 竹田多麻子	「協会WEBリニューアル推進委員会」 ○WEB学芸員の仕事編集委員会
”	馬の博物館 金澤真嗣	委員長 小田原市郷土文化館 土屋健作
”	平塚市博物館 新宮崇弘	委員 かわさき宙と緑の科学館 高中健一郎
自然科学部会長	かわさき宙と緑の科学館 高中健一郎	” 横浜ユーラシア文化館 竹田多麻子
(総括部会長)	高中健一郎	” 相模原市立博物館 山本菜摘
自然科学部会幹事	よこはま動物園ズーラシア 渡邊恵	” 馬の博物館 金澤真嗣
”	新江ノ島水族館 笠松舞	○WEBミュージアムガイド編集委員会 委員長 新江ノ島水族館 笠松舞
”	神奈川県立生命の星・地球博物館 折原貴道	委員 横浜市歴史博物館 吉井大門
”	横須賀市自然・人文博物館 山本薫	” 鎌倉国宝館 有山佳孝
機能研究部会長	相模原市立博物館 山本菜摘	” 横須賀市自然・人文博物館 山本薫
機能研究部会幹事	鎌倉国宝館 有山佳孝	○WEBサイトマップ委員会 事務局+上記2WEB委員会委員(兼務)
”	神奈川県立生命の星・地球博物館 西澤文勝	「広報委員会」 委員長 神奈川県立歴史博物館 武田周一郎
”	神奈川県立歴史博物館 武田周一郎	委員 かわさき宙と緑の科学館 高中健一郎
”	川崎市市民ミュージアム 山崎千加子	事務局 事務局長 神奈川県立歴史博物館 副館長 江尻睦
「神奈川県博物館協会会報」第97号編集委員会(令和7年度)		事務局次長 神奈川県立歴史博物館 学芸部長 丹治雄一
委員長	神奈川県立生命の星・地球博物館 折原貴道	事務局員(会計) 神奈川県立歴史博物館 主任専門員 竹内廣一
委員	よこはま動物園ズーラシア 渡邊恵	事務局員(事務) 神奈川県立歴史博物館 杉山誠
”	日本新聞博物館 阿部圭介	
”	川崎市市民ミュージアム 山崎千加子	
”	平塚市博物館 新宮崇弘	

## 神奈川県博物館協会会則

議決 昭和30年11月20日 最終改正 平成15年 4月25日

### 名称

第1条 本会は、神奈川県博物館協会と称する。

### (事務所)

第2条 本会は、事務所を横浜市中区南仲通5の60番地、神奈川県立歴史博物館内に置く。

### (目的)

第3条 本会は、博物館相互の連携をはかり、博物館活動の振興に努め、もって、学術文化の進展に寄与することを目的とする。

### (事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 博物館相互の連絡と提携
- (2) 博物館事業に関する調査研究
- (3) 研究会、研修会等の開催
- (4) 機関紙の発行、研究成果の発表
- (5) 資料の交換・貸借のあっせん及び共同事業の企画・促進
- (6) その他目的達成に必要な事業

### (会員)

第5条 本会の会員は、神奈川県内にある博物館及びこれに準ずる施設とする。ただし、個人であっても本会の運営に貢献度の高い者は、役員会の議を経て特別会員とすることができる。

### (会費)

第6条 会員は、総会において別に定めるところにより、会費を負担しなければならない。

### (入会)

第7条 本会に入会しようとするときは、入会申込書を会長に提出しなければならない。

2 会長は、関係書類を審査の上これを専決し、直近の役員会に報告するものとする。

### (退会)

第8条 会員は、退会しようとするときは、その旨を会長に届け出なければならない。

### (会員資格の消滅)

第9条 会員が2年継続して会費を負担しなかったときは、会員資格が消滅するものとする。

### (役員)

第10条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 3名
- (3) 理事 25名以内(会長、副会長を含む。)
- (4) 監事 3名

### (役員を選任)

第11条 理事及び監事は、総会において選任する。  
2 会長及び副会長は、理事の互選とする。

### (役員職務)

第12条 会長は、本会を代表し、会務を総理する。  
2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。  
3 副会長の事務分掌については、会長が別に定める。  
4 理事は、会務の執行にあたる。  
5 監事は、会務及び会計を監査する。

### (役員任期)

第13条 役員任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。  
2 欠員補充による役員任期は、前任者の残任期間とする。

### (総会の開催)

第14条 総会は、会長が招集し、年1回以上開催するものとし、そのうち1回は、年度の初めとする。

### (総会の定足数)

第15条 総会は、会員の過半数以上の出席をもって成立する。ただし、委任状の提出があれば出席とみなす。

### (総会の議事)

第16条 総会は、会長が議長となり、この規約に別に定めがあるもののほか、次に掲げる事項を議決する。

- (1) 事業計画に関すること。
- (2) 予算及び決算の承認に関すること。
- (3) 会則の改廃に関すること。
- (4) 会費の額の決定に関すること。
- (5) その他会長が必要と認めた事項

2 議事は、出席した会員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (役員会の開催)

第17条 役員会は、会長が必要と認めたときに開催する。

(役員会の定足数)

第18条 役員会は、理事の過半数以上の出席をもって成立する。ただし、委任状の提出があれば出席とみなす。

(役員会の議事)

第19条 役員会は、会長が議長となり、この規約に別に定めるもののほか、次の事項について議決する。

- (1) 総会の議決した事項の執行に関すること。
  - (2) 総会に付議すべき事項
  - (3) その他総会の議決を要しない本会の業務の執行に関する事項
- 2 議事は、出席した理事の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(部 会)

第20条 本会の業務を円滑に推進するため、会員により構成する次の部会を置く。

- (1) 自然科学部会
  - (2) 人文科学部会
  - (3) 機能研究部会
- 2 各部会には、会員の互選により、部会長1名及び幹事若干名を置く。
- 3 部会長及び幹事は、部会を運営する。
- 4 部会長は、役員会に出席し、部会の運営状況について報告するとともに、意見を述べることができる。
- 5 部会長及び幹事の任期は、役員会の任期に準ずる。
- 6 部会に必要な事項は、会長が役員会の議を経て別に定める。

(名誉会長・顧問・参与)

- 第21条 本会に名誉会長、顧問及び参与を置くことができる。
- 2 名誉会長は、総会において推挙し、顧問及び参与は、役員会の推薦により会長が委嘱する。
  - 3 名誉会長は、本会の運営について助言し、顧問及び参与は、会長の諮問に応じ、役員会に出席して意見を述べることができる。

(経 費)

第22条 本会の経費は、会費、補助金及びその他の収入をもって充てる。

(会計年度)

第23条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

(事務局)

- 第24条 本会の事務を処理するため、事務局を置く。
- 2 事務局には、事務局長1名、事務局次長1名及び事務局員若干名を置く。
  - 3 事務局長、事務局次長及び事務局員は、会長が任免する。

(委 任)

第25条 本会の運営に関し、この会則に定めのない事項については、役員会の議を経て、会長が別に定める

付 則

本会則は、平成15年4月25日から施行する。

## 神奈川県博物館協会総合防災計画

平成28年4月28日策定・施行

### 1 趣 旨

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、多くの人命を奪い、さらには多くの文化財の毀損をももたらした。この教訓を踏まえ、現在 90 を越える加盟館園数となっている当協会では、今後も発生が想定される広域災害における文化財救済に一定の役割を果たす体制を構築することとし、平時から相互に協力しあいながら有事に備えるため、総合防災計画を策定する。

### 2 活動の内容

当協会としての活動は、平時の際には、役員会と適宜協議の上、部会幹事及び協会事務局が中心となり有事の備えとして必要な活動を行い、有事の際には、総合対策本部・現地対策本部を立ち上げ、部会幹事及び事務局が中心となり、加盟館園職員の協力を得て、救済計画を実施するものとする。

当協会としての活動は、①平時、②発生直後（一次救済）、③復興期（二次救済）の3段階において実施することとし、各段階の実施する活動は、次のとおりとする。なお、本活動の具体的運用のために、別途、要綱を定めることとする。

#### ①平時

- ・連絡網の整備〔ブロック化及び幹事館園の選定事務、連絡調整方法の検討等〕
- ・各館園の収蔵品の把握及びその目録・データベースのバックアップ支援
- ・災害復興用の資金及び備蓄の管理〔物資、人材等の把握

含む。〕

- ・防災訓練、関連実技研修会、県民向け普及啓発事業等の実施
  - ・本計画内容の修正〔県及び県内市町村との調整、他機関等のヒアリング含む。〕
- ②発生時（一次救済）
- ・連絡網の運用と被害の把握
  - ・総合対策本部並びに現地対策本部の設置
  - ・支援計画の策定と運用〔人員、物資、資金等の供出等〕
- ③復興期（二次救済）
- ・支援計画の継続運用
  - ・関係機関等との連絡調整の補助

### 3 活動の経費

本活動に要する経費は、神奈川県博物館協会60周年記念事業にかかる積立金残金を原資とし、以後、毎年度予算の範囲内で一定の金額を積み増して確保することとする。

### 4 計画の運用

本計画及び2により定める要綱の運用状況については、毎年1回総会に報告する。本計画の改廃については、役員会の協議を経て、総会が決定する。

また、2により定める要綱については、役員会が協議の上制定する。

なお、制定後役員会が要綱の改正を行った場合には、改正後速やかに会員に周知する。

## 神奈川県博物館協会災害時相互救済活動要綱

### 1 目的

本要綱は、神奈川県博物館協会総合防災計画（平成28年4月28日策定・施行）2に基づき、広域災害が発生した際に、博物館資料の次世代への継承や博物館活動の速やかな復旧に資するよう、各加盟館園が相互に救済しあい、被災資料の救済と保存安定化、被災博物館施設等の復旧等を行うことを目的とする。

### 2 対象

本要綱に基づく活動の対象は、神奈川県博物館協会に加盟する館園の所蔵資料及びその施設等とする。

### 3 体制

本活動は、すべての加盟館園が行うものとする。また、活動の効率化を図るべく、県域を複数のブロックに分割し、そのブロック単位で情報の収集や発信等を行うものとする。

#### (1) ブロックの分割方法

ブロックは、地理的な特性や館園の数などを考慮し定めるものとする。具体には、本要綱5（1）②に定めるアンケートの集計結果をもとに、役員会において協議の上、定めるものとする。

#### (2) 幹事館園の設置

当該ブロックの情報収集と発信を担うため、ブロックごとに幹事館園を定める。なお、幹事館園に不測の事態が生じた場合を想定し、幹事館園の補佐を行う館園として幹事補佐館園も定める。具体には、本要綱5（1）②に定めるアンケートの集計結果をもとに、役員会の協議により候補館園を挙げ、候補館園の同意を得て定める。

#### (3) 代表幹事館園の設置

幹事館園のとりまとめを行う代表幹事館園を定める。代表幹事館園は、当協会事務局が設置されている神奈川県立歴史博物館とする。神奈川県立歴史博物館が被災または不測の事態が生じた場合には、幹事館園の互選により、その代理を務めるものとする。

### 4 救済活動

具体的な救済活動は、次のとおりとする。

#### (1) 災害の発生時

加盟館園は、次の各号に該当する災害等が発生した場合、被災状況を事務局及び当該ブロックの幹事館園に提供するものとする。また、被災状況の報告はないが被災が推定される館園が存在する場合には、当該ブロック内の幹事館園は、情報をとりまとめ、事務局に提供するものとする。

- ①震度5以上の地震が発生した場合
- ②集中豪雨等による水害が発生した場合
- ③その他、甚大な被害を伴う災害等が発生した場合

#### (2) 救済活動実施の決定

事務局は、収集した情報を速やかに会長へ報告する。会長は、その報告に基づき、救済活動実施の是非を決定するものとする。なお、会長に事故あるときは、副会長または役員が決定するものとする。

#### (3) 一次救済（資料の救済計画の立案等）

会長は、救済活動の実施を決定した場合には、直ちに総合対策本部を設置するとともに、必要に応じて幹事館園等の協力を得て現地対策本部を設置する。総合対策本部又は現地対策本部は、一次救済として、被災館園の情

報収集、それに基づく救済計画の策定、現場作業の実施等を行うものとする。なお、被災し劣化が激しい資料、あるいは今後現状では確実に被災の恐れのある資料については、現場の判断により、緊急避難させるものとする。

#### ①総合対策本部の設置

会長は、代表幹事館園に総合対策本部を設置し、次の業務を行う。事務局は総合対策本部の事務局として、その経理事務等を行うものとする。

- i 救済活動開始の連絡
- ii 救済計画の策定
- iii 要員及び機材などの手配
- iv 現地対策本部への指示と支援
- v 自治体、外部団体等との連絡調整

#### ②現地対策本部の設置

会長は、被災ブロックの幹事館園に依頼し、現地対策本部を設置する。なお、当該館園に事故あるときは、幹事補佐館園がその任を務めるものとする。また、当該ブロック全域が被災し、その幹事館園または幹事補佐館園が務めを果たせない場合には、近隣ブロックの幹事館園に現地対策本部を設置するものとする。

- i 救済要員等に対する救済計画の説明
- ii 要員、機材などの受入
- iii 現場作業の指示
- iv 総合対策本部他との連絡調整

#### (4) 二次救済（資料の修復保管等）

本活動における二次救済では、被災した資料、または被災する恐れのある資料の保管や修復を行うものとする。

#### ①総合対策本部の業務

- i 救済計画の策定
- ii 要員及び機材などの手配
- iii 現地対策本部への指示と支援
- iv 自治体、外部団体等との連絡調整

#### ②現地対策本部の業務

- i 救済要員等に対する救済計画の説明
- ii 要員、機材などの受入
- iii 現場作業の指示
- iv 総合対策本部他との連絡調整

#### (5) 救済完了

総合対策本部及び現地対策本部を解散する場合には、以下の条件を満たすこととする。また、両本部の解散をもって、本要綱に基づく救済は完了とする。

- ①総合対策本部が現地対策本部から作業等の完了の報告を受け、了承すること
- ②事業完了について、関係する外部組織・団体等に報告、周知すること

### 5 平時の活動

(1) 平時においては、次の活動を着実に実行することとする。

- ①連絡網の作成とその年次更新
- ②加盟館園基礎データ収集のための必要に応じたアンケートの実施
- ③防災訓練
- ④災害対策に資する研修会
- ⑤その他本活動に資する事業

(2) 本活動の企画並びに実施は、部会が行うこととする。

6 経費

本活動に要する経費は、神奈川県博物館協会総合防災計画（平成28年4月28日策定・施行）3に定める財源により賄うものとする。

7 庶務

本救済活動に関する庶務は、事務局において処理するものとする。

8 その他

本要綱に定めのない事項については、会長が別に定めるところによるものとする。

付 則

本要綱は、平成28年4月28日から施行する。

本要綱は、令和5年3月3日から施行する。

### 神奈川県博物館協会総合防災計画に基づく積立金の取扱いに関する要綱

1 目的

本要綱は、神奈川県博物館協会総合防災計画（平成28年4月28日策定・施行。以下「総合防災計画」という。）3に基づく積立金の取扱いに関して必要な事項を定める。

2 会計

積立金額及びその執行状況を常に明らかにするため、積立金の会計は、通常の会計とは別に設ける。

3 原資及び積立額

積立金の原資は、神奈川県博物館協会60周年記念事業にかかる積立金残金とし、以後、毎年度おおむね10万円程度を目途に積み増すこととする。

4 積立金の執行基準

積立金は、総合防災計画に基づき協会が行う相互救済活動に要する経費に使用することとし、具体的には次表のとおりとする。

なお、平時に執行する経費は、年度ごとの積増し額のおおむね1/2程度とする。

5 被災館園への資機材等提供方法

被災館園の資機材等の提供方法については、購入等経費の負担のほか現物支給も可能とし、また併用も可能とする。なお、提供後は、被災館園の協力を得て受取証や領収証等支払関係書類を整理するものとする。

6 庶務

本要綱に基づく庶務については、事務局において処理するものとする。

7 その他

本要綱に定めのない事項については、会長が別に定めるところによるものとする。

付 則

本要綱は、平成29年4月21日から施行する。

	区 分	内 容	例 示
1	平 時	①防災用備蓄品の購入経費	防災用品・資料保存用消耗品の購入等
		②防災研修会・シンポジウム開催経費	資料作成代、会場借上費、講師謝金、消耗品費等
2	災害発生時	①被災館園から要望された資機材の購入経費等	消耗品費、備品購入費、賃借料、見舞金等
		②被災館園のレスキュー実施に要する経費	交通費、消耗品費等
3	その他	1及び2以外の経費で会長が必要と認める経費	日本博物館協会等が行うレスキュー活動への参加経費等

## 神奈川県博物館協会加盟館園名簿（五十音順）

（令和6年12月1日現在）

（事務局）〒231 0006 横浜市中区南仲通5-60 神奈川県立歴史博物館内  
TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

愛川町郷土資料館	電車とバスの博物館
あつぎ郷土博物館	松前記念館（東海大学歴史と未来の博物館）
神奈川工科大学厚木市子ども科学館	ニュースパーク（日本新聞博物館）
岩崎博物館（ゲート座記念）	日本大学生物資源科学部博物館
馬の博物館	日本郵船歴史博物館
江島神社奉安殿	箱根・芦ノ湖 成川美術館
海老名市温故館	箱根ジオミュージアム
大磯町郷土資料館	箱根写真美術館
大佛次郎記念館	箱根神社宝物殿
小田原市郷土文化館	箱根町立郷土資料館
小田原市尊徳記念館	箱根町立箱根湿生花園
小田原城	箱根町立森のふれあい館
小田原文化財団 江之浦測候所	箱根美術館
神奈川県立神奈川近代文学館	はだの歴史博物館
神奈川県立金沢文庫	葉山しおさい博物館
神奈川県立近代美術館	光と緑の美術館
神奈川県立公文書館	平塚市博物館
神奈川県立生命の星・地球博物館	藤沢市生涯学習部郷土歴史課
神奈川県立地球市民かながわプラザ	藤沢市湘南台文化センター子ども館
神奈川県立大船フラワーセンター	TOY MUSEUM
神奈川県立歴史博物館	報徳博物館
鎌倉宮宝物殿	真鶴町立中川一政美術館（真鶴町教育委員会）
鎌倉国宝館	真鶴町立遠藤貝類博物館（真鶴町教育委員会）
鎌倉歴史文化交流館	明治大学平和教育登戸研究所資料館
川崎砂子の里資料館	山口蓬春記念館
川崎市岡本太郎美術館	山手資料館
川崎市市民ミュージアム	大和市つる舞の里歴史資料館
かわさき宙と緑の科学館	町立湯河原美術館
川崎市立日本民家園	遊行寺宝物館
川崎市平和館	横須賀市自然・人文博物館
観音崎自然博物館	横浜開港資料館
観音ミュージアム	横浜市立金沢動物園
記念艦三笠	横浜市技能文化会館匠プラザ
熊野郷土博物館	横浜市こども植物園
相模川ふれあい科学館アクアリウムさがみはら	横浜市瀬谷区民文化センター あじさいプラザ
相模原市立博物館	横浜市鶴見区民文化センター サルビアホール
寒川神社方徳資料館	横浜市立野毛山動物園
三溪園	横浜市立間門小学校附属海水水族館
三之宮郷土博物館	横浜市歴史博物館
JICA横浜海外移住資料館	横浜高島屋ギャラリー
女子美アートミュージアム	よこはま動物園ズーラシア
シルク博物館	横浜都市発展記念館
松蔭大学資料館	横浜人形の家
新江ノ島水族館	横浜・八景島シーパラダイス・アクアリゾート
豆子市池子遺跡群資料館	横浜本牧絵画館
創価学会戸田平和記念館	横浜美術館
そごう美術館	横浜みなと博物館
茅ヶ崎市博物館	横浜ユーラシア文化館
茅ヶ崎市美術館	ロマンスカーミュージアム
彫刻の森美術館	若宮八幡宮郷土資料室
鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム	

\*各館園の詳細は各WEBページをご覧ください。



## 編集後記

第97号の編集にあたっては、昨年度の第96号と同じ体制で臨みました。そのお陰もあって、編集・校正作業を進める際の編集委員間での連携が非常にスムーズで、能率的に作業を進めることができました。それぞれ異なる館園に勤務する委員が分担作業に無理なく取り組めるよう配慮し調整することは、編集委員長としての大事な役割ですが、2年目を迎えてようやく慣れてきた気がしています。

今号では、読者からのご要望を受け、各記事のページ上部に出版年を追記しました。些細な点ではありますが、オンライン版の記事の閲覧時などに、より利便性が増したのではないかと思います。皆様におかれましても、本誌についてのご要望や改善点などがありましたら、ぜひ事務局にお知らせいただけますと幸いです。

また、今号では特集記事として、2025年2月に開催されたシンポジウム「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」の登壇者の方々に、同テーマについての記事を寄稿していただきました。様々な館での学校連携の事例紹介に加え、学校現場で働く先生方からの視点や課題も示され、博物館と学校との連携の在り方を再考する貴重な場となったのではないかと思います。私も今号の編集を通して、奇しくも、業務上の様々な場面で「連携」することの大切さを改めて強く感じました。

(編集委員を代表して 折原 貴道)

### 神奈川県博物館協会会報 第96号編集委員会

委員長	折原 貴道	(神奈川県立生命の星・地球博物館)
委員	阿部 圭介	(日本新聞博物館)
委員	新宮 崇弘	(平塚市博物館)
委員	渡邊 恵	(よこはま動物園ズーラシア)
委員	山崎千加子	(川崎市市民ミュージアム)

### 神奈川県博物館協会会報 第96号

令和8(2026)年3月25日発行

編集・発行 神奈川県博物館協会  
〒231-0006 横浜市中区南仲通5-60  
(神奈川県立歴史博物館内)  
TEL 045 (201) 0926  
刷 株式会社イメージパーク

本誌の記事および写真・図版類の無断複写・転載を禁じます。

この冊子は再生紙を使用しています。

## 特集 博物館と学校連携について

### 一般参加型シンポジウム

「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」の開催について

高中健一郎

様々な学校連携活動 ―横浜市歴史博物館を事例に―

刈田 均

学校収蔵資料を用いた企画展の開催と博学連携のあり方について

土屋 健作

高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう

秋山 幸也

市教委等既存事業を組み入れた新しい博物館イベント

《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状

内船 俊樹

これからの博学連携事業の可能性―高校歴史教員からのコメント―

風間 洋

学校と博物館の連携で生まれる学び

山田 恵里

## 寄稿

占領期新興新聞資料の価値と可能性

工藤 路江

戦後 80 年 太平洋戦争関係所蔵資料データ等の公開について

島宗美知子

今日における博物館紀要等刊行物の流通に対する一考察

―大磯町郷土資料館を事例として―

真保 元

博物館機能をもつ町立観光施設による町外県立高校図書館展示の意義と実践

山川隆良・小笹直人・鈴木聖美

## 研修会

令和 6 年度 第 5 回研修会 シンポジウム

「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」参加記

市野 悦子

令和 7 年度 第 1 回研修会

「神奈川県立生命の星・地球博物館におけるインクルーシブな企画展の取り組みと特別展示室の照明更新について」に参加して

亀ヶ谷千尋

令和 7 年度 第 2 回研修会

「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」参加記

加藤 志帆

令和 7 年度 第 3 回研修会

『博物館の連携事業～巡回展、共通テーマによる展示、館外連携の事例紹介～』に参加して

町田 勇樹

令和 7 年度 第 4 回研修会

相模原市立博物館のリニューアルしたプラネタリウムの見学と解説に参加して

柴野 達彦

## 協会記事

表紙解説・編集後記

折原 貴道